令和元年度

研修集録

秋田県立横手高等学校

「大学入試を突破する力＋社会を牽引する力」の育成へ

校長　木　村　利　夫

この３月に経団連が、「EdTech を活用した Society 5.0 時代の学び～初等中等教育を中心に～」と題した提言を公表した。現状の課題や望ましい人材育成のあり方、必要となる環境整備などをまとめている。主な点を挙げると、次のとおりである。

①教科教育は、教員による一律の講義形式の授業によっては、限られた人数の教員が多くの児童・生徒の習熟度をきめ細かに把握し、対応することには限界があると指摘。多くの EdTech を活用し効率化することで、個別最適化された学びを実現し、探究型学習などに時間を割くことが期待できる。

②探究型学習においては、社会課題など答えのない問題に対して、チームで取り組むことで、協働力・コミュニケーション能力を育むこと、分野横断的に知識を活用した学び（STEAM 教育など）を通じて課題発見・解決能力を養うことなどが望まれる。また、AI や IT、データの活用が引き起こす倫理的な問題などもあわせて学習することも求められる。

さて、アクティブラーニングという教育手法が提唱されてからしばらく経つが、高校の現場ではなかなか浸透しにくい様子も伺われる。原因の１つには、本校のような進学校では、グループ学習などで大学入試に対応できる学力を身につけさせることが果たしてできるのかという懐疑と、これまでに指導してきた手法、講義形式でも十分に対応できるではないかという自信があるように思う。確かに、たとえば「深い学び」が講義形式でなされないわけではないことは、自分自身のこれまでの教員生活で実感として感じる部分である。生徒からの質問あるいは生徒への質問でのやりとりで、「深い学び」につながっていたはずではないか、と。ただ、それがどれだけ多くの生徒になされていたかはいささか疑問ではある。一方で、生徒の授業アンケートでは、グループ学習などを積極的に取り入れて欲しいという声がある。小中学校では、積極的に取り入れていることから、生徒にしてみれば慣れ親しんだ方法で行ってほしいと思うことも理解できる。ただ、心配なのは学力面よりも、安心感など心理面の方での対応を望んでいるのではないかという点である。それでも、安心感があることで、教師とのやりとりでは発することができなかった疑問点について解消できたとすれば、より多くの生徒の深い学びにつながったと言えるかもしれない。教師の満足か生徒のよりよい成長か、言うまでもないことであるが、それでも、安易にグループ学習のみの形態に固執するなど、学力の向上を伴わない形だけの生徒の満足になる授業は避けねばならない。嫌なものでも取り組ませねばならないのが教育である。

本校の授業をときどきのぞいてみると、幸いこうした期待と危惧を十分に自覚している先生方が多いと感じる。様々な授業形態ながらも深い学びにつながる発問のある授業や積極的にグループ学習や IT を利用した授業を進めている先生が多くなってきているように感じる。そんな中、この１月に、これからの授業の在り方として先進的な取組を進めておられる仙台第三高校と互いに教員を派遣し合う授業交流を行うことができた。仙台第三高校の３名の先生方の授業はどれも個性的で生徒を引きつける事に長けていたように思う。IT を利用した反転授業を行ってくれた先生もおり、本校にはない様々な手法を学ぶ機会になったのではないだろうか。今後も、大学入試に対応できる学力の育成を念頭に置きながらも、冒頭の経団連が提唱する人材育成、すなわち、将来の社会で生徒たちが求められるであろう資質や能力をいかに育成するか、難題であるが、みなさんとともに悩みながらも考えていきたいと思う。時代とともに社会は大きく変化する。これからも、私たち教員が経験してきた以上の変化が起きるのだろう。そんな中にあっても生徒たちが心身たくましく生きていけるよう、本校の校訓である「剛健質朴」の精神をもとに今後も生徒を叱咤激励していきたいものである。

終わりに、未来の高度な科学技術社会を生きる生徒たちが、求められている力を身につけることができているか、常に私たち教員は自分自身に問いかけながら授業の改善に務める義務があることを忘れないようにしたい。

目　次

＜巻　頭　言＞　　校長　木　村　利　夫

頁

＜校内相互授業参観＞　1

＜授業研修＞

校内授業研修　10

（1）英　語　科 …… 沓　澤　信　宏　12
（2）地歴・公民科 …… 髙　橋　直　樹　16
（3）保健体育科 …… 高　久　育　宏　20
齊　藤　孝　弘　22
髙　橋　茂　樹　24

公開研究授業　29

（1）国　語　科 …… 古　谷　祥　多　30
（2）地歴・公民科 …… 髙　橋　直　樹　43
（3）数　学　科 …… 堀　川　貴　絵　47
（4）理　　科 …… 佐々木　重　宏　51
（5）英　語　科 …… 大　塚　のぞみ　55
（6）保健体育科 …… 高　久　育　宏　59
齊　藤　孝　弘　61
（7）芸　術　科 …… 杉　渕　拓　夫　65
（8）ＭＤＳ（学校設定科目）…… 鈴　木　　亘・今　野　栄　一　69

＜研修報告＞

年次研修

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて …… 打　矢　泰　之（地歴・公民科）　71
高等学校教職５年目研修講座受講報告 …… 古　谷　祥　多（国　語　科）　78
実践的指導力習得研修講座を受講して …… 成　田　陽　香（国　語　科）　86

センターＢ講座

情報教育推進研修講座報告 …… 武　塙　章　太　88

学校訪問・協議会等

仙台三高との相互交流事業における学校訪問
および授業実践報告 …… 芳　賀　　崇　90
奥刄屋　景　子　92
佐々木　重　宏　95

令和元年度宮城県仙台第三高等学校　ＳＳＨ中間報告会・
授業づくりプロジェクトフォーラム参加報告 …… 堀　川　貴　絵　99
藤　原　　誠　101

仙台三高との相互交流事業における理科研究協議会記録 …… 佐々木　重　宏　102

令和元年度　校内相互授業参観週間

研　修　部

１　期　　間　　第１回　令和元年　６月　５日(水)～　６月１８日(火)（１０日間）
　　第２回　令和元年１０月２８日(月)～１１月　８日(金)（９日間）

２　時　　間　　期間内の１校時から６校時まで

３　対　　象　　全教員

４　目　　的　　・教員が互いに授業を参観し、生徒の学習意欲を高める授業づくりを目指す。
　　・教科を越えて意見を交換し合うことにより、さまざまな視点から目標や課題を見いだす。
　　・他の授業における生徒の状況を観察し、生徒個々の指導に活かす。

５　参観方法

（１）期間前・期間中

授　業　者	参　観　者
①授業実施 ②授業者は提出された感想カードを読み、授業の改善に努める。	①授業参観（**期間内に必ず一度は参観する**） ②授業後、「 感想カード」に感想を記入し、授業者と研修部に１部ずつ提出する。**研修部へはデータ提出**も可とする。

令和元年度 校内相互授業参観週間
授　業　参　観　カ　ー　ド

授 業 者	先生	科目名	
ク ラ ス	ＨＲ	参観日	月　日（　）　校時
参観者名			
学習課題の提示・確認			
思考判断			
言語活動			
板書の工夫			
そ の 他			

※他教科の参観も含め、積極的に参観する。
　また、授業全体を通して参観することを原則とするが、部分参観も可とする。
※「感想カード」の様式は共有フォルダ内に準備。
　(¥¥gyoumu43¥共有¥R1校内相互授業参観¥第２回校内相互授業参観カード.xlsx)

（２）期間終了後
　研修部が「授業の感想」をとりまとめ、年度末に研修集録に掲載する。

６　実施状況

（１）第１回・第２回比較

	授業を参観した人数		参観された授業総時数	参観された授業時数（教科別）								
	実人数	延べ人数		国語	地公	数学	理科	英語	保体	芸術	家庭	情報
第１回	10	23	23	6	8	2	3	3	0	1	0	0
第２回	24	34	34	2	7	4	6	5	4	6	0	0

※数値はすべて研修部に提出されたアンケート用紙を基に算出していますので、実際の実施状況とは異なる部分があると思われます。

図１　授業参観者数

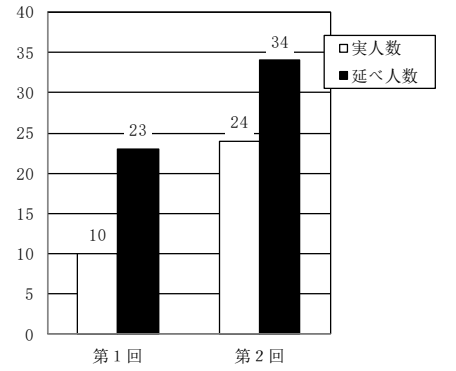
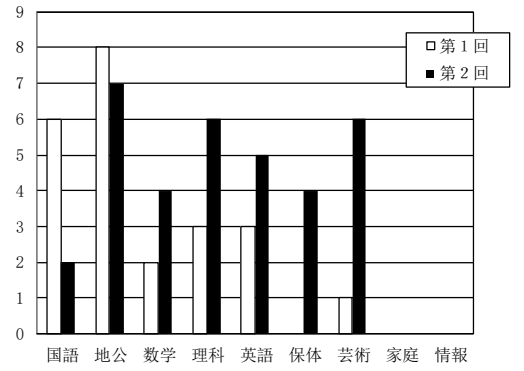


図２　参観された授業時数（教科別）



（２）過年度比較

	授業を参観した人数		参観された授業総時数	参観された授業時数（教科別）								
	実人数	延べ人数		国語	地公	数学	理科	英語	保体	芸術	家庭	情報
平成27年度	50	90	90	28	22	10	11	12	4	2	0	1
平成28年度	20	27	27	10	6	4	1	5	1	0	0	0
平成29年度		31	31	4	8	2	4	10	1	2	0	0
平成30年度	12	18	18	6	4	1	4	2	0	0	0	1
令和元年度	**34**	**57**	**57**	**8**	**15**	**6**	**9**	**8**	**4**	**7**	**0**	**0**

※数値はすべて研修部に提出されたアンケート用紙を基に算出していますので、実際の実施状況とは異なる部分があると思われます。

図１　年度別授業参観者数

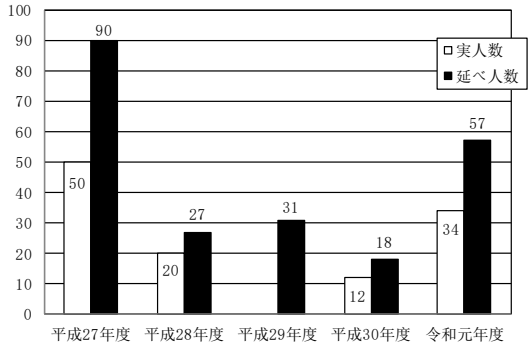
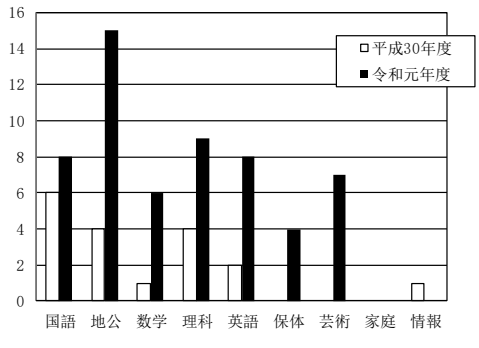


図２　参観された授業時数（教科別）



第１回校内相互授業参観週間（6月5日（水）～6月18日（火））授業参観カードのまとめ

項目　：①学習課題の提示・確認　　②思考判断　　③言語活動　　④板書の工夫　　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　　想
1	6月11日	国語	古典	①	「列子」の杞憂を通して何を学ぶのか、とてもよく分かりました。
				②	句系・重要漢字を押さえつつ、「杞憂」の内容を絵として描かせることで生徒の主体的思考を積極的に促していて勉強になりました。
				③	グループごとに絵を描かせる作業を通して。各々積極的に言語活動をしている姿に感心しました。
				④	簡潔で見やすいものでした。
				⑤	先生の定時制課程でのＮＩＥ教育・実践を以前新聞で拝見して、ぜひ実際に参観したいと思っていました。たいへん勉強になりました。ＮＩＥ教育のこと等々またお話しできたらと思いました。
2	6月11日	国語	国語総合（古典）	①	確認テストと明記。
				②	自己採点だが、正解が複数あるような現代語訳については生徒が質問して、部分点や別解（？）を与えていた。いずれ自分たちで判断できるようになるのだろうか。
				③	全員で声を合わせて読む。最初はほぼ全員が答えているので、この調子でいくのかと思ったら。後半の難しい（？）問題では、だんだん声が少なくなっていった。それに対して声をかけていたので生徒には伝わっているようだった。
				④	確認テストの正答の確認なので、バランスよく見やすく配置されていた。
				⑤	最後に、テストの出来以上にそれに対策したか、ということが大切、と断言していた。今の点数に惑わされず努力を継続すべしという先生の信念が生徒に浸透してきている。
3	6月13日	国語	古典Ⅱ	①	黒板に明示（選択制）
				②	活発に話しているグループと静かに話しているそれほど盛り上がりが見えないグループがあったが、発表する結果は深いものになっていた。必ずしも見た目の雰囲気では測れない、それぞれが考える時間になっていたのだと思う。
				③	発表するときの表現方法はさまざまで、数式やイラストの場合もあったが、日本語の表現については、これでいい？と練っている様子が見られた。普段から生徒が意識できていると思われる。
				④	選択したテーマにより３分割。
				⑤	普段は一つの考えにストレートにたどり着きたいようなことを言う生徒でも、あるいは国語が苦手と自認する生徒でも、実際には、答えがいくつもある（答えのない）ことを考えたり、仲間の意見を聞いたり、議論したりすることが好きなのだとわかる。また、生徒の発想はときに教員の想定を超えて広がりを見せる。当初の結論に疑問を持ったり、授業後ももやもや考えてしまいそうな、頭を使う場面のある授業を大切にしたい。
4	6月17日	国語	国語総合（古典）	①	明示されていました。
				②	助動詞「しむ」から人物関係を理解させる流れにより、軽視してしまいそうな助動詞の重要性（助動詞を理解することで初めて味わえるおもしろさ）を感じさせていたと思います。
				③	先生の一言で理解しきれていなかった部分、覚えて射なかった部分、自分の弱点をペアで確認し合う姿が印象的でした。また、生徒に範読させるという活動はぜひ真似したいと思います。教師の範読よりも生徒に緊張感があったように思いました。
				④	重要な部分が色分けされ簡潔にまとまっており、見やすかったです。
5	6月14日	国語	現代文	①	しっかり示されていた。しかも、色チョークで目立たせて。
				②	生徒に問いかけて考えさせていた。
				③	私が見た場面では感じられなかった。
				④	大きくコンパクトで見やすい板書でした。
				⑤	私も授業に行っているクラスなので、他教科での反応を見てみたくて参観した。やはり、おとなしいクラスだなという感想でした。
6	6月14日	国語	古典	①	明示されていました。
				②	新たな意見や疑問が出るたび問いかけ続けており、思考が止まらない１時間だったと思いました。
				③	「班で１つの考えにまとめる」という活動により、前時までに各班の生徒それぞれが人物の性格や心情について言葉を精選したことが感じられました。また、違う班の意見に反論・批判するという活動は難しそうだと思いましたが、生徒たちは積極的に議論しており、これまでに現代語訳にとどまらず、人物関係、時代背景等も考慮しながら読んでいたのだろうと思いました。
				④	今回は学習課題のみでした。
7	6月13日	地理歴史	日本史Ａ	①	前時の内容の確認をしながら、自然に提示されていたと思います。
				②	「社会主義が日本ではなぜ危険思想とされたのか」というのは一人で説明するには難しい問いだと思いましたが、ペアで話し合わせて道筋をつけ、さらに指名して発表させた際に、先生がうまく生徒のことばを補いながら、完成形に導いていました。
				③	既習事項の確認や授業の雰囲気を変えるため、など場面に応じて、効果的にペアワークを入れていて、授業中に必ず誰かとことばを交わしており、とてもよいと思いました。基本的な事項の確認は、全員で一斉に声に出すという方法もおもしろいと思いました。先生の誘導が巧みなこともありますが、よく声が出ていました。
				④	キーワードが明確に示されていて、生徒が迷うことなく適切にノートをとっていました。
				⑤	「大正＝大衆」とプリントに大きく書いている生徒がいました。時代を端的に表すキーワードが染みついているのはとてもいいと思いました。先生が生徒の顔をよく観察していて、理解が不十分だと思われる部分には丁寧に説明が加えられるので、生徒が安心して授業に臨んでいました。

項目 ：①学習課題の提示・確認　②思考判断　③言語活動　④板書の工夫　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　想
8	6月14日	地理歴史	地理Ｂ	①	前時の復習をした上で、本時の学習課題を説明していた。前時とのつながりが明確であった。
				②	落ち着いたトーンと聞き取りやすいスピード、平易な言葉を利用したわかりやすい説明で生徒が
				③	対話形式の授業。先生と生徒の対話を中心に授業が進んでいた。
				④	黒板中央に中国の地図を貼っていた。整理されたプリントや資料集、データブックを活用して、詳細は個々に確認させるが、全体で共有したい大まかなイメージを黒板の地図を活用して説明していた。先生の話に注目を集めるための一助として黒板を活用していた。
				⑤	生徒の反応をしっかりと見ながら授業を進めていました。私は生徒の反応を見極めることなく授業を行いがちなので、改めていきたいと授業参観を通じて感じました。
9	6月14日	地理歴史	世界史Ｂ	②	板書と解説のスピード感が生徒の思考・判断力を早めたり、高めていると感じました。
				③	授業プリントがとても洗練されていました。授業の流れが明確に分かるので、記述力が高まると感じました。
				④	綺麗な文字、明確な色分け、授業プリントに沿っているとても芸術的な板書で感動しました。綺麗で整然とした板書によって生徒の授業意欲も高まっていると感じました。
				⑤	先生の授業を参観しながら、自分の授業を思い返していました。板書するスピードが遅い、一つの内容に深くささってしまってなかなか進まない…。テンポの良い授業が生徒の思考・判断力を高めると感じました。授業改善に努めます。
10	6月14日	地理歴史	世界史Ｂ	②	生徒自らが隣近所の生徒とこれまでの学習内容を確認し合う場面があった。自然とそういった流れになっていたことから、対話による思考・判断を促す雰囲気づくりがなされていると感じた。
				③	対話を取り入れた授業。先生と生徒の対話を中心に授業が進んでいた。
				④	黒板中央に板書によるヨーロッパ地図の明示、マグネットシートを活用した説明がとても分かりやすかった。
				⑤	生徒の反応をしっかりと見ながら授業を進めていました。私は生徒の反応を見極めることなく授業を行いがちなので、改めていきたいと授業参観を通じて感じました。
11	6月17日	地理歴史	地理Ｂ	①	黒板に明示。
				②	地図帳や要覧を見て、考えて答える場面が多くある。どういう問われ方でも対応できるようにという先生の声かけと、実際の進め方も頭を使うような状況が設定されていた。
				③	生徒への問いかけが明確。
				④	板書もプリントも最小限、シンプルでよい。生徒は自分で必要なところをメモしたり、地図帳や統計要覧にチェックを入れたりしていた。
				⑤	アットホームで、生徒同士も話しやすそうだった。常に頭を使わないとついていけないが相談しながら進められるので、理解力に差があってもカバーしながらできる。退屈しない授業である。
12	6月17日	地理歴史	日本史Ｂ	①	明示されていた。
				②	なぜ710年に遷都したのか、遣唐使の目的と合わせて問う。
				④	平城京の模式図が描かれ、そこに説明を加えていた。
				⑤	説明をしてから、板書の時間をとっていた。それ以外も、生徒の反応を見ながら進めていたのが良かった。
13	6月17日	地理歴史	日本史Ｂ	②	なぜ渤海人が秋田にきたことがわかるのか、と考えさせ、教科書に書かれてあることの根拠を示していた。
				④	要点は簡潔に。地図を黒板中央に描いていた。
				⑤	机上の勉強だけではバランスが悪いというメッセージを自身の経験を踏まえて送っていたのが良かった。遷都の経緯を背景を踏まえて復習させていた。
14	6月14日	公民	現代社会	②	アンジェリーナ・ジョリーさんの事例から自分の考えを持たせていた。
				③	生徒に発表させ、表現させていた。
				④	工夫…かどうか分かりませんが、大事な言葉を大きく板書されていた。
				⑤	生徒が生き生きしていて、授業に意欲的に参加していることが伝わってきた。テンポのよい授業で、生徒を飽きさせない雰囲気があった。
15	6月18日	数学	数学Ⅱ	①	使っているプリント毎に目標が書かれていて、それをプロジェクタで映し出している。時間短縮になっていいと思った。また、目標を常に確認することができ、生徒にとってとても分かりやすいと感じた。
				②	目標が軸にあり、この流れで問題がうまく配置されていると思った。分からなければ基本に戻り、丁寧に解説していることが印象的であった。問題数が多く、継続していくことで演習量がずいぶん違ってくるなと自分の授業を反省した。
				③	生徒とのやりとりの間が絶妙だと感じた。時間がかかったとしても自分の考えを自分の言葉で話をさせようとしていて、言語活動の必要性を感じた。
				④	生徒の板書の訂正や考え方のポイントを問題毎に黄色で丁寧に書いており、この時間できっちり覚えてもらおうと意図が感じられた。また、別解も示しており、考え方の幅が広がると感じた。
				⑤	プロジェクタやプリントの活用で、生徒が問題に触れる機会が多く組まれている。私自身の授業において、問題演習不足が気になっていたところなので、ぜひ、参考にしていきたいと思う。

項目 ：①学習課題の提示・確認　②思考判断　③言語活動　④板書の工夫　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　　想
16	6月18日	数学	数学Ⅱ	①	明示されており、途中から入っていったが、何をやっているのかが分かった。生徒の立場で考えても、何をやっているのかが分かるということはいいと改めて感じた。
				②	扱う問題の選択が面白い。どうなんだろう？と分かりそうで間違いやすい問題で、いろいろな確認のできる問題であった。こういう問題を選択できるようになりたいと思った。また、間違った解答例から考えさせる場面もあり、生徒がよく考えていた。
				③	分かりにくい問題は、簡単な例を用いて説明していて理解しやすかった。また、その問題における　，　の意味まで触れており、知識の幅が広がると思った。
				④	今考えている問題と簡単な例を平行して記入し、わかりやすかった。
				⑤	教科書では扱いきれない問題をプリントで補充し、問題演習を積ませている点等も参考になった。
17	6月12日	理科	物理基礎	①	タイミングよく、シンプルに示されていた。
				②	全員で答えて意見が割れたときに、あと5秒考えて、といってもう一度答えさせる。
				③	用語も分解して語義から理解させていた。本時のキーワードを答えるときに声を合わせる。
				④	黒板に書いてある学習課題のすぐ横でアニメーションで作図の実演をしているので、何をやっているか常に意識できる。
				⑤	タイムキープしたり、立たせて読み合わせさせたり、アニメーションに集中させたり、5校時でも眠くならないようなしかけがいっぱい。
18	6月18日	理科	生物基礎	①	プリントを活用し、作業手順や実験結果への導きを明示できていた。
				④	あえて「板書しない」と明言することで、生徒の緊張感を引き出し、作業の確認ができていた。
				⑤	実技授業に近いものを感じました。最初は今一つ積極的でなさそうに見えましたが、実験を楽しそうにこなしていた姿が印象的であった。
19	6月18日	理科	理数化学	①	各班でそれぞれ実験を分担し、最終的に結果を総合的に出す手法は、班ごとに責任が問われるため面白いと思いました。
				②	思考判断を促しやすくするようプリントが工夫されていたと思います。
				④	最初に全体を書き込んでおくことで、その時間の学習内容が明確に理解されると思いました。
				⑤	自分の高校生の時は化学の実験がなかったので楽しく参観させていただきました。
20	6月12日	英語	コミュニケーション英語Ⅰ	①	わかりやすい。
				④	大きく書いて、目立つ。色使いが見やすい。
				⑤	起立して読む、カウントダウン、手をたたいて交代、などルーティンで生徒がすぐ次の動きに移れるテンポの良さ。
21	6月12日	英語	英語表現Ⅰ	①	黒板の左側に流れが板書されていました。流れがわかることで、安心感を持てたり、自分なりのペース配分ができると思いました。
				②	生徒がつまずく“not”の位置やまぎらわしい話法の違いを発問して、ペアで考えさせていた。疑問やモヤモヤが解消し、納得することで深い理解につながることが期待できると思いました。
				③	ペアで話し合うことで、文法への理解が深まっていました（疑問の解消）。そして、ペアで問題を出し合うことで、伝える相手がいるという緊張感、届けたという気持ちが高まっていた。同じ活動でもペアが変わることで新鮮さを与えていた。
				④	ポイントのみ板書されていました。
				⑤	英語が頭に残る授業だと思いました、基本例文の扱い方をはじめとして、たいへん参考になりました。
22	6月17日	英語	ＳＳコミュニケーション英語Ⅱ	①	提示された課題が55分間一貫して生徒にとって取り組むべき課題となっており、明確でわかりやすかった。
				②	教科書本文を理解した後に「問題」を分類し、解決策まで考えることで生徒個々の考えが反映される展開であった。
				③	生徒同士が積極的に取り組んでいた。誰かの発言に対しての反応もあり、クラス全体が活発であった。
				④	板書がシンプルで指示が伝わりやすく、決して正解を示さないことで生徒たちがよく考えていた。
				⑤	すぐに辞書を使わずに、自分が考える英語表現を用いて英作文しており、さらに相手にきちんと伝えることに重点を置いているところが「さすが！」であった。
23	6月18日	芸術	音楽Ⅰ	①	明示されていた。
				②	日本語と英語の違いの例がわかりやすかった。外国語の歌を歌うことで日本語という言語を相対化してとらえる機会になる。
				③	詞の意味を確かめながら全員で朗読。今日は１回だけで、今日１回いきなり読んだ参観者は字を追うだけになってしまった。外国語の歌は特に、詞の理解のため朗読は複数回。生徒は何度も歌ってなじんでいるせいか、違いを感じた。
				⑤	一緒に歌ってみた（先生の言っていたとおり字を追うだけになってしまったが）。詞の意味を確かめながら、仲間と歌ったり、一人で歌ったり、生徒は生き生きしていた。表現の機会や方法はたくさんあったほうが良い。世界史は芸術と親和性が高い。一つの科目（教科書）からではなく、複数の教科科目や実際の生活とのつながりを意識している生徒は豊かな学びを楽しんでいると思う。

第2回校内相互授業参観週間（10月28日(月)～11月8日(金)）授業参観カードのまとめ

項目　：①学習課題の提示・確認　　②思考判断　　③言語活動　　④板書の工夫　　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　　想
1	11月8日	国語	古典	①	明確で常に意識できるよう板書されていた。普段の授業とは異なる課題設定で興味がわいた。
				②	資料をじっくり読み解こうとする生徒の姿勢が常にあった。教科書の内容から考えて読むと裏切られるおもしろい展開だった。
				③	資料の解釈を教え合ったり、得た知識を伝え合ったりできる場面設定により、活発に行われていた。
				④	シンプルに黒板を用いていた。
				⑤	1時間で扱うだけではもったいない内容で、この授業を通して、生徒が関心をもって古典に臨むことができるようになると思った。
2	11月8日	国語	古典	①	明確で示されていた。
				②	生徒が関心をもって資料に臨み、登場人物について自分なりの人物評価をしていて、おもしろかった。
				③	それぞれの資料の解釈や知識を交換する場面が多く設定され、活発に話し合いが行われていた。
				⑤	教材研究がしっかりなされていることが前提にあってこその授業だと思った。せっかくの資料なので、もっと読みやすい形で生徒に提示できればさらに良かったのでは。
3	10月29日	地理歴史	世界史Ａ	④	ヴェルサイユ・ワシントン両体制の性格が次の大戦に結びつくことが板書全体で俯瞰できるようになっていた。色チョーク下線の使い方。
				⑤	内容的にキリが良いところで終わったりすることは？まとめ5分といわれるが、難しく、どうしたらよいかといつも悩みます。（生徒アンケートでも、終わりに振り返りや確認をとってほしいという要望が）
4	11月5日	地理歴史	世界史Ｂ	①	明示されていた。
				③	啓典の意味、一神教の共通点、朗誦重視など、カギとなる時候はしっかり理解させておくことが、時間はとられても最終的には近道と思った。２年生で、イスラームは初めての時期なのでなおさら、少しずつでも概念理解を進めておきたい。
				④	必要最小限にまとまっている。余計に書いてしまわないことで、生徒が主体的にメモをとったりするようになる。
				⑤	体験談はやはり生徒の印象に残る。生徒の表情から食いついているのがわかった。本時ではないかもしれないが、1年次に出てきたイスラームの事項と絡めた質問をしてみるとか。
5	11月5日	地理歴史	日本史Ｂ	①	明示されていた。
				②	オープンクエスチョンが多く、生徒の思考が活性化する。前回（？）視聴したDVDから問いをしていたが、誰かの意見を聞いた生徒と同じです、という生徒にも再度言わせて確認するのが、どの生徒にも当事者意識を持たせられていた。
				③	蘭渓道隆？最初の一文字、とかは生徒が要求するが、本質的なヒントのほうが望ましい。（最初の文字とか何文字は生徒が聞きたがるが、クイズ、クロスワードじゃないんだから！と却下します）わかった生徒が本質的なヒントを出せるようになるとレベルが上がる。
				④	出てくる人名が多いようだったが、黒板の端を使って掲示し、動かして説明していたので順序がわかりやすいと思う。
				⑤	指導者がすべてをわかって説明してあげる必要はなく、わかっている生徒（武器に詳しい、地理に詳しい、…生徒の得意を生かす）に説明させたり、参観者を使ったり、柔軟にするほうが私も良いと思う。生徒との距離の近さを生かして、生徒が参加しやすい雰囲気になっている。
6	11月6日	公民	現代社会	①	しっかりと示されていたと思います。
				②	グループ内で、どちらの立場の人がいたかを根拠とともに発表させており、思考判断が行えていたと思います。また、共生社会実現のためにという問は答えのない問であり、生徒がそれぞれに考えている様子がうかがえました。理科でもやってみたいですが、理科で答えのない問はなかなか思いつきません。
				③	グループ内で話し合っていたと思います。各班の発表者もしっかりと発表できていました。
				④	やってほしいことをスライドで明確にしており、分かりやすかったです。
				⑤	１３組いつもお世話になっています。ありがとうございました。
7	11月6日	公民	現代社会	①	パワーポイントを使用した授業だが、課題ははっきりと板書されていた。オープニングの質問→ジェンダーバイアスの紹介がスムーズ。
				②	生徒が主体的に考えることができる問いを発し、生徒の幅のある答えに丁寧に対応していた。
				③	指示が的確で、これがスピーディな授業を支えている。普段から話し合いの活動をしていて慣れた雰囲気がうかがえる。生徒の振り返り（プリントへの記述）に対し、リフレクションのプリントを作るという対応が丁寧。
				④	各班の意見を、表を用いて効果的にまとめている。
				⑤	最初に全体的な授業を流れを示している。
8	11月6日	公民	現代社会	①	明確に示されていた。また、本時の授業展開が最初に示され、生徒が見通しをもって活動できていた。
				②	質問の最初で生徒の好奇心を刺激し、授業に引き込んでいた。
				③	さまざまな場面で活発な意見交換が行われていた。
				④	シンプルで効果的な板書であった。
				⑤	指示が的確で、タイムロスのない非常にテンポの良い授業であった。生徒の多様な意見を上手に引き出し、さらに考えを揺さぶることができており、素晴らしいと思った。

項目 ：①学習課題の提示・確認　②思考判断　③言語活動　④板書の工夫　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　想
9	11月6日	公民	現代社会	①	本時のテーマだけでなく、学習活動もしっかりと説明し、良かったと思います。
				②	メインのグループ討議だけでなく、隣同士で細かく意見交換をさせて話し合い（グループ討議）が盛り上がるよう工夫されていた。
				③	非常に良く行われていたと思います。
				④	必要最小限におさえ、スクリーンを活用していてよいと思いました。
10	11月8日	数学	SS数学Ⅰ	①	「半径をａを用いて表せ」ではなく、「ｒ＝～を説明せよ」という学習課題の設定が生徒の関心を高めたと思います。私も最近はこの形で提示しています。
				②	各グループをよく回られていて、細かく指示することで思考が進むように指導しておられました。私も普段からもう少し細かく観察、助言して行きたいと思いました。先生の助言やヒントがきちんと黒板にまとめられるとさらに生徒の思考が進んだのではないかと思いました。
				③	最後の振り返りで全員に前を向かせたのが参考になりました。グループ学習において小中学校は最後に必ず机を直させて振り返るようで、彼らの慣れている形式だそうです。
				④	左から右、うえから下を心がけるといいと思います。板書もメモになってしまっている感じが気になりました。
				⑤	Hの位置、AHの求め方が重要になるので四面体の大石の求め方が重要になります。V＝4/3Srは普段は別解扱いにしていました。（この関係式は球でも成り立ちます）
11	11月8日	数学	SS数学Ⅰ	①	「正四面体の内接球の半径を求める」こと、そして、16/12aとわかっているからこそ、生徒の「なぜ」・「解いてやる」を刺激したのでは。
				②	「何」を求めるのか？　順序立てて考える必要がある問題でした。
				③	グループでよく活動していた。
				④	立体を板書でも分解できる一助にしたい。
				⑤	立体を手作りでみせたことはよかった。すばらしい。
12	11月8日	数学	SS数学Ⅰ	①	事前に大きい紙に印刷されていて、はっきりとよく分かる提示であった。
				②	生徒によく考えさせていた。
				③	話し合う機会を多くもっていて、生徒の声を拾いながら授業を進めていたが、生徒が話したことを、もっとクラス中の生徒が分かるように説明させる場面があればよかった。
				④	シンプルで見やすかった。
				⑤	正四面体の分割の工作はよかったです。展開図欲しいです。
13	11月8日	数学	ＳＳ数学Ⅰ	①	中央に図があってシンプルに課題の提示が行われていた。
				②③	ひとりでは解けそうもない生徒たちが協力しあうことで解いていくだけでなく、模範解答を作成することでかなり頭を使っているように見えた。班で活動するとき、協力をしっかり行っており、普段からこの形式で取り組んでいることが明らかであった。
				④	書きすぎないことで生徒が考える活動に集中できると思った。
				⑤	ワークシートが考える用と模範解答用に分けられていて感動した。やる気が出ると感じた。
14	11月1日	理科	物理	①	しっかり板書されていた。授業の導入部分で確認されていた。
				②	発問が工夫されており、生徒がしっかりと考える授業になっていた。
				③	班毎に質問し合ったり、相談したりできていた。先に解答ができた生徒がつまずいている生徒に教える場面も多々あり、活発な言語活動が見られた。
				④	最小限で効果的な板書と、スライドを併用した授業で大変よく工夫されていた。プリントも準備されており、テンポ良く授業が展開していた。
				⑤	班毎に活発に意見を出し合ったり、相談し合う体制ができており生徒が生き生きとしていた。教師の発問に対しても積極的に意見が出ており、非常に良い雰囲気で授業が展開していたことに感心しました。お疲れ様でした。
15	11月1日	理科	物理	①	しっかりとやられていたと思います。
				②	教師の問いかけや課題に対して個人やグループで考えていた。
				③	班員どうして教え合っている場面が多く見られました。
				④	スライドと板書を併用することで効率的だったと思います。
16	11月1日	理科	物理	①	提示、確認がしっかりされていた。
				②	生徒の興味をよく引きだして考えさせていた。
				③	グループ内で友達同士で教え合い、活動されていた。
				④	スクリーンと並行した形でわかりやすい。
				⑤	「物理」の少しかたいイメージから、身近な印象で、生徒の意欲がよく持続できる授業であったと感じる。
17	11月1日	理科	物理	①	シンプルだけど生徒の知的好奇心を刺激するものだったと思います。
				③	話し合いの場を多くもっていました。
				④	プロジェクターをうまく使っていて、板書の量を少なくし、本当に大事なところや参考になるところを必要最小限に書いていて見やすかったです。
18	11月1日	理科	物理	①	配布されたプリントに明記されていて、生徒にしっかり伝わっているようだった。
				②	既習事項を用いて、より発展的な内容をしっかり思考していた。
				③	授業についていきながら、しっかり反応し、発言していたのと、グループ内での教え合いができていた。
				④	パワーポイントで見やすく、テンポ良く、進めている授業だった。
				⑤	「難しい物理」というより、「物理で楽しく現象を考える」という楽しい時間となっていました。

項目 ：①学習課題の提示・確認　②思考判断　③言語活動　④板書の工夫　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　想
19	11月1日	理科	物理	①	黒板にしっかり書かれていて、生徒にも口頭で指示していた。
				②	授業中、常に生徒が考える活動ができていた。
				③	グループで他のメンバーに説明し合う場面があった。
				④	プリントで進め、要点や説明の部分のみ板書しており、わかりやすかった。
				⑤	プロジェクターで黒板に映し、説明していたため、わかりやすかった。
20	10月30日	英語	コミュニケーション英語Ⅱ	①	しっかりとやられていた。
				③	発表している班から聞いている生徒に対しての質問があり、とても良かった。
				④	紙を貼ることで、時間をかけずに評価のポイントを示せていた。
				⑤	拍手等で盛り上げる工夫があった。
21	10月30日	英語	コミュニケーション英語Ⅱ	①	授業の最初にきちんと提示されて、明確で分かりやすい学習課題であった。
				②	お互いのプレゼンテーションを評価しながら、学習課題について一人ひとり考える活動であった。
				③	学習課題に対する考えをお互いに発表して聞くことができれば、自分自身の考えをさらに深めることができたのではないかと思う。
				⑤	クラス全体がお互いを認め合う雰囲気づくりがなされていた。
22	10月30日	英語	コミュニケーション英語Ⅱ	②	発表をしっかり聴き、それをもとに判断する、という授業の流れがとてもおもしろかったです。
				③	ポスター作成。それを読む、発表し、聴くという四つの技能が十分に発揮された内容でした。発表の際にポスターをもっと意識させてもいいのかと思いました。
				④	最後、思考をまとめる時間にポスターを再掲示したのがよかったと思います。
				⑤	時間的に削らざるを得なかったのだと思いますが、質疑応答を設けると当意即妙なやりとりが行われて、よりおもしろそうだなとも思いました。発表する生徒の姿がとても生き生きして、普段の先生の指導の確実さと面白さを感じました。ありがとうございまし
23	10月30日	英語	コミュニケーション英語Ⅱ	①	学習課題が明確に提示されていて、到達点が良くわかった。実際は数名の発表で確認しただけだったので、ペアワークでチェックし合っても良かった。
				②	英語でのプレゼンテーションが生徒にもっと理解し易い簡単な表現で行われていれば、理解力が深まったが、グループによってはプレゼンの仕方を工夫して分かり易くなっていた。
				③	グループの大半は原稿を読みながらのプレゼンであったが、ドラマ仕立てにして分かり易く工夫しているところもあった。参観する生徒に質問してプレゼンに巻き込む工夫も見られた。
				④	板書はほとんどなく、学習課題や評価規準の提示は紙に印刷したものを貼って時間のロスを省いていて良かった。ポスターによるプレゼンによって視覚的援助（visual aid）ができていた。
				⑤	参観者がプレゼンにさらに関心を持てるように、生徒同士もう少し相互的関わりがあってもよかったと思う。
24	10月30日	英語	コミュニケーション英語Ⅱ	①	学習課題だけでなく、発問も明示されており、常に意識できる状態でした。
				②	生徒がポスターや原稿をつくっている間にかなり思考した成果が発表に現れていまし
				③	発表するだけで十分な言語活動ですが、プレゼンに工夫が見られる班もあり、みんなが同じ場面を共有できていました。
				④	
				⑤	個人的に興味のある単元だったので楽しかったです。次回、ガウディの想いについて語り合うのでしょうか。
25	11月1日	保健体育	柔道・剣道	①	ホワイトボードに明示し、生徒がいつでも確認できるようにされていた。
				②	「一本」になる打ち方や、どの様なくずしが有効か、考えを深めさせる活動がそれぞれされていた。
				③	互いにアドバイスしながら技をかけ合ったり、打ち合ったりする場面が多くみられた。
				⑤	防具の正しい付け方について、一人ひとり丁寧に指導を行っていた。また、手の付き方など、危険な行為に行為について事前に注意するなど、安全面について配慮されてい
26	11月1日	保健体育	柔道・剣道	①	ホワイトボードに明示されていた。
				②	グループ内で互いに動きを確認しながら、「一本」になる打ち方の条件や崩しの方向と技の選択が合理的なのかを考えて試行錯誤していた。
				③	積極的に声を掛け合いながら具体的なアドバイスや気づきを共有していた。
				⑤	活動場面での空間設定や流れ、また用具の取り扱いについて安全指導が徹底されてい
27	11月1日	保健体育	柔道・剣道	①	前面のホワイトボードを活用し、提示・確認を行っていた。授業中に生徒が常に見ながら活動できるように、配慮されていた。
				②	前時までの知識（専門的用語の理解等）を使って、本時の課題に向かっているのが生徒の発言から感じられた。技の特色を使いながら、連絡技の組み合わせを自分で考えていくという内容は、本校の生徒に非常にあっていて、考えを刺激する内容であったと思
				③	簡単にでも話しあった内容が、残せる工夫があると生徒も話しやすいのではないかと感じた。
				④	生徒の欲しい情報が、あらかじめホワイトボードにあり、話し合いがしやすくなるよう工夫されていた。
				⑤	互いに音が出るので、各班の話し合いの内容を全体に向けて発表するのが伝わりづらいと感じた。上手な人をアドバイザー的にいろいろな班を巡回させてもよいのではないか。お互いに着装を確認し合うなど雰囲気がよかった。

項目　：①学習課題の提示・確認　　②思考判断　　③言語活動　　④板書の工夫　　⑤その他

	参観日	参観教科	参観科目		感　　想
28	11月1日	保健体育	柔道・剣道	①	ホワイトボードに提示、確認。
				②	剣道経験者が自然と中心になって教え合う雰囲気、助け合う雰囲気があった。その中で生徒同士が試行錯誤しながら実践を行っていた。
				③	「一本」になる打ちにするために大切なことをグループで話し合っていた。
				⑤	初めて剣道の授業を参観しました。「武道」の姿勢が生徒全員に備わっていると感じました。普段の授業における「しつけ」の徹底だと思います。私も授業における規律等を今まで以上にしっかりと行いたいと思いました。
29	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	黒板に掲示してあった。
				②	限られた条件で作品をつくっていくというテーマが、深く考えるきっかけになると感じた。
				③	具象・具体について説明させる部分があった。
				④	必要なことのみ板書で分かりやすかった。
30	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	良い。
				②	「色」のイメージを考えさせる工夫（戦隊ものの話）が良い。
				③	生徒の知的好奇心をくすぐる発問が良く工夫されていた。
				④	良い。
				⑤	美術の授業が技術指導が主にならず、イメージ力の喚起を主になっており、素晴らしいと思いました。
31	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	提示されていた。
				②	抽象について深く考えさせられる問いがなされていたが、答えをすぐに言うのではなく、生徒に考えさせてみる授業展開もありだと思う。
				③	抽象をイメージさせるために、身近な事例を出して理解を助けていた点が良かった。語り口も親しみがもてた。
				④	授業開始前に板書を終えており、タイムロスがなかった。
				⑤	作業させながらのプリキュアとゴレンジャーはもったいない。作業させないで話に集中させたら抽象の理解が深まるのでは。
32	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	しっかり提示され、先々まで見通したものだったので、生徒もこれからの授業展開や自分たちの取り組みが明確になったと思います。
				②	なぜ抽象版画をやるのか、“抽象”をキーワードに生徒たちの頭をアクティブにしていました。
				③	ペアワークをはじめ、さまざま工夫がされていました。
				④	色にも工夫があり、わかりやすく書かれていました。
				⑤	本時の授業から5回つづきで行われる“抽象版画”というのものが先生のオリジナルということで、そのような提案性のある授業をしたいと触発されました。
33	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	提示されていました。見通しを持って活動できるように今後の各段階についても提示されていました。
				②	抽象といってもなかなかイメージしづらいところもありそうですが、「言葉で書く」や「色から」など、多くのヒントをもとに膨らませるというのが面白いと思いました。
				③	「抽象」の意味を言語化しつつ考えさせる活動がいいと思います。イメージを「ことばで書く」というのがおもしろいと思います。それぞれの段階で言語活動が成されていました。
				④	「やさしさ」の抽象の例、つかみやすいと思いました。
				⑤	コーヒーの例がおもしろかったので、実際に淹れてもおもしろそうだと思いました。ぶどうの例をあそこまで説明するのであれば。作例的なものを見せてもよいような気がするのですが、やはりそこは見せないようにしているのですか？
34	10月30日	芸術	美術Ⅰ	①	単元全体の展開まで提示され、生徒もこれからの活動の見通しをもって毎時間の授業に臨むことができると思った。
				②	“抽象”とは何かを考えさせていた。美術の授業が技術指導にならず、生徒自身が考える時間を主とした展開になっており、素晴らしかった。
				③	色のイメージをことばで表現させる活動がおもしろかった。
				④	必要なことのみで無駄のない板書だった。
				⑤	色をイメージさせるために提示した身近な事例が、先生の話術もあって、とてもおもしろかった。難しい学習課題だと思ったが、生徒が悩みながらも、楽しそうに取り組んでいた。

校内授業研修

令和元年度　校内授業研修

教務部・研修部

１　期　　日　　令和元年１０月１８日（金）

２　日　　程　　１４：２５～１５：２０　研究授業
　　１３：３５～１６：２０　校内授業研修会

３　課　　題　　「知的好奇心を刺激する発問により生徒の主体性を引き出し、考えを深めさせる活動を通して論理的な思考力や自分の考えを的確に表現する力を身に付けさせる授業の実践」

① 知的好奇心を刺激する発問の工夫
② 考えを深めさせる活動の設定
③ 効果的な振り返りの実施

４　指導助言者

高校教育課英語教育推進班	指導主事	草　階　健　樹　先生（英語）
秋田北高等学校	教育専門監	杉　田　道　子　先生（英語）
高校教育課指導班	指導主事	小　松　隆　行　先生（公民）
保健体育科防災教育・安全班	指導主事	湊　　秀　孝　先生（保健体育）

５　研究授業・授業研修会

教　科	科　　目	授　業　者	対象者（場所）	研修会会場
英　語　科	コミュニケーション英語Ⅲ	教諭 沓　澤　信　宏	3年1組（31組教室）	特3教室
地歴・公民科	現代社会	教諭 髙　橋　直　樹	1年2組（12組教室）	21組教室
保健体育科	武道（剣道）	教諭 高　久　育　宏	1年3組 1年4組（武道場・第2体育館）	25組教室
	武道（柔道）	教諭 齊　藤　孝　弘		
	球技（バレーボール）	教諭 髙　橋　茂　樹		

６　研修会の進め方

ワークショップ形式で協議を進める。

（１）課題の①～③の観点を踏まえ、各自が「工夫されていた点」及び「改善点」を付箋紙に記入する。「工夫されていた点」については青色の付箋紙、「改善点」については赤色の付

箋紙を用い、付箋紙１枚につき１点の記入とする。

付　箋　紙
例）

○○○○という発問が、生徒の好奇心を刺激していた 成田

青色付箋（工夫されていた点）

振り返りは○○○○の手立てをとるとよいのではないか [illegible]

赤色付箋（改善点）

※指摘に止まらず、改善案を示すようにすること。

（２）付箋紙を模造紙記載の項目に沿って、グループ内で説明しながら貼り、分類する。分類した内容やキーワードになりそうな点は、適宜模造紙にマジックで書き込む。

模造紙のイメージ）

	①知的好奇心を刺激する発問の工夫	②考えを深めさせる活動の設定	③効果的な振り返りの実施
工夫されていた点			
改善点			

（３）模造紙を黒板に掲示して発表を行い、グループでの協議を全体で共有する。

英語科（コミュニケーション英語Ⅲ）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月１８日（金）５校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　３年１組教室
対象生徒　　３年１組（理数科・男子１７名＋女子１７名＝計３４名）
使用教材　　Revised POLESTAR English Communication Ⅲ（数研出版）
指 導 者　　沓澤信宏　ブレント・イエール

1　単元名

Lesson 13 Rethinking Our Approach to Life

2　単元の学習目標

①ホセ・ムヒカ氏の演説に触れ、大量消費主義とグローバリゼーションの本質について考えようとする。
②ホセ・ムヒカ氏の考え方について自分の意見をまとめ、発表することができる。
③贅沢な生活と質素な生活に関する語句を整理し、それぞれの生活のメリットとデメリットを整理できている。
④大量消費主義とグローバリゼーションがもたらす弊害を理解できている。

3　生徒の実態

理数科３４名のクラスであり、ほとんどの生徒が医学部医学科や難関大を志望している。理解力は高く、英語学習に比較的積極的なクラスである。スピーチや英作文など、語で表現することに意欲的に取り組む生徒もいる。

4　単元の指導計画

エクササイズと内容把握　（1時間）
内容把握　（1時間）
内容把握　（1時間）
復習と意見発表　（1時間）　※　本時　4／4

5　単元の評価規準

項目	ア．コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ．外国語表現の能力	ウ．外国語理解の能力	エ．言語や文化についての知識・理解
内容	ホセ・ムヒカ氏の考え方について、自分の考えをまとめ、発表しようとしている。	適切な表現を用いて自分の考えを述べることができる。	ホセ・ムヒカ氏の演説における主張を読み取ることができる。	大量消費主義やグローバリゼーションが我々の生活にどのように表れているかを理解して

6　本時の目標

ホセ・ムヒカ氏の考えを踏まえて自身の意見をまとめ、発表することができる。

7　本時の指導に当たって

ホセ・ムヒカ氏の考え方に対して賛成・反対両方の立場から考えを整理させる。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 12分	○生徒によるプレゼンテーション ・生徒１名が自分の興味のあることについて５分程度プレゼンテーションを行う。 ・プレゼンテーションに対して質問・意見を述べる。	・生徒が表現し辛い英語をパラフレーズできるよう必要に応じてキーワードを提示する。	
展開Ⅰ 40分	○復習の質問に答える。 ○目標の提示 Write and give your opinion about the question "Do we have to keep selling?" ○ブレインストーミングと英作文 ・ペアでブレインストーミングし、そのアイディアをクラスで共有する。 ・クラス全体のブレインストーミングを参考に、賛成か反対の立場を明確にしながら英作文する。 ・発表する。	・前時までの内容の理解を質問を通して確認する。 ・巡回して、活動を支援する。 ・様々なアイディアがあることを確認する。	ア.大量消費主義に関するブレインストーミングできている。 イ.立場を明確にし、発表できている。
本時の振り返り 3分	○ALTのコメントを聞く。	・JTEは必要に応じてパラフレーズする。	

研究授業研修会の記録（英語科）

記録者　嶋　田　　仁

１　日程

【研究授業】

日　　時：令和元年１０月１８日（金）　１４：２５～１５：２０（６校時）

対象生徒：３年１組（３年１組教室）

科 目 名：　コミュニケーション英語Ⅲ

単 元 名：Lesson 13 Rethinking Our Approach to Life

授 業 者：沓澤信宏　ブレント・イェール

【授業研修会】

日　時：１０月１８日（金）１５：３５～１６：２０

２　研修会参加者

草階建樹指導主事（指導者）、杉田道子教育専門監（指導者）、武田誠健、嶋田仁、塩谷太、藤本亮、山信田修、岡本由佳子、釜田博一、藤原誠、髙橋里実、大塚のぞみ、渡辺伸吾、奥劦屋景子、成田陽香、加藤華世、沓澤信宏（授業者）

３　授業者からの感想・成果・課題

・ウルグアイの第40代大統領、ホセ・ムヒカ氏が2012年に行った演説から、大量消費主義とグローバリゼーションの本質とそれらによってもたらされる弊害を、pro-conの両視点から捉え、英作文し、スピーチにつなげられることをねらいとした。

普段の授業を通して、一つのものごとを複数の視点から分析することに重点を置き、英作文からスピーチにつなげる活動に対しておのおのの生徒は意欲的である。ブレインストーミングをクラス全体で共有する場面では、積極的な意見発表も見られた。

週一度行っている授業開始時の生徒によるプレゼンテーションは、今回発表者が選んだ題材がコンビニエンスストアに関するものであったため、本時の活動にスムーズに移行できたと感じており、今回の研究授業は生徒によって作られたものだと思っている。

４　参加者からの感想

・生徒たちが積極的に英語で自分の考えを述べていて、日頃からそのような活動をしている成果が表れていた。

・生徒への指示が流れてしまったところがあったので、どんな活動をするのかについての指示ははっきりと行ったほうがいいと思った。

・生徒から出された意見を、ALTが適宜適切な表現や、より分かりやすい表現などに直してくれたことによって、それらの表現が次のライティングの活動に活かされていた。

・発表した生徒たちは、どの生徒もしっかりと根拠に基づいた意見を分かりやすく述べ

ることができていた。

4　指導助言（**指導者**：高校教育課英語教育推進班　指導主事　草階健樹先生（英語））

・素晴らしかった。あまりきちきちしていないのも良かった。横手高校の英語のモデルとも言える授業であったと思う。

・一つの物事を肯定的な面と否定的な面の両面からブレインストーミングを用いて考えを深めてから、発表につなげたのが良かった。ただ、書く前に発表させても良かったかも知れない。他者の意見を聞くことにより自分の考えも深まり、その後で書かせることでよりよいアウトプットになったかも知れない。

・生徒が書いた英文についてのフィードバックの方法としては、添削するのではなく良い例を印刷して配布する方法もある。

・定期考査の問題を拝見したが、和文英訳が多かったように思われる。自由英作文を是非出題し、横手高校が生徒に要求するレベルを提示して欲しい。

公民科（現代社会）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月１８日（金）６校時
実 施 場 所　　秋田県立横手高等学校　１年２組教室
対 象 生 徒　　１年２組（普通理数科・男子１８＋女子１６＝計３４名）
使 用 教 材　　改訂版　高等学校　現代社会 （数研出版）
指　導　者　　髙橋　直樹

1　単元名

財政と金融

2　単元の学習目標

公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること、市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることについて理解する。

3　生徒の実態　　１年２組

全体的に落ち着いており、節度の保たれたクラスである。学習活動においても積極的に発言し、また疑問に思うことは互いに相談して解答を導くということが自然にできるクラスである。学力や学習に対するモチベーションについては個人間にやや開きはあるものの、全体的に授業に前向きに取り組むような雰囲気があり、これを生かして互いに議論する中で学びを深化させたいと考えている。

4　単元の指導計画

国民所得と経済成長　（１時間）
政府と財政政策　（２時間）　※　本時　２／２
金融の役割　（２時間）
日本銀行と金融政策　（２時間）

5　単元の評価規準

項目	ア．関心・意欲・態度	イ．思考・判断・表現	ウ．資料活用の技能	エ．知識・理解
内容	授業に集中して取り組み、発問に対して積極的に答えることができる。グループワークでは、自分の意見を積極的に主張しつつ、他と協働してグループ内の議論が活発化し、合意形成するために尽力することができる。	法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、根拠をもって表現できる。	現代社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身につけている。	市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府が担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることを理解している。

6　本時の目標

①財政赤字が常態化する中で、赤字バス路線を存続させるために公的資金を導入すべきかについて、多面的に考察し、赤字路線バス問題への解決策について根拠を示して、自身の考えをまとめることができる。
②ワークショップにより、グループ内の合意形成やプレゼンテーション能力の涵養および他のグループからの情報収集と共有を通して、社会的事象への理解を深める。

7　本時の指導に当たって

・５人～６人１班のグループを作り（合計６班）、グループ内で議論する。

・ワールドカフェ方式（屋台方式）を用いて、全員に役割と責任を与え、グループ内の合意形成に積極的に関わるようにする。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １２分	・ＮＨＫ『１０minボックス　少子高齢化って何が問題なの？』を視聴して少子高齢化問題のポイントを理解する。	・視聴前に、ポイントを指示して視聴させる。	
	学習課題：どうすれば「赤字バス路線問題」を解決できるのか？		
展開Ⅰ ２８分	**【具体的な発問】** **中心地のA地区と、山間部C地区を結ぶバス路線は利用客が大幅に減少し、赤字が続いています。バス会社はC地区の住民に路線の廃止を提案しましたが、C地区の住民は高齢者が多く、バスは不可欠だと反対しています。あなたがこの地域の市長だとすると、どういう解決策をとりますか？また、その解決策をとる理由も説明しましょう。**		
	・市の中心部と山間部を結ぶバス路線の廃止案について、賛成・反対の立場をとる理由とその根拠をまとめる。（ワークシート） ・市長としての解決策をまとめる。（ワークシート） ・自分のグループの他者の解決策を聞き、自分のグループとしての政策を一つ決める。 ・プレゼンに向けた準備をする。	・ワークシートの課題１を活用する。 ・条件の整理が目的なので深入りしない。 ・ワークシートの課題２を活用する。 ・１０分でまとめるよう指示する。 ・情報の共有を図り、よりよい解決策を模索するよう指示する。 ・グループ内の役割分担を決めさせる。	・赤字路線バス問題についての解決策について根拠を示して自身の考えをまとめている。（ワークシート・発表）
展開Ⅱ １０分	・自分のグループのプレゼンを担当する者、他のグループのプレゼンを聞いてくる者にわかれ、情報を収集する。 ・聞いてきた他のグループの意見をグループ内で共有する。	・１分で各グループ一斉にプレゼンさせる。 ・他のグループのプレゼンを聞いてくる生徒にも、責任感を持たせる声かけをする。 ・５分で聞いてきた他のグループの意見をグループ内で共有させる。 ・残り時間を考えて、グループ内で意見交換させる。	・グループ内の合意形成や他のグループからの情報収集と共有を通して、社会的事象への理解を深めている。（ワークシート・ワールドカフェ方式のプレゼン）
本時の振り返り ５分	・１つのグループがプレゼンする。 ・ワークシートに「振り返り」を記入する。	・一斉プレゼンの際にどのグループがプレゼンにふさわしいのか、について目星をつけておく。 ・今日の授業を振り返るよう指示する。	

研究授業研修会の記録（地歴・公民科）

記録者　佐々木　満

１　日程

【研究授業】

日　　時：令和元年１０月１８日（金）　１４：２５～１５：２０（６校時）

対象生徒：１年２組（１２組教室）

科 目 名：現代社会

単 元 名：財政と金融

授 業 者：髙橋　直樹

【授業研修会】

日　時：１０月１８日（金）１５：３５～１６：２０

２　研修会参加者

小松隆行指導主事（指導者）、鎌田孝司、高橋史、杉渕拓夫、堀川貴絵、武塙章太、木村留衣子、佐々木満、阿部政任、後藤直地、佐々木重宏、打矢泰之、芳賀崇、松江正彦、古谷祥多、小林朗子、渡邉千尋、渡辺千春、髙橋直樹（授業者）

３　授業者からの感想

・「バス路線の存続問題」をテーマとした理由は、昨年の１年生の「MDS基礎」の授業の課題探求活動で「地域の活性化」をテーマとしている班が多かったものの、「バスの本数を増やせばよい」「箱もの施設を作ればよい」等の財源を度外視した意見が多かったため。生徒がもっと現実的な考えができるようにして、この授業が「MDS基礎」になればと考えた。

・昨日別のクラスで同じ授業を行いスムーズにできたが、今回はパワーポイントが上手く起動せず、５分授業開始が遅れた。しかし、残り時間を逆算し、特に自分がこの授業でやりたかった「ワールドカフェ活動」「まとめ活動」を重視して実施した。

・１２組は比較的おとなしく真面目なクラス。授業中あまり目立つ動きはなかったかも知れないが、生徒がまとめで書いたワークシートを見れば生徒が何を考えていたかが分かり、この授業の成果が明確に分かるはず。

４　参加者からの感想

・ワールドカフェ活動自体が、「知的好奇心を刺激する」「考えを深めさせる」目的を果たしやすいものになっている。また問題設定については、 今回は答えが決まっていないものになっていたが、例えば数学でワールドカフェを実施するのは厳しい。市長という立場からバス路線問題を考えさせていたが、Ａ～Ｃ地区の立場が違うので、「それぞれの地区出身の市長」という立場で考えさせてみるのもよいのではないか。また、生徒の振り返り

を見てみたところ、お金の話題と自己責任論が多かったように思う。

・パソコン、パワーポイントといった視聴覚教材を有効に活用できている授業で、本時のテーマに具体性があったのもよかった。またワールドカフェ活動が、よい振り返りにつながっている。改善点としては、様々な立場で課題について考えさせることと、教員が時には「放置して（＝生徒の話し合いが深まるのを待って）みること」も大事だと思う。時間管理をしっかりとして、振り返りまでできたことが何よりである。

・ワークシートの資料が見やすく、視点が一つではない問いが行われていた。数値的な意見を導く上でも有用だった。また導入の１０分間のビデオは内容がよくまとまっていて、省略しづらいものに感じた。ワールドカフェ活動は、１回で終わらずにこれからも続けて欲しい。１つ教室を使用するだけでなく、空き教室も活用して大きい範囲で実施する展開も考えられる。その一方で、学習課題について話す上での条件付けをしっかりしていないと、「財政」というこちらが望むような着地点に到達しないと思う。こうした活動を通じて、ひとりよがりではない考え方が育成できるのではないか。

５　指導助言（指導者：高校教育課指導班　小松隆行 指導主事（公民））

・授業者の髙橋直樹先生には時間がない中での授業準備に感謝している。また、先生方の協議もただ「よかった」だけではない、様々な視点からの意見が出て、まさに主体的対話的なやりとりがなされていた。

・指導案の「本時の目標」、「赤字路線バス問題への解決策について根拠を示して」の根拠の部分については色濃く出ていないが、生徒の授業中の表情は興味津々であった。また、財政の単元の授業であるので、財政の内容をもっと踏まえた内容にすべき。少子高齢化を「政治」、「経済」などの面で多面的に捉えることができていたが、「生産者と消費者」のような多角的な視点も必要。話し合いの時間がもっと必要だったように思う。授業進行が非常にスムーズに流れていたが、１つ１つの活動がコンパクトになり、消化不良になっていたのではないかと感じた。今回のワールドカフェ活動は本来のものではない。司会を置かず、リラックスした雰囲気で各班の模造紙に訪れた人が意見を書いたり付箋を貼ったりするもの。よって、ワールドカフェというよりはエキスパート方式やジグソー方式に近いものに感じた。

・先生方に授業実施上、お願いしたいこと。一つは、グループワークの大切な視点として、①社会性、②目的（何のために話し合うのか、焦点化をする）、③目標と流れ（授業全体の流れを示している）を意識すること。もう一つは振り返りで、単元ごとではなく、各授業の終盤で必ず振り返りの時間を設定すること。以上の２点を実施して欲しい。

保健体育科（体育）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月１８日（金）６校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　武道場
対象生徒　　１年３・４組（普通理数科・男子１６名）
使用教材　　教科書名　最新高等保健体育（大修館書店）
指 導 者　　高久　育宏

1　単元名

武道（剣道）

2　単元の学習目標

①　相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、しかけたり応じたりするなどの攻防を展開することができる。（運動の技能）

②　武道に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができる。（関心・意欲・態度）

③　伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができる。（知識・思考・判断）

3　生徒の実態

１６名中１２名は剣道を初めて経験するが、自ら剣道を選択していることもあり、殆どの生徒が興味を持って意欲的に取り組んでいる。全体的に技能の習得は早いが、技能レベルとして個人差が多少ある。個人差は多少あるもののグループ学習では互いに教え合うことができることから、互いに協力させつつ技能レベルを向上させたい。

4　単元の指導計画

剣道の特性、授業の進め方、木刀・竹刀・防具、礼法、所作　（１時間）
構え、足さばき、素振り（上下、正面、左右面、跳躍）　（４時間）
竹刀に対して面打ち・小手打ち・胴打ち　（２時間）　※本時　１／２
木刀による剣道基本稽古法　（６時間）

5　単元の評価規準

項目	ア. 関心・意欲・態度	イ. 思考・判断	ウ. 運動の技能	エ. 知識・理解
内容	・武道の学習に自主的に取り組もうとしている。 ・互いに助け合い、教え合おうとしている。	・仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。	・相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技、得意技のいずれかができる。	・技の名称や竹刀の構造と各部の名称について理解している。

6　本時の目標

①各種の素振りの違いを理解し、正しく行うことができる。

②大きな掛け声で正面打ちができる。

7　本時の指導に当たって

各種の素振りの違いや攻めと打突時の大きな掛け声の目的について考え理解させて、素振りや竹刀への打突を行わせる。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １０分	1　集合、整列、挨拶、 出欠確認、健康確認 2　本時の学習課題の確認 学習課題:なぜ掛け声(発声)が大切か。 3　準備運動	・座礼で元気よく行わせる。 ・健康観察をする。	
展開 ４０分	4　中段の構え 5　素振り 具体的な発問①:４種類の素振りの違いは何だろうか。 （１）上下素振り （２）正面素振り （３）左右面素振り （４）跳躍素振り 6　送り足 7　掛け声 具体的な発問②:掛け声の目的は何だろうか。 一足一刀の間合いで構え、掛け声を出す（４人グループ） 8　打突 正面打ち（４人グループ）	・竹刀の位置、両手の握り方などに注意させる。 ・肩の可動を意識させ、大きく行わせる。 ・大きな声で元気よく行わせる。 ・振り下ろした際に、左拳が体の中心より外れないようにさせる。 ・跳躍が両足をそろえた同時なものにならないようにさせる。 ・構えや姿勢が崩れないようにさせる。 ・互いに中段に構えさせ、大きな掛け声を出させる。 ・大きな掛け声とともに竹刀に対して大きく正面を打たせる。 ・有効打突の条件を意識させて行わせる。	・４種類の素振りの違いを理解し、正しく行っているか。 （観察） ・大きな掛け声で正面打ちを行っているか。 （観察）
本時の振り返り ５分	9　本時のまとめ 感想と課題を発表する 10　挨拶	・数名の生徒に発表させ、自己評価させる。 ・座礼で元気よく行わせる。	

保健体育科（科目名　体育）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月１８日（金）6校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　柔道場
対象生徒　　１年３組・４組（普通理数科・男子１９名）
使用教材　　教科書名 最新高等保健体育（大修館書店）
指 導 者　　齊藤孝弘

1　単元名　　武道（柔道）

2　単元の学習目標

①　相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技、得意技や連絡技を用いて、相手を崩して投げたり、抑えたりするなどの攻防を展開することができる。
（運動の技能）

②　武道に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができる。（関心・意欲・態度）

③　伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができる。
（知識・思考・判断）

3　生徒の実態

中学校の武道授業で柔道を選択しているため、技能について大きな差はない。自己の特性に合わせた動き方の工夫や、身に付けた技能を他者に伝えることが苦手な生徒もいるが、全体的に技能の習得に意欲的に取り組む生徒が多いので、習得した技能の組合せを工夫する能力を高めたい。

4　単元の指導計画

基本動作　（１時間）
投げ技（大内刈、釣込腰、背負投、払腰）（３時間）
固め技の連絡　（１時間）
技の連絡（投技から投技、投技から固技）（４時間）　※　本時　１／４
ルールと試合方法　（３時間）

5　単元の評価規準

項目	ア. 意欲・関心・態度	イ. 思考・判断	ウ. 運動の技能	エ. 知識・理解
内容	・武道の学習に自主的に取り組もうとしている。 ・互いに助け合い、教え合おうとしている。	・提供された攻防の仕方から、自己に適した攻防の仕方を選んでいる。	・相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて攻防することができる。	・武道（柔道）の伝統的な考え方、課題解決の方法などについて、理解したことを書き出している。

6　本時の目標

①　相手の動きに応じた基本動作から、投げ技の連絡ができるようにする。
②　技の向上につながる動きの合理的な練習の仕方があることを理解する。

7　本時の指導に当たって

投げ技の構成に必要な崩しと体さばきを身につけさせ、合理的な投げ方ができるようにさせるとともに、相手の動きに応じた技を選択して連絡技を掛けるため、防御行動の場面を設定して、効果的な技の選択と練習方法ができるようにさせたい。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １０分	1　整列、挨拶、出欠確認 2　本時の学習課題の確認 **学習課題:なぜ、相手の裏をかくのか。** 3　準備運動	健康状態を観察する。	
展開Ⅰ １５分	4　二人組で基本となる技の打ち込みを行う。 （１）大内刈 （２）釣込腰 （３）背負投 （４）払腰	・技に合わせた、崩しの方向と体さばきを意識させる。 左後崩し、右前さばき 右前崩し、右前回りさばき 前方崩し、右前回りさばき 右前崩し、左後さばき	
展開Ⅱ ２５分	**具体的な発問①:後方に下がる相手への攻撃は** 5　技の連絡 （１）大内刈から大外刈の説明をする。	・継ぎ足で技を切替させる。 ・受けが頭を打たないように引き手を引かせる。	・相手の動きに応じた投げ技の連絡ができている。（観察）
	具体的な発問②:得意技を相手に防御されたときは （２）3人組で連絡技の組合せを考える。	・崩しの方向を意識させ、技を選択できるようにさせる。 ・連絡技の組合せをグループ内で共有させる。	・見取り稽古から効果的な技の練習の仕方を理解している。（学習カード）
本時の振り返り ５分	6　学習カードに本時のまとめを記入する。	・学習のポイントをまとめ、授業に対する自己評価をさせる。	

保健体育科（体育）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月１８日（金）６校時
実 施 場 所　　秋田県立横手高等学校　第２体育館
対 象 生 徒　　１年３・４組女子（３組１５名＋４組１６名＝計３１名）
教　科　書　　最新高等保健体育 （大修館書店）
指　導　者　　髙　橋　茂　樹

1　単元名

球技（ネット型：バレーボール）

2　単元の学習目標

①勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できる。　（運動の技
②球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすること、作戦などについての話合いに貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができる。　（関心・意欲・態
③技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫でき（知識・思考・判断）

3　生徒の実態

授業に対する意欲や態度は良好である。パスやレシーブなどの基本的技能が未熟で、攻撃や防御といったプレイに活かすことができず、正式なルールではゲームが成り立たない。技術的に高い生徒は少ないが、人の動きを見たり他者からのアドバイスを自分の運動に生かしたりすることには積極的であるので基本的技能を向上させながらレベルに応じたゲームを楽しませたい。

4　単元の指導計画

１．オリエンテーション（授業の進め方）／試しのゲーム　（１時間）
２．基本的技能の習得Ⅰ（パス・レシーブ・トス）／タスクゲーム　（４時間）　※　本時　４／４
３．基本的技能の習得Ⅱ（アタック）／タスクゲーム　（２時間）
４．基本的技能の習得Ⅲ（サーブ）／タスクゲーム　（２時間）
５．グループ練習・ゲーム　（２時間）

5　単元の評価規準

項目	ア．関心・意欲・態度	イ．思考・判断	ウ．運動の技能	エ．知識・理解
内容	・バレーボールの学習に自主的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・自己の責任を果たそうとしている。 ・作戦などについての話合いに貢献しようとしている。 ・互いに助け合い教え合おうとしている。 ・健康・安全を確保している。	・提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。 ・仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切な関わり方を見付けている。 ・健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。 ・バレーボールを継続して楽しむための自己に適した関わり方を見付けている。	・空いた場所をめぐる攻防を展開するため役割に応じたボール操作と連携した動きができる。	・技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ・バレーボールに関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ・運動観察の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ・試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

６　本時の目標

①　カバーリングでレシーブやトスを安定させ、三段攻撃を組み立てることができる。

②　仲間の技術的な課題について具体的に指摘し、説明することができる。

７　本時の指導に当たって

課題を明確にしたタスクゲームとホワイトボードを使ったアドバイザー制度を使って「考えて動く」「動きながら考える」活動の場を設定した。

８　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導　入 １０分	集合、挨拶、出欠確認 健康観察、準備運動、用具準備 学習課題:レーシブやトスを安定させるために、チームワークでできることは何か。 学習課題を確認する。		
展　開 35分	具体的な発問①:１本目のレシーブにチームとして何を意識したら良いだろうか。 スキルアップメニューを練習する。 ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ・レシーブ＆トス タスクゲームを行う。 ・ゲームのスタートはレシーブしやすい投げ入れパスか近い距離からサーブする。 ・アドバイザーを交替で行い、ゲームを分析しながらホワイトボードにアドバイスを書き出す。	レシーブする選手に『つま先』を向けて、全員がボールをさわる準備をすることと『声』を掛け合うことを強調する。 巡視しながら技術指導を行う。 習得した技術が活用できているか確認する。 ホワイトボードを効果的に活用して具体的なアドバイスを心がけるように促す。 アドバイスを活かしながら声を掛け合うように促す。	カバーリングでレシーブやトスを安定させ、三段攻撃を組み立てることができる。 ウ（観察） 仲間の技術的な課題について具体的に指摘し、説明することができる。 イ（観察）
本時の振り返り 10分	本時の振り返りを行う。 怪我の確認 あいさつ、片付け	各チームでミィーティングを行い、代表者にミィーティング内容を全体に発表させる。 次時の課題を確認する。	

研究授業研修会の記録（保健体育科）

記録者　髙　橋　和　夫

１　日程

【研究授業】

日　　時：令和元年１０月１８日（金）　１４：２５～１５：２０（６校時）

対象生徒：１年３組・４組（武道場、第２体育館）

科 目 名：　体育

単 元 名：武道（柔道、剣道）、球技（ネット型：バレーボール）

授 業 者：高久　育宏（剣道）、齊藤　孝弘（柔道）、髙橋　茂樹（球技）

【授業研修会】

日　時：１０月１８日（金）１５：３５～１６：２０

２　研修会参加者

湊秀孝指導主事（指導者）、高橋直樹、今入直樹、田中武夫、千田貴広、髙橋和夫、小野寺庸、押切信人、高久育宏（授業者）、齊藤孝弘（授業者）、髙橋茂樹（授業者）

３　授業者からの感想・成果・課題

高久育宏（剣道）

・本校の剣道を選択している生徒は意欲的に真剣に取り組んでおり、技術の習得も速いと感じている。今日の授業の剣道選択者は１６名、その内４名が経験者で１２名はこの授業で初めて竹刀を持った生徒である。本時は６回目の授業で、これまで礼法、竹刀の構え方、足裁き、四種類の素振りなどを行ってきた。今日の授業ではこれまでの復習として中段の構えを確認し、上下素振り、正面素振り、左右面素振り、跳躍素振りをそれぞれの違いを意識させながら行い、送り足を行った。新しい内容としてかけ声と竹刀に対して面打ちを行った。

・１か月前課題である「知的好奇心を刺激する発問の工夫」については、剣道はかけ声が大切であるが、かけ声の目的について考えたことのある生徒は少なく、単に剣道はかけ声を出すものだと思っている生徒が多いように感じられる。そこで、なぜかけ声は大切なのか、かけ声の目的は何なのかを考えさせるために、かけ声の見本を示し、知的好奇心を刺激する発問として、「かけ声の目的は何だろうか」という発問をした。さらに「考えを深めさせる活動の設定」ということで、実際に中段に構えさせて、かけ声を出させた上で、グループでかけ声の目的について話し合う活動を設定した。生徒は活発に話し合いをおこない、お互いの考えを深めさせることができたのではないかと感じている。かけ声の後に竹刀に対しての面打ちを４人グループで１人ずつ有効打突の条件を意識させて行ったが、積極的に教え合いながら行っていた。

・「効果的な振り返りの実施」では今日の授業で理解できたことや、上手くできたことを

振り返る時間を与え、３名の生徒に発表させた。発表ではしっかりとした振り返りができていたが、今後、より効果的な振り返りの方法を考えていきたい。

齊藤孝弘（柔道）

・生徒は中学校時に柔道選択者が多く、授業に対する意欲も高い。部活動での経験者はおらず、技能的にはほぼ同程度のレベルであるが、全体的に技能の習得には一生懸命である。自分で相手に伝えるという部分で苦手な生徒が多く、今日は３人のグループで少人数化して伝え合う力を持たせやすいようにした。

・本時の目標は「相手の動きに応じた基本動作から投げ技の連絡」ということで、前時、体さばきと崩しのところで打ち込みの動作を行っており、前半、４種類の技を打ち込みして、崩しと体さばきを確認しながら次の展開につなげた。はじめは同じ方向への技の連絡ということで大内刈から大外刈（大外落）を行った。それを土台に工夫した発問として、得意技、または自分の好きな、やってみたい技を選ばせて、相手に防御されたときの活動ということで、３人グループの連絡技の組み合わせを考える時間を多くとった。崩しを意識させることで技が選ばれるようにさせたいと思いグループをまわりながら指導した。

・振り返りの部分では学習カードを毎時間記入させている。今日の授業については、気づいてほしかった部分である、「防御している側の重心の移動を発見してそこに次の技をかけることができれば投げることができる」という内容の記載が多かった。全体を通して、こちらから与える情報を少なめにして生徒の活動が多くできるように展開した。

髙槇茂樹（球技）

・今日の授業は全体の中の５時間目。このクラスは基本的な技能で未熟な部分が多く、基礎的なことから進めている。彼女たちの課題はボールが怖い、自信がないということである。主体的に活動させたいと思い、基本的な技能を練習していくにしても、その日の授業で技能をマスターしていく中で肯定感をもてるような内容を心がけ、ボールに対する恐怖心だとか技能の中での自信のなさを克服していく様な授業作りをしている。専門的な言葉をできるだけ使わず、生徒の様子を見ながら簡単な言葉で声がけをして積極的に活動できるように工夫している。

・考えを深めさせる活動ということでは、アドバイザーを一つのポジションとして設定し、ローテーションでアドバイザーの位置に来たときにはホワイトボードに気づいたことや感じたことを書いて、その内容をチームで共有するという活動を行った。効果的な振り返りとしては、アドバイザーの記載内容をもとに振り返りのミーティングを行い次につなげている。

４　指導助言（**指導者**：保健体育科防災教育・安全班　湊　秀孝　指導主事（保健体育））

・３展開の授業だったが、バレーボールを中心に見させていただいた。１年生ということで、入学して半年あまりの生徒達だが、授業に取り組む姿勢が素晴らしいと感じた。

・導入の部分で本時の目標である「声かけ」と「つま先の向き」について的確に生徒に伝えており、生徒もそれに向けて取り組んでいた。準備運動については生徒に声を出させて行うことでさらに体が動くようになるのではないか。
・ゲーム形式の前の段階ではボールが途切れることなく、つなげていくということが大事になるが、キャッチボールやヘディングなどを取り入れながらボールをつなぐための工夫がされていた。攻撃を決めたときの歓声も上がり、楽しく活動するための取り組みが随所にみられ、生徒達は非常に積極的に取り組んでいた。
・アドバイザーの役目についても工夫がされている。話し合いについては色々な意見が生徒から積極的に出されていた。各班の発表では、それぞれの班の特徴ある課題が出てきて、生徒の豊かな観察力がうかがえた。
・武道については、柔道、剣道と幅広く選択でき、また、ともに先生方が専門家ということで、高度な授業が展開されていると感じられた。武道については伝統的な考えや技の取り組み、稽古のしかた、課題に応じた運動を継続するための取り組み、安全面を考慮するなど工夫した授業を今後ともお願いしたい。
・全体を通しては、学習指導要領の目標と内容を踏まえて展開してもらいたい。１年生については中学３年生との接続を重視するので、中学３年生の内容となる。指導案の「生徒の実態」については、生徒がどれくらいの技能で、意欲や知識があるかなど、前単元までの実態把握が大切になる。
・選択授業については、学習指導要領に「生徒が自由に選択して履修することができるように配慮する」とあるので、今一度確認をお願いしたい。また、「地域や学校の実態及び生徒の特性や選択履修の状況等をふまえ」とあるので、学校事情等も配慮しながら授業展開していただきたい。
・男女共修については新学習指導要領の解説にも、「体育は技能の程度、性別や障害の有無にかかわらず運動やスポーツを楽しむことができるよう男女共修を原則とするものである」とあるので、このことについても確認をお願いしたい。
・最後に、２０２０東京オリンピック、パラリンピックを契機に、「する・観る・支える・知る」等、生徒には様々なかたちでスポーツに関わりを持つことで、高校卒業後のスポーツへの関わりや、豊かなスポーツライフを継続するための資質能力の育成につなげていただきたい。北国の特色を活かした活動として、スキー・スケート等が体験できる環境づくりについてもお願いしたい。

公開研究授業

令和元年度横手高等学校公開研究授業

研修部

１　目　　的　横手市内の小・中・高等学校の教員に授業を公開し、意見を交換し合うことで、今後の授業改善に役立てるとともに、小・中・高の連携の在り方を考える。

２　研究テーマ　「生徒の知的好奇心を刺激する発問の工夫」

３　期日・会場　令和元年１０月３０日（水）～１１月８日（金）（公開授業参観）
秋田県立横手高等学校　各教室

４　公 開 授 業

教 科（科 目）	単 元（題 材）名	授　業　者	対象者	場 所	期　日	校時
国語（古典B）	大鏡（三船の才）	古　谷　祥　多	2年5組	25組教室	11月 8日(金)	2
公民（現代社会）	法の下の平等について考える	髙　橋　直　樹	1年3組	13組教室	11月 6日(水)	2
数学（SS数学Ⅰ）	空間図形への応用	堀　川　貴　絵	1年5組	15組教室	11月 8日(金)	2
理科（物理）	万有引力	佐々木　重　宏	2年2組	物　理実験室	11月 1日(金)	5
英語（SSコミュニケーション英語Ⅱ）	Lesson6　Gaudi and His Messenger	大　塚　のぞみ	2年1組	21組教室	10月30日(水)	5
保健体育（体育）	武道（柔道） 武道（剣道）	齊　藤　孝　弘 高　久　育　宏	2年4･5組	武道場	11月 1日(金)	5
芸術（美術Ⅰ）	抽象版画挑戦	杉　渕　拓　夫	1年1組	美術室	10月30日(水)	5
MDS（MDS基礎） ＊学校設定科目	FTDC	鈴　木　　亘 今　野　栄　一	1年1組	コンピューター室	10月31日(木)	1

５　校外からの参観者

	参　観　者	所　属	参観教科	授業参観日	校時
1	指導主事　村　田　留美子　先生	南教育事務所	保健体育	11月1日(金)	5
2	教　諭　佐々木　　司　先生	横手高校定時制	数学	11月8日(金)	2
3	教　諭　伊　藤　由貴子　先生	平成高校	国語	11月8日(金)	2
4	教　諭　三　浦　史　聖　先生	平成高校	数学	11月8日(金)	2
5	教　諭　高　橋　　渉　先生	平成高校	公民	11月6日(水)	2
6	教　諭　大　滝　花　子　先生	平成高校	英語	10月30日(水)	5
7	教　諭　山　内　結花子　先生	横手城南高校	国語	11月8日(金)	2
8	教　諭　小武海　春　佳　先生	横手城南高校	国語	11月8日(金)	2

秋田県立横手高等学校

国語科（古典Ｂ）学習指導案

日　　時：令和元年１１月８日（金）２校時
対象生徒：２年５組　３９名
場　　所：２５ＨＲ教室
使用教材：『新　探求古典Ｂ』桐原書店
指 導 者：古谷　祥多

１．単元名
大鏡「三船の才」
（『新　探求古典Ｂ　古文編』、桐原書店）

２．単元の目標
①　古典に現れた価値観を現代的なものの見方と比較しながら、自分の考えを広げようとしている。
（【関心・意欲・態度】）
②　古典の文章に表れた評価や価値観を踏まえ、自分の考えを広げたり深めたりする。
（古典探求〔思考力・判断力・表現力〕【読むこと】カ）
③　古典の文の成分や文章の構成について理解を深める。
（古典探求〔知識・技能〕ウ）

３．単元について
（１）教材観　『大鏡』は、平安後期成立、百九十歳の老人大宅世継が、百八十歳の老人夏山繁樹、三十歳前後の若侍と対話をしながら藤原道長の栄華の理由を解き明かす歴史物語。紀伝体。『今鏡』『水鏡』『増鏡』と続く鏡物の祖。作者未詳。「三船の才」は大鏡第六十段。頼忠伝。藤原公任の多才さを描いたものとして有名な一節。道長主催の清遊が大堰川であった折、道長が公任の才能に一目置き、漢文、音楽、和歌いずれの船に乗るかを尋ねる。和歌の船を選んだ公任は、道長の期待に応えるように見事な和歌を詠んで面目を施したという内容。分量としては短く、概ね高校生にとっても内容も取りやすいものであろう。

（２）生徒観　男子１５名、女子２４名の文系の学級で、文法事項等についても一通り理解がある。また古典に対する学習意欲は高く、ペアワークやグループワークなどの考えを交換する活動に対して積極的な態度で臨む傾向にある。直近の古典では、同じく大鏡の「雲林院の菩提講」、「花山院の出家」などを扱っていて、文法事項は敬語を中心として扱い、また本作の戯曲形式も扱っている。

（３）指導観　高い意欲を持って学習に臨む傾向にあり、単位数も理系クラスより多い。文法的な知識・技能は一定程度身に付いているため、発展的な内容や活動的な学習形態をより取り入れていくことで高い成果が期待できる。今回はジグソー法的学習活動を行う。本単元には公任に対して、道長による評価、語り手による評価、公任自身の評価が現れている。これらを総合しながら、公任の人物像に迫ることを本時のねらいとする。

４．指導と評価の計画（総時数２時間）

	単元指導計画	評価規準（評価の観点）
第１時	本文を音読し、文法を確認しながら現代語訳を行う。	本文の助動詞や敬語といった、現代語訳を助ける要素について理解を深めることができる。（古典探求〔知識・技能〕ウ）
第２時（本時）	公任の人物像を多様な観点からとらえる。	本文や補助資料に表れた人物の評価や価値観を踏まえ、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（古典探求〔思考力・判断力・表現力〕【読むこと】カ）

５．本時の計画

（１）本時のねらい

この大納言（公任）の人物像について、根拠をもとに解釈することができる。

（２）本時の評価規準

項目	関心・意欲・態度	読む能力
内容	古典に現れた価値観を現代的なものの見方と比較しながら、自分の考えを広げようとしている。	本文や補助資料に表れた人物の評価や価値観を踏まえ、自分の考えを広げたり深めたりすることができている。（【読むこと】カ）

（３）展開

	学習活動	教師の支援	評価の観点及び方法
導入 １０分	①本文のあらすじを確認する。 ②公任の和歌の異本を比較する。	・教科書を開かずに、内容を確認できるよう助言する。 ・公任の和歌の異本を提示し、その和歌の才能の巧みさに気づくことができるよう助言する。	
展開 ３０分	③本時の学習課題を把握する。	・見通しを持って取り組めるよう、学習課題を提示する。	
	学習課題：この大納言（公任）はどのような人物か？		
	④本文において公任を評価している視点を確認する。	・公任を評価する視点が、本文中より道長・公任自身・語り手の３点読み取れることに気付くことができるよう助言する。	
	発問：第四の視点（読者）からこの大納言（公任）を評価すると？		
	⑤それぞれ所定のグループごとに各ワークシートの課題に取り組む（グループ〈エキスパート活動〉）。 ⑥グループを組み替えて、前の活動で得た内容を説明する（グループ〈ジグソー活動〉）。	・公任の人物像を多面的に読み取ることができるように、グループごとに異なった課題を３点用意する。 ・３通りの説明を聞くことができるように、グループを組み直す。 ・それぞれの説明を理解できるように、説明と質疑それぞれ時間を設ける。	・古典に現れた価値観を現代的なものの見方と比較しながら、自分の考えを広げようとしている。（グループ、行動観察、【関心・意欲・態度】）
まとめ １５分	⑦それぞれの説明等をもとに、公任の人物像について個人でまとめる。 ⑧まとめた内容について発表を行う（グループ→全体）。	・他者に説明が容易にできるように、公任の人物像を表すキーワードを記述させ、その上で根拠としたことを述べられるようワークシートを用意する。 ・多様な考え方に触れられるよう、発表の時間を設ける。	・本文や補助資料に表れた人物の評価や価値観を踏まえ、自分の考えを広げたり深めたりすることができている。（ワークシート・発表、【読むこと】カ）

公開研究授業（国語）『大鏡』「三船の才」授業研究

――教科書の学習を契機として藤原公任の人物像を探る――

国語科　古谷　祥多

１．はじめに

令和元年１１月８日研究授業について，以下教材研究及び授業実践の学習指導案，研究協議会記録を掲載する。

２．教材研究

（１）出典について

『大鏡』は，平安後期成立，百九十歳の老人大宅世継が，百八十歳の老人夏山繁樹，三十歳前後の若侍と対話をしながら藤原道長の栄華の理由を解き明かす歴史物語。紀伝体。『今鏡』『水鏡』『増鏡』と続く鏡物の祖。作者未詳。「三船の才」（『大鏡　日本古典文学全集 20』では「公任卿，大井川三船の誉れ」）は大鏡第六十段。頼忠伝。

（２）本文について

藤原公任の多才さを描いたものとして有名な一節。道長主催の清遊が大堰川であった折，道長が公任の才能に一目置き，漢文，音楽，和歌いずれの船に乗るかを尋ねる。和歌の船を選んだ公任は，道長の期待に応えるように見事な和歌を詠んで面目を施したという内容。分量としては短く，概ね高校生にとっても内容も取りやすいものであろう。

（３）本時で探る人物について

藤原公任はその芸事に秀でた側面が語られることが多い。

『新古今和歌集』では六首採られている。詩歌管弦諸芸に秀で，和歌においては貫之を継ぐ大家であった。中古三十六歌仙の一人に数えられ『和漢朗詠集』の編者としても名高い（以上『新古今和歌集　日本古典文学全集 26』によった）。

「三船の才」も，それらの側面が焦点化された逸話である。実際のところ，彼の才能は芸能事に止まらず，父頼忠も関白の地位にあり，元より将来を嘱望されていた公任は，早くから順調な出世街道を歩んでいた。『王朝の歌人７　藤原公任』にはその華々しい様子が以下のように記されている。

> 天元三年（九八〇）二月二十五日，公任は清涼殿で元服した。時に十五歳であった。『日本記略』には次のように記されている。
>
> 太政大臣息男，清涼殿ニ於イテ元服ヲ加フ。右兵衛督(藤原) 遠度理髪。左大臣（源 雅信）加冠。即チ正五位下ニ叙ス。名ハ公任也。天皇入御。又大臣以下殿上人ニ被物有り。太政大臣儲ケ了ンヌ。又，中殿ニ於イテ諸陣二屯食ス。此ノ間，新冠者公任弓場殿ニ於イテ慶ビヲ申ス。
>
> 清涼殿で臣下が元服するのは異例のことであり，屯食は強飯を盆の上に丸く盛りあげたものだが，諸陣すなわち衛兵たちに屯食を供応するのも親王の元服と同等のあつかいだった。元服のさいに臣

下にあたえられる官位は通常従五位下であり，『公卿補任』に，

　　天皇ノ御前ニテ元服ヲ加フル日，叙スル所也。

とわざわざ注記されているように，正五位下に叙せられたのも破格なことであった。『扶桑略記』には，

　関白太政大臣藤原頼忠朝臣嫡子公任，殿上二於イテ元服，天皇手自ラ冠ヲ授ケ首ニ加フ。

とあり，加冠役の左大臣源雅信はそれとして，天皇自身加冠されたとすれば，このうえもなく光栄な儀式だったことになる。名前も幼名から公任に改められ，ここで公任は社会的に認められた存在となった。

　事態がこのままの状況で続いていけば，公任の前途は洋々たるものだった。その名前のとおり公事に任務して摂関の地位につく道筋にあったからである。元服の日に昇殿を許され，三月七日（『公卿補任』。『日本紀略』では三月三日）に禁色（天皇の許可がなくては使用できない衣服の色）を許され，　七月一日には侍従となって，官位の昇進はまったく順調ではなばなしかった。翌天元四年正月七日には従四位下にのぼり，正月十日に昇殿している。ちなみに，藤原道長はこのころまだ従五位下だった。

　公任は元服のその瞬間から天皇をはじめ，多くの期待を背負っていたことが記述からわかる。後に時代を手中に至らしむ道長よりも，この段階では時流に乗って栄えていたということである。無論，その後道長の父である兼家の娘詮子が後の一条天皇を出産し，道長の家筋が隆盛を迎えるわけであるが，これらのエピソードから想像される公任は，才覚に溢れ，周囲からの期待も充分，人物優秀なイメージを持たれがちなのではなかろうか。

　ところが，公任という人物についてその記述を更に繙くと，どうもそれだけではない面が見えてくる。

『大鏡　日本古典文学全集 20』の付録には，公任について以下のように記述されている。

頼忠一男。母は厳子女王。康保三（九六六）年生。二十七歳で参議，累進して権大納言にまで至る。競合した斉信に官位を越えられ悲観して中納言の辞表を出すと，惜しんだ天皇は加階を許して公任の恥をそそがれ，おおいに嘱望されたが，のちには道長の膝下に入り，四納言と呼ばれて仕えた。性聡敏にして諸芸に通じ，なかでも，詩歌管弦に達し，また故実典礼にも精通した当代第一流の文化人で，『北山抄』『和歌九品』『金玉集』など著作も多い。中務卿具平親王と人麿・貫之の優劣を論じたり，長能は公任の批評を気にして薨じたり，和歌の権威であった逸話も枚挙にいとまがない。『拾遺集』を撰んだともいわれ，家集『前大納言公任卿集』一巻を残す。「あさまだき嵐の山の寒ければもみぢの錦着ぬ人ぞなき」。万寿元（一〇二四）年致仕，同三年出家，十五年後の長久二（一〇四一）年に薨じた，七十六歳。世に四条の大納言と称された。

（一部注を省略した）

　関心を引かれるのは,「競合した斉信に官位を越えられ悲観して中納言の辞表を出す」という箇所。この点について『王朝の歌人 7　藤原公任』では，以下のように説明されている。

　斉信はぬけめのない俊敏な人物で，なかなかのやり手であって，道長に重用され，公任より一歳年下だったが，寛元元年（一〇〇四）に官位で公任より上に立ち，公任は衝撃のあまり一時籠居す

るにいたった。以後，斉信はつねに公任の上席にあり，（略）公任は斉信にまんまと一杯くわされて，芸能事でも優位にたてなくなってしまった。

このエピソードからは，芸能事に優れ，風流を愛するというイメージだけでは語りえない，強く出世を渇望する姿がうかがえる。実際のところ，「三船の才」も「漢詩の船に乗っていれば，名も上がっただろうに」と述べていて，そこには当代一の風流人としての自負だけではなく，同時代の他の人物同様に，名誉欲に燃える平安の男の姿が垣間見える。

また次のエピソードからも，人物才覚優れていたとされる公任とは，また違った一面をうかがわせる。以下は『大鏡』五九段，引用は『鑑賞　日本古典文学　第 14 巻　大鏡・増鏡』によった。

この大納言殿，無心の言ひとたびぞのたまへるや。御妹の四条の宮（の），后に立たせ給ひて，はじめて内へ入り給ふに，洞院のぼりにおはしませば，東三条の前をわたらせ給ふに，大入道殿も故女院も，胸痛くおぼしめしけるに，按察大納言は后の御兄にて，御心地よくおぼされけるままに，御馬をひかへて，「この女御は，いつか后に立ち給ふらん」と，うち見入れてのたまへりけるに，殿をはじめ奉りて，そ の御族，安からずおぼしけれど，男君おはしませばたけくぞ。よその人々も，益なくものたまふかなと聞き給ふ。

一条院位につかせ給へば，（また）女御，后に立たせ給ひて，内に入り給ふに，この大納言殿の，亮につかうまつり給へるに，出車より扇をさし出だして，「やや物申さん」と，女房のきこえければ，何事にかとて，うち寄り給へるに，進の内侍，顔をさし出でて，「御妹の素腹の后は，いづくにかおはする」と聞えかけたりけるに，「先年の事を思ひおかれたるなり。みづからだにいかがと思ひつることなれば，道理なり。なくなりぬる身にこそとこそおぼえしか」とこそのたまひけれ。されど，人柄よろづによくなり給ひぬれば，事にふれて捨てられ給はず，かの内侍のとがなるにて止みにき。

この大納言公任殿は，たった一度だけ，心ない失言をなさったことですよ。御姉にあたる四条の宮（遵子）が皇后にお立ちになって，はじめて宮中におはいりになる時に，西洞院通りを北においでになったから，兼家公の東三条邸の前をお通りになったのですが，邸内では大入道殿（兼家）も故東三条院様も，にがにがしくお思いになっていたところへ，按察大納言は新后の御弟というわけでごきげんよくお思いなされたあまりに，東三条邸の前で御馬をとどめて，「ここの女御は，いつ皇后にお立ちになるのだろう」と邸内をのぞきこみながらおっしゃったのには，大入道殿をはじめ申しあげて，その御一族のかたがたが心外にお思いになったことでしたが，こちらの女御には男御子がいらっしゃるから気強くお考えになって我慢されたのでした。他家の人々も，つまらぬ放言をなされるものと大納言の言葉をお聞きなされた。

一条帝が御即位になったので，（今度は）大入道殿の女御が立后されて，皇太后として宮中におはいりになる折に，この大納言殿が，皇太后宮職の亮としてお供申しあげなさっていると，晴れの装束の女房車から扇を出しさし招いて，「もし，申しあげたいことがあります」と女房が申したので，何事かと思って大納言殿がお近づきになると，進の内侍という女房が顔を出して，「御姉君の素腹の后様は，今どちらにいらっしゃいますか」と問いかけ申したので，大納言殿は，「先年の私の失言を根に持っておられるのだ。自分自身でさえどうしてあんな事をいったのかと気がとがめている事だから，もっともな次第だ。穴があったらはいってしまいたいとまで恥ずかしく思われた」としみじみおっしゃったことでした。しかしこの後も，万事につけ人物が御立派におなりになったので，何

か事あるたびに仲間はずれにもならず，結局この一件も，さっきの進の内侍の失言ということでけりはついたのでした。

公任は自分の姉が皇后となったことに浮かれて，道長の父兼家の住まいの前で「ここの家の女御はいつ皇后になるのか」と挑発するのである。とても人物優秀な公任の言動とは思われない。公任の父頼忠には，政敵でもあった兼家が罪もなく左遷されたことに対して抗議し，天皇に奏上した結果，兼家が昇進したという高潔な人柄を示すエピソードがあるが，その一方息子公任による若さゆえのこの失言は，敵を作るのみならず，兼家の娘詮子には東宮となるべき息子がいるという事実を見落としたものであり，脇の甘さが見て取れる。

また，「無心の言ひとたびぞのたまへるや」とあり，失言が一回だけであり，その後は立派になった，という内容で話は締めくくられているが，『鑑賞　日本古典文学　第 14 巻　大鏡・増鏡』の解説部によると「失言もたびたびであったらしい」として，『十訓抄』第四より，このような説話も引いている。

四納言と併称された公任・行成・斉信（法住寺太政大臣為光の子）・俊賢（西宮右大臣高明の子）が蹴鞠に興じたとき，落ちた鞠をみて，
「此鞠をば大臣大将の子ならざらむ人とるべし」
と放言して，若死のため少将に終わった義孝の子である行成をして，
「短命こそ口惜しけれ。少将（父義孝）　生きたらましかば，三公の位をばきらはれざらまし」
と愁嘆させたともいわれる。

『十訓抄』では「これを，公任卿の非愛なるにてぞありける」と結ぶ。どうも思いやりにかけたところのあった姿が浮かび上がってくる。

さて，芸事のエキスパートであった公任として見たときにも，現代の我々の感性からすると，評価の分かれそうなエピソードもある。『枕草子　日本古典文学全集 11』から一一〇段を以下引用する。

二月つごもり，風いたく吹きて，空いみじく黒きに，雪すこしうち散るほど，黒戸に主殿司来て，「かうして候ふ」と言へば，寄りたるに，「公任の君，宰相の中将殿」とあるを見れば，懐紙に，ただ，
　すこし春ある心地こそすれ
とあるは，げに今日のけしきに，いとようあひたるを，これが本はいかがつくべからむと思ひわづらひぬ。「たれたれか」と問へば，「それそれ」と言ふに，みなはづかしき中に，宰相中将の御いらへをば，いかが事なしびに言ひ出でむと心ひとつに苦しきを，御前に御覧ぜさせむとすれども，うへもおはしまして，御とのごもりたり。主殿司は，「とくとく」と言ふ。げにおそくさへあらむは，取り所なければ，「さはれ」とて，
　空寒み花にまがへて散る雪に
と，わななくわななく書きて取らせて，いかが見たまふらむと思ふにわびし。これが事を聞かばやと思ふに，そしられたらば聞かじとおぼゆるを，「俊賢の中将など，『なほ内侍に申してなさむ』と定めたまひし」とばかりぞ，右兵衛佐中将にておはせし，語りたまひし。

二月の月末ごろ，風がひどく吹いて，空がひどく黒いのに，雪が少しちらつくころ，黒戸に主殿司が来て，「こうしてお伺いしております」と言うので，わたしが近寄ったところ，「公任の君，宰相の中将殿のお手紙」ということで持って来ているのを見ると，懐紙に，ただ，

すこし春ある……(少し春があるような気持がする)

と書いてあるのは，いかにもきょうの空模様に，とてもうまく合っているのを，これの上の句はどうつけたらよかろうと思案にくれてしまう。「どなたたちか」と同席の方をたずねると，「これこれの方々」と言うのに，みな恥ずかしいほど立派な方々の中で，宰相の中将への御応答は，どうしていいかげんに言い出せようか，と，自分の心一つで苦しい思いがするので，中宮さまの御前に御覧に入れようとするけれども，主上もおいであそばして，御寝あそばしていらっしゃる。主殿司は，「早く早く」と言う。いかにもこのうえ遅くまであろうのは，取柄がないので，「ままよ」というわけで，

空寒み……(空が寒いので花に見まがうばかりに散る雪に)

と，震え震え書いてわたして，どう御覧に なっておいでかと思うと，心細い。これの評判を聞きたいと思うのに，非難されているのなら聞くまいという感じになるのを，「俊賢の中将などが，『やはり内侍にと任命を御願い申しあげて，内侍にしよう」と評定なさったよ」とだけ右兵衛の佐の，そのころ中将でおいでになった方が，お話しになった。

清少納言が実際のところ「わななくわななく」書いたかどうかもまた議論の余地があるだろうが，立派な人物の集まる場の遊戯として，いち女房に下の句を送りつけ，試すような態度を取る公任についても，その人物を論ずる価値はありそうだ。

３．授業の方針

これらの資料から読み取ることのできる公任の人物像は多様であり，決して一貫はしていない。しかし，それは作り物語の登場人物ではなく，公任がその時代を生きた実在の人物であるがゆえのものであると言えるのではないだろうか。年齢や立場が変われば人間は同じではいられない。また，それを見つめる視点が異なればその評価もまた変わる。どれかが正しく公任を表すものなのではなく，全てどれも紛れなく公任その人を表した記述なのであろうと考える。

それを踏まえて，今回は藤原公任という一人の人物を多面的にとらえるというねらいを設定し，前項で述べたような人物に関わる補助資料と関連させながら，ジグソー法を用いて読みを伝えあい交流して広げ深めていくという学習活動を構想した。

４．授業の実際

授業の実際に関しては学習指導案を参照。以下，授業に用いた補助資料（ワークシート）を添付する。

この大納言（公任）はどのような人物か？

組　番　名前

※あなたはどの資料のエキスパートでしたか？

A　・　B　・　C

この大納言（公任）は

人物であると判断した。

根拠とした資料は（○をつける・複数可）

教科書本文　・　A　・　B　・　C

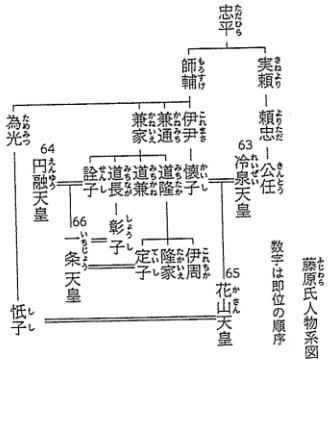
判断の理由・根拠

A

出典『大鏡　日本古典文学全集20』橘　健二、一九七四年、小学館

一 心づかいのたりない失言。二 四条の宮遵子の立后は、天元五(九八二)年三月十一日(日本紀略)。入内は天元五年五月七日(日本紀略)。三 藤原兼家の邸宅。→一七注一五。四 兼家。道長を入道殿と呼ぶのに対し、親の兼家を大入道殿と呼んだ。兼家の出家入道は永祚二(九九〇)年五月八日(日本紀略)。五 東三条の女院詮子。六 兼家の女。当時、円融院の女御。七 同じく女御ではあるが、遵子が詮子を追い越して立后したから。七 皇子懐仁は親王(一条天皇)。八 一条天皇の即位は寛和二(九八六)年六月二十三日(日本紀略)。九 一条天皇の母、女御藤原詮子が、寛和二年七月五日、皇太后にたった(日本紀略)。一〇 底本・東松本は「大納言啓のすけ」とするが、近衛家本による。「啓」は、「皇太后宮亮」か。公任がこの職にあったという確証はない。一一 車の簾の下から女房の袖口や裳の裾などを飾りに押し出している女車。一二 女房の呼び名。「進」は、その女房の父兄または夫が中宮職・皇太后宮職の大進少進であったためであろう。「内侍」は、内侍の司の掌侍の略称。『栄花物語』(こうもりのたま)によれば、万寿二(一〇二五)年八月、藤原長家室の逝去のおり、哀傷の歌を詠んだ進の内侍がいる(松村博司説)。一三 子を産まない女、という語。産まず女。一四 「身にこそ」は「身にこそありけれ」の略。恥ずかしくて、消えてなくなりたい思いだ、の意。一五 底本・東松本「ほか」とするが、蓬左本・桂宮本・久原本・橋本により「とが(咎)」とする。✤公任は、妹の四条の宮が立后して、そのうれしさのあまり、兼家の邸の前を通り、故東三条の女院を軽侮する失言をして、その一族から恨みをかうが、故女院が皇太后にたって公任は皇太后宮亮となるや、故女院の女房から仕返しを受けるが、公任の人柄がよくみられていたので、女房の過失となってすんだのである。

この大納言殿、無心のこと一度そのたまへるや。御妹の四条の宮の后にたちたまひて、初めて入内したまふに、洞院のぼりにおはしませば、東三条の前をわたらせたまふに、大入道殿も、故女院も胸痛く思し召しけるに、按察大納言は后の御せうとにて、御心地のよく思されけるままに、御馬をひかへて、「この女御は、いつか后にはたちたまふらむ」と、うち見入れてのたまへりけるを、殿をはじめたてまつりて、その御族やすからず思しけれど、男宮おはしませば、たけくぞ。よその人人も、「益なくものたまふかな」と聞きたまふ。一条院、位につきたまへば、女御、后にたちたまひて入内したまふに、大納言殿の、亮に仕まつりたまへるに、出車より扇をさし出して、「やや、もの申さむ」と、女房の聞えければ、「何事にか」とて、うち寄りたまへるに、進の内侍、顔をさし出でて、「御妹の素腹の后は、いづくにかおはする」と聞えかけたりけるに、「先年のことを思ひおかれたるなり。みづからだにいかがとおぼえつることなれば、道理なり。なくなりぬる身にこそとこそおぼえしか」とこそのたまひけれ。されど、人がらしよろづによくなりたまひぬれば、ことにふれて捨てられたまはず、かの内侍のとがなるにてやみにき。



藤原氏人物系図
数字は即位の順序

〔五九〕大納言公任の失言

〔五九〕この大納言公任卿が、心づかいの足りない失言をたった一度だけおっしゃったことがありますよ。それは御姉妹の四条の宮遵子さまが后におたちになり、はじめて入内なさいますときに、西洞院の通りを北に向かっておいでになりましたので、東三条殿の前をお通りになりましたところ、大入道殿兼家公も故東三条院の女院詮子さまも、遵子さまに后を追い越されたことを苦しく辛いことと思っていらっしゃいましたが、按察使大納言公任卿は、后の御兄弟でいらっしゃいましたから、すっかりいい気持になられたあまり、東三条殿の女御は、いつになったら后におたちになられるのだろう」などと、邸の中を覗きこみながらおっしゃったのを、大入道殿をはじめもうして、そのご一族は、心おだやかでなくお思いになりましたが、女御詮子さまには、男皇子懐仁親王がいらっしゃいましたから気強く思っておられたことですよ。他家の人々も、この公任卿の放言を、「つまらぬことをおっしゃったものだ」とお聞きになりました。そのうちに一条天皇がご即位なされましたので、天皇の御母君、女御詮子さまは皇太后宮におたちになって、入内なさいましたが、そのとき、この大納言公任卿が皇太后宮亮としてお供をしていらっしゃったところ、お供の女房たちの乗っている出車から扇をさし出して、「もしもし、ちょっと、ものを申しあげたい」と、ある女房が申しあげましたので、「なにごとですか」といって、車のそばへお寄りになりますと、進の内侍が顔をさし出して、「お妹君の石胎のお后は、どこにおいでですか」とお問いかけもうしたということですが、公任卿は、「先年の、あの東三条殿の邸前での私の失言をおぼえていらっしゃってのことだな。自分ですら、どうかしらと気が咎めていたことなのだから、こんなことをいわれて恥ずかしい思いをするのもしかたのないことだ。自分の身が消えんばかりだったよ」と後日おっしゃったということです。しかし、もともと人柄が万事にわたってりっぱに洗練されていらっしゃると世間からみられていましたので、なにかことあるときにも世間から仲間はずれにされなさらず、あの進の内侍のあやまちだということで、けりがつきました。

この文章は『大鏡』に収載されている公任が十六歳前後のエピソードである。

課題Ａ：大納言公任の失言とはどのようなものであったか？

B

出典『枕草子　日本古典文学全集11』松尾　聡・永井　和子、一九七四年、小学館

一一〇　二月つごもり、風いたく吹きて

二月つごもり、風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち散るほど、黒戸に主殿司来て、「かうして候ふ」と言へば、寄りたるに、「公任の君、宰相中将殿の」とあるを見れば、懐紙に、ただ、

すこし春ある心ちこそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとようあひたるを、これが本はいかがつくべからむと思ひわづらひぬ。「たれたれか」と問へば、「それそれ」と言ふに、みなはづかしき中に、宰相中将の御いらへをば、いかが事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前に御覧ぜさせむとすれども、うへもおはしまして、御とのごもりたり。主殿司は、「とくとく」と言ふ。げにおそくさへあらむは、取り所なければ、「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかが見たまふらむと思ふにわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の中将など、『なほ内侍に申してなさむ』と定めたまひし」とばかりぞ、右兵衛佐中将にておはせし、語りたまひし。

一一〇

二月の月末ごろ、風がひどく吹いて、空がひどく黒いのに、雪が少しちらつくころ、黒戸に主殿司が来て、「こうしてお伺いしております」と言うので、わたしが近寄ったところ、「公任の君、宰相の中将殿のお手紙」ということで持って来ているのを見ると、懐紙に、ただ、

すこし春ある……(少し春があるような気持がする)

と書いてあるのは、いかにもきょうの空模様に、とてもうまく合っているのを、これの上の句はどうつけたらよかろうと思案にくれてしまう。「どなたたちか」と同席の方をたずねると、「これこれの方々」と言うのに、みな恥ずかしいほど立派な方々の中で、宰相の中将への御応答は、どうしていいかげんに言い出せようか、と、自分の心一つで苦しい思いがするので、中宮さまの御前に御覧に入れようとするけれども、主上もおいであそばして、御寝あそばしていらっしゃる。主殿司は、「早く早く」と言う。いかにもこのうえ遅くまであろうのは、取柄がないので、「ままよ」というわけで、

空寒み……(空が寒いので花に見まがうばかりに散る雪に)

と、震え震え書いてわたして、どう御覧になっておいでかと思うと、心細い。これの評判を聞きたいと思うのに、非難されているのなら聞くまいという感じになるのを、「俊賢の中将などが、『やはり内侍にと任命を御願い申しあげて、内侍にしよう』と評定なさったよ」とだけ右兵衛の佐の、そのころ中将でおいでになった方が、お話しになった。

二 長保元(九九九)年または二年のころであろう。三 主殿寮の役人。四 今のごめんくださいという挨拶のことばに当たり、「かくて候ふ」の誤写といわれる。五 関白太政大臣頻忠の長男。当時の歌壇の第一人者。宰相は参議の唐名。正暦三(九九二)年参議。長保三(一〇〇一)年八月中納言、寛弘六(一〇〇九)年権大納言。「宰相中将殿」は不審。「公任の君すなわち宰相中将殿」とするのは公任が宰相中将であったことはないために疑わしい。長徳二(九九六)年四月～長保三年八月、藤原斉信が宰相の中将であったが、後の文意からみて二人とみることも無理であろう。三本「公任の宰相殿の」とある。

一「…三時雲冷カニシテ多ク雪ヲ飛バシ、二月山寒ウシテ少シク春有リ」(白氏文集十四・南秦の雪)に拠って言ったもの。二 相手がすぐれていて、こちらが恥ずかしいほどであること。三 三本「宰相の御いらへを」。四 事がないかのような様子。五 下手なのに加えて遅くまであるのは。六 先の「白氏文集」の句に拠って答えたもの。「まがふ」は見まちがえさせること。七 源俊賢。西宮の左大臣源高明の三男。長徳元(九九五)年八月参議、寛弘元(一〇〇四)年正月権中納言。のち権大納言に至る。長保三(一〇〇一)年八月から右近の中将を兼ねているが、この当時の称呼としては疑わしい。三本「俊賢の宰相など」。マ本「俊賢の宰相中将など」。八 内侍は掌侍(ないしのしょう)の略称。「なさむ」は「内侍になさむ」の意。九 その付句の価値を、一説、作者の内侍任命奏請を、一〇 「右兵衛佐」は不明。三本の「左兵衛督」に従って太政大臣藤原公季の長男実成とすべきか。長徳四(九九八)年十月右近の中将、寛弘五(一〇〇八)年正月参議。同六年三月左兵衛督兼任。マ本「右兵衛督」。

この文章は『枕草子』の公任（三十代半ば）が登場するエピソードである。

課題Ｂ：清少納言に「すこし春ある～」を送った意図は何だろうか？

C

出典『王朝の歌人7　藤原公任』小町谷　照彦、一九八五年、集英社

①

天元三年（九八〇）二月二十五日、公任は清涼殿で元服した。時に十五歳であった。『日本紀略』には次のように記されている。

太政大臣息男、清涼殿ニ於イテ元服ヲ加フ。右兵衛督（藤原）遠度理髪。左大臣（源）雅信）加冠。即チ正五位下ニ叙ス。名ハ公任也。天皇入御。又大臣以下殿上人ニ被物有リ。太政大臣儲ケアンヌ。又、中殿ニ於イテ諸陣ニ屯食ス。此ノ間、新冠者公任弓場殿ニ於イテ蹴ビヲ申ス。

清涼殿で臣下が元服するのは異例のことであり、屯食は強飯を盆の上に丸く盛りあげたものだが、諸陣すなわち衛兵たちに屯食を供応するのも親王の元服と同等のあつかいだった。元服のさいに臣下にあたえられる官位は通常従五位下であり、『公卿補任』に、

天皇ノ御前ニテ元服ヲ加フル日、叙スル所也。

とわざわざ注記されているように、正五位下に叙せられたのも破格なことであった。『扶桑略記』には、

関白太政大臣藤原頼忠朝臣嫡子公任、殿上ニ於イテ元服、天皇手自ラ冠ヲ授ケ首ニ加フ。

とあり、加冠役の左大臣源雅信はそれとして、天皇自身加冠されたとすれば、このうえもなく光栄な儀式だったことになる。名前も幼名から公任に改められ、ここで公任は社会的に認められた存在となった。

事態がこのままの状況で続いていけば、公任の前途は洋々たるものだった。その名前のとおり公事に任務して摂関の地位につく道筋にあったからである。元服の日に昇殿を許され、三月七日（『公卿補任』。『日本紀略』では三月三日）に禁色（天皇の許可がなくては使用できない衣服の色）を許され、七月一日には侍従となって、官位の昇進はまったく順調ではなはだしかった。翌天元四年正月七日には従四位下にのぼり、正月十日に昇殿している。ちなみに、藤原道長はこのころまだ従五位下だった。

②

鎌倉時代の説話集『古事談』第一に、清暑堂の神楽で公任をだしぬいた藤原斉信の説話が出ている。

後一条院ノ御時、清暑堂ノ御神楽ニ、公任卿拍子ヲ取ルベキニテアリケルニ、臨時ニ斉信卿ノ上ニ坐サレタリケルニ、笏ヲサシ遣リテ、気色バカリ譲ル由ヲセラレケルニ、ヤガテ笏ヲ取リテ、拍子ヲ取ラルト云々。公任アヘナク思ヒテ、始終コレヲ聞キケリ。一失ナケレバ、事畢リテ後、「何時ヨリコノ事ハ御沙汰候フヤ」ト問ヒケレバ、「コレマデハ公事ナレバ習ヒテ候フナリ」ト答ヘラレケルト云々。

斉信はぬけめのない俊敏な人物で、なかなかのやり手であって、道長に重用され、公任より一歳年下だったが、寛弘元年（一〇〇四）に官位で公任より上にたち、公任は衝撃のあまり一時籠居するにいたった。以後、斉信はつねに公任の上席にあり、このときは拍子をとるために公任は臨時に斉信の上座にいたのである。公任はまさか斉信が拍子をとるまいと思っていたので、かたちばかりの敬意を表して、拍子をとるための笏を斉信のほうにさしだしたところ、意外にも斉信は笏を受けとって拍子をとりはじめた。公任が呆然としていたところ、斉信はとうとう終わりまですこしの間違いもなくやりとげてしまった。公任がびっくりして、いつから拍子をとるようになったかと聞くと、斉信は平然として、公事だから日どろから用意していたのだ、と答える。公任は斉信にまんまと一杯くわされて、芸能事でも優位にたてなくなってしまった。

清暑堂は豊楽殿と不老門とのあいだにあった殿舎で、大嘗会のさいに神楽がおこなわれるならどした。後一条天皇のときには、長和五年（一〇一六）十一月十七日におこなわれ、斉信や公任が名をつらねている（『御遊抄』）。この説話はこのときのものだろう。前代の三条天皇のとき、長和元年（一〇一二）十一月二十四日には、公任は拍子の役をつとめている。

風流文事優先の宮廷社会において、自己の無芸無才を披露することは、とりもなおさず、社交の場からの脱落者であることを表明することであった。斉信が拍子の習練をつんでいたのは、宮廷社会における生存競争を勝ちぬくための生活の知恵であった。斉信は公任よりも一枚上手だったのである。

①は公任（十四歳前後）の元服の模様に関する記述である。
②は公任が三十代から四十代の頃の記述である。
課題C：①、②から公任についてどのようなことが言えるか？

５．研究協議会記録及び省察

（１）検討会で頂いたご意見，ご感想等

①　成果

・学習課題が明確であった。普段の授業とは異なる設定で興味が湧く。
・教科書の内容から考えて読むと裏切られるような，資料の有効性があった。
・ジグソー法を用いた言語活動が活発に行われていた。
・最終的な判断を下す際に，自分が担当した資料ではないものを用いている生徒もいて，ジグソー法を用いた効果が見られた。
・生徒への言葉かけにより意欲を引き出していた。
・導入で提示した公任の和歌に関する発問が面白いと思う。

②　課題

・一時間で完結させる必要はないのでは。これからもっと広がっていく内容である。
・公任の才能の巧みさに気付かせるためにはもう一段階必要なのではないか。
・主発問に関して諸毒の文章から多くの情報を整理するのは大変だと思う。「公任はどんな人物か」の一点に絞っても良かったのではないか。
・ワークシートの向きは揃えた方がよかったと思われる。資料を参照するときに手間がかかる。

（２）省察

他教科の授業を拝見すると，時折ジグソー法の手立てを用いた実践と出会う。かねてより，協力して課題を解決するというその学習活動に魅力を感じていた。今回この教材を授業で扱う上で，教科書の内容に収まらない藤原公任という人を読み取ることで，古人の考え方に触れるおもしろさを体感できるのではないかと考え，それをきっかけとして，補助資料と関連しながら，他の人の読みにも触れつつ人物を読んでいく，という授業を構想した。ジグソー法の実践を構想するにあたっては，地歴公民科の先生からのアドバイスが大変参考になった。おそらく現段階では，国語におけるジグソー法を用いた授業実践は多くない。無論，学習活動ありきで授業が行われるわけではないが，個人の読みに止まらずに，対話的・交流的な授業をしたいと考えている国語教員は多いのではないかと考える。本実践は拙いものではあるが，その一試案となればと考えている。

反省として，どうしても教材研究を綿密に行うと，教員としてはいわゆる「教えたい」状態になってしまう。その中から生徒に身につけさせたい能力を考えて，焦点化していかなくてはならないが，今回の授業に関しては，ご指摘にあった通り，一時間で行うには，かなり苦しい内容であったように感じる。また，筆者自身が今回ジグソー実践を初めて行ったため，手続き上の点で改善すべきところが多くあった。このことに気付くことができたのは，他教科のジグソー実践を積み重ねている先生に授業を見て頂き，アドバイスをもらったことによるものである。感謝申し上げるとともに，教科の垣根を越えて授業研究を行うことの価値を感じた。是非授業を互いに参観し合うとともに。他教科における優れた実践を自分の科目に流用できないかという観点を持っておくべきであると感じた。

今回の実践をもとに，学習課題の立て方や対話的な授業の在り方などについて精査し，さらに授業実践を発展させたい。

６．教材研究における引用・参考文献

・『大鏡　日本古典文学全集 20』橘　健二，一九七四年，小学館
・『新古今和歌集　日本古典文学全集 26』峯村　文人一九七四年，小学館
・『王朝の歌人７　藤原公任』小町谷　照彦，一九八五年，集英社
・『鑑賞　日本古典文学　第 14 巻　大鏡・増鏡』山岸　徳平・鈴木　一雄，一九七六年，角川書店
・『枕草子　日本古典文学全集 11』松尾　聰・永井　和子，一九七四年，小学館

第１学年３組　公民科（現代社会）　学習指導案

日時　　令和元年１１月６日（水曜日）２校時
授業者　　横手高等学校教諭　髙橋　直樹
使用教科書　改訂版高等学校現代社会（数研出版）
使用副教材　フォーラム現代社会（とうほう）

１　単元名　「日本国憲法の基本原理　～基本的人権の保障～」

２　目標

（１）日本国憲法における基本的人権保障の基本原則は、「個人の尊重」、つまり「人間の尊厳」と「生命・自由及び幸福追求に対する国民の権利」を保障することにあることを理解する。

（２）「法の下の平等」については、その意義について種々の差別問題を関連させて理解させ、具体的解決策を探求させたり、望ましい国家や社会のあり方について考える。

（３）自由権については、「国家からの自由」、つまり「国家からの干渉、あるいは不作為による侵害を受けないこと」を内容とすることを理解する。

（４）社会権については、人間の自由や尊厳を確保するために国家・政府に要求することのできる権利であり、国家・政府が積極的に立法等により保障しなくてはならない権利であることを理解する。

（５）人権を具体的に維持・実現するために、参政権・請願権・裁判を受ける権利・損害賠償権等や法定手続きの保障があること、また国民としての義務があることを理解する。

（６）現代社会の進展に伴って、憲法１３条等を根拠として新しい人権が提唱され、判例で認められているものも現れていることを認識する。

３　単元の指導計画（７時間中の２時間目）

（１）平等権１　　法の下の平等の考え方はどのようなものか ・・・・・・・・・１時間
（２）平等権２　　平等な社会について考える ・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間（本時）
（３）平等権３　　条件的平等について考える ・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間
（４）自由権１　　精神的自由はなぜ守られなければならないのか ・・・・・・・１時間
（５）自由権２　　身体的自由はなぜ守られなければならないのか ・・・・・・・１時間
（６）社会権　　国家はどこまで国民を守らなければならないのか ・・・・・・１時間
（７）新しい人権　現代社会においては、どんな人権が必要なのか ・・・・・・・１時間

４　生徒　　１年５組　３３名（男子２０名、女子１５名）

５　本時の計画

（１）学習課題　　社会の中に存在する不平等な出来事や差別問題を知り、共生社会実現に向けた解決策について考える。

（２）ねらい

・国内外で起こっている不平等な出来事や、様々な差別問題について理解する。
・差別を解決するための１つの方策である「アファーマティブ・アクション」の是非について考える。
・共生社会を実現するためには、どうしたらよいのかについて解決策を考える。

（３）展開　　Ａ：関心・意欲・態度　　Ｂ：思考・判断・表現　　Ｃ：資料活用の技能　　Ｄ：知識・理解

過程	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 （5分）	○パワーポイントの設問を読み、理由を考える。 ・外科医を無意識に「男性」だと考えてしまうのはジェンダーバイアスがかかっていることに気付く。 ・本時の「学習課題」を確認する。 **本時の目標：様々な差別問題を知り、共生社会実現に向けた解決策について考える。**	○答えがわかっても声に出さないように注意する。	
展開 （40分）	【個人での学習活動（２０分）】 ○憲法１４条「法の下の平等」の考えを通して、差別のない社会を理想としていることを理解する。 ○パワーポイントの写真やグラフを通して、国内外で起こっている不平等な出来事や、差別問題について理解する。ワークシート１に理解したことを記述する。 事例１　男女の不平等 事例２　外国人差別 事例３　被差別部落問題（同和問題） 事例４　アイヌ差別 事例５　障害者差別 ○ワークシート設問３の「アファーマティブアクション」の是非に関する資料を読み、考えたことをまとめる。（７分）	○後半に時間を残すために、興味を持たせつつ簡潔にスライドを紹介する。	D 世の中でおこっている不平等な出来事や、差別問題を理解する。ワークシートに事例１～事例５を自分の言葉で記述できる。（ワークシート） B 自分なりの判断基準で考えを記述できる。（ワークシート）
	【グループでの学習活動（約２０分）】 ○５人～６人１班のグループを作る。（計６班） ○ワークシートの設問３についてグループ内で発表しあい、共有する。（約７分） ○グループから選出された代表者が意見を発表する。	○各グループの意見を大切にし、自由に発表できるような雰囲気づくりをする。	B 自身の考えをグループ内や全体の前で発表することができる。（観察・発表）
まとめ （10分）	【学習の振り返り　１０分】 ○共生社会の実現のための解決策についてワークシートにまとめる。 ○（余裕があれば）代表者が意見を発表する。 ○ワークシートに「振り返り」を記入する。	○回答を生徒にフィードバックする場合は、この考えは良いこの考え方は悪いという捉えた方をしないようにする。 ○机間巡視をして、どの生徒が発表にふさわしいのかについて、目星をつけておく。	

令和元年度横手高校公開研究授業
研究協議会記録（地歴・公民科）

記録者　佐々木　満

Ⅰ　日　程

【研究授業】

日　　時：１１月６日（水）９：４５～１０：４０（２校時）
場　　所：秋田県立横手高等学校　１年３組教室
対象生徒：１年３組（３３名）
科 目 名：現代社会
単 元 名：日本国憲法の基本原理～基本的人権の保障～
授 業 者：髙橋　直樹

【研究協議会】

日　　時：１１月６日（水）１０：５０～１１：４５

Ⅱ　研究協議会参加者

木村留衣子、阿部政任、打矢泰之、髙橋直樹（授業者）、佐々木満

Ⅲ　授業者からの報告

・（予想通り）少女側に賛同する意見が多く、意見が一方に偏るのであれば班内で少女側、ロースクール側と分けて行ってもよかったと思った。少数者の視点を持って欲しいという思いが生徒に伝わっていれば嬉しい。
・パワーポイントを使った視聴覚教材は現代の生徒に合っており、言語のみよりも映像等で訴えた方が効果があるように感じる。アイパッドやクロームブックも積極的に活用すべきと思う。
・タイムキーピングは自分の課題の一つ。今回は、絶対最後のまとめに１０分時間を残すと決めて授業に臨んだので、ほぼ予定通りに授業を進めることができたが、たまたまな感じが否めない。

Ⅳ　参加者からの感想

○学習課題の提示・確認

・いろんなところで分断が起きている今だからこそ意味のあるテーマ設定だった。大学入試も生徒の関心事なので、自分事として考えやすい。
・学習課題を提示する前段階として、導入で身近なニュースなどを取り入れ、生徒の知的好奇心をくすぐる工夫がうかがえた。
・「外科医＝男性」と思いがちである、という指摘が学習の導入として効果的であった。

〇思考判断

・生徒の意見を見たところ、「多様性の担保」といっても、個人の生き方（いきがいとか挑戦みたいな）の保障にもっていく生徒と社会全体のための多様性という意味に気付けている生徒がいた。個人の自己実現だけではなく社会全体の利益という捉え方にも気付かせたい。

〇言語活動

・資料を読むのにも時間制限を設けることで、速読の練習にもなる。

・少女側、ロースクール側についての話し合いは、授業者が振り返った通り、班内で少女側、ロースクール側に分けて行うことも効果的。主張を分析することで深い学びが得られるのでは。

〇板書の工夫

・パワーポイントによる授業であったが、学習課題を板書していたのは、常に生徒に意識させる上で効果的であった。

・今日の授業の流れを折りに触れて提示していたのは、「何をするか」の明確化であり効果的だった。生徒が見通しをもって授業に向かうことができている。

・少女側かロースクール側かの話し合いの意見集約をする際、板書のまとめ方がわかりやすく的確であった。クラス全体での意見共有や、他のグループとの比較もできていた。

〇その他

・説明の際の言葉が選び抜かれており、分かりやすい。授業のテンポや強弱も集中しやすいものだった。

・日頃から生徒同士の意見交換をよく行っている様子がうかがえた。

◎研究テーマ「生徒の知的好奇心を刺激する発問の工夫」について

・１つの学習項目が終わるたびに、ペアワーク活動を採用している。出来事の背景や理由、結果などを説明させたり、生徒が当事者であればどのような選択をするのか、その理由も考えさせている。

・問いに対する答えを探そうとした時に、生徒の中に「既習事項」「時事的問題」などが想起され、手元にその疑問に応えるような「資料」があり、それらを駆使するような問いの発し方が重要と考えている。例えば「日本の電力生産とインドの電力生産の違いと共通点」について、両国の電力構成、人口規模、産業規模、発電事情、国際情勢を材料として考えさせるなど。

・既習事項を複数使って答えを出せる（出せそうな）発問をする。答えのある問いなので、あくまでも頭の使い方を刺激しているだけだが。例えば１年生の世界史Ａの導入での発問。日本で一番高い山は富士山だが、「日本で最も高い山が富士山」ではなかった時代がある。それはいつ頃、どのような理由か。中学校での既習事項から答えなさい。

・難問、難しい用語や単語についての発問や時事的問題、生徒の発言、生徒の生活、１つの絵や写真などについての発問も効果的と考える。

・「正解のない時事問題」を考えさせたいと思っており、答えのない問いに対する同級生の意見に触れることが知的好奇心を刺激すると感じている。考えさせるだけでなく、全体の前で発表させたり、意見をまとめたプリントを配付すると、より効果的であると思う。

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

日　　時　　令和元年１１月８日（金）２校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校
対象生徒　　１年５組（普通・理数科・男子１８名＋女子１６名＝計３４名）
教 科 書　　改訂版　高等学校　数学Ⅰ　（数研出版）
指 導 者　　堀川貴絵

１．単元名　　図形と計量

２．単元の目標

①三角比の意味やその基本的な性質について理解し，三角比を用いた計量の考えの有用性を認識するとともに，それらを事象の考察に活用できるようにする。
②正弦定理・余弦定理を導き、これを利用して三角形の辺と角の間の関係を明らかにするなど、いろいろな問題を通して有用性の理解を深めさせる。

３．生徒の実態

男子１８名、女子１６名の普通・理数科クラスである。授業中のみならず、放課後や休み時間もお互いに教え合いながら、分からないところを解決しようとする姿が見られる。おとなしい生徒もいるが、クラス全体としては意欲的に取り組んでいる。

４．単元の指導計画

三角比、三角比の相互関係　（４時間）
三角比の拡張　（３時間）
正弦定理と余弦定理　（６時間）
演習問題　（３時間）　※　本時　１／3

５．本時の評価規準

項目	ア. 関心・意欲・態度	イ. 数学的な見方や考え方	ウ. 数学的な技能	エ. 知識・理解
内容	図形と計量における考え方に関心をもつとともに、数学のよさを認識し、それらを事象の考察に活用して数学的な考え方に基づいて判断しようとする。	図形と計量における事象を数学的に考察し表現したり、思考の過程を振り返り多面的・発展的に考えたりすることなどを通して、数学的な見方や考え方を身に付けている。	図形と計量における事象を数学的に表現・処理する仕方や推論の方法などの技能を身に付けている。	図形と計量における基本的な概念、原理・法則などを体系的に理解し、基礎的な知識を身に付けている。

６．本時の目標

①　空間図形の状況を把握し解法の方針を立て、それを説明することができる。
②　既習の三角比や図形の性質を利用して、必要な値を求めることができる。

７．本時の指導に当たって

グループ学習等で考えを共有したり、生徒の発表によってさらに理解が深まるように、手立てを工夫する。

８．本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １０分	・宿題のプリントを利用して既習事項の確認をする。 ・本時の課題の提示	・授業前に横の黒板に解法を書かせておく。	・既習事項が身についている。
	本時の目標：正四面体に内接する球の半径の求め方を説明することができる。		
	課題：1辺の長さが a である正四面体 ABCD に内接する球の半径 r が $r=\frac{\sqrt{6}}{12}a$ であることを説明せよ。		
展開 ３５分	具体的な発問①：内接球の半径をどのようにして求めたら良いか。		
	・課題を理解し、解法の方針を立てる。	・平面から空間への拡張を意識させる。 ・個人で考える時間をとった上で、近くの人とのペアワークや生徒の発言を拾い上げ、全体で方針を立てていく。	・問題の解法を視覚化、言語化して理解を深めている。 （イ）
	具体的な発問②：正四面体の体積 V を求めよ。		
	・グループで、問題を解く。	・進んでいないグループには助言する。 ・解答を導けたグループには、別紙に、模範解答としてまとめさせる。 ・早くできたグループには、挑戦問題を解かせる。	・積極的に問題解決に向けた話し合いに参加している。 （ア）
整理 １０分	本時の振り返り 次回の予告	・解法の過程を振り返る。	

令和元年度横手高校公開研究授業　研究協議会記録（数学科）

堀川　貴絵

Ⅰ　日　程

【研究授業】　令和元年１１月８日（金）９：４５～１０：４０（２校時）

研究授業（１５組）　「数学Ⅰ」　堀川貴絵　　於：１５組教室

単元名　第４章 図形と計量「空間図形への応用」

【研究協議会】　令和元年１１月８日（金）１６：００～１７：００

Ⅱ　研究協議会参加者

高橋雄一教頭、武塙章太、塩谷太、千田貴広、藤本亮、芳賀崇、小林朗子、堀川貴絵

Ⅲ　授業者からの報告

・これまで学習した内容を総動員して、グループで協力して「正四面体に内接する球の半径」を求めさせたいと考えた。扱う問題の順番は悩んだが、あえて正四面体の高さを扱わない状態で今回の授業とした。

・自分の不安から誘導しすぎた授業になってしまった。生徒たちの発言を引き出せなかったし、広げることもできなかった。

・目標が明確でなく、生徒が何をするのか、何をしているのかわからない状態になってしまった。

・自由に考えさせ、後で模範解答を完成させるという流れでもっていかせたかったので、解答については板書をしなかった。

・グループ学習は、最近取り入れるようになって慣れていない面が多い。活発に発言しあえる、協力しあえる工夫が必要だ。

Ⅳ　参加者からの感想

・事前の宿題プリントが本時の内容につながっていて、宿題プリントの問題の設定がよかった。

・模型はインパクトがあって、視覚的にわかりやすかった。

・模型を出すタイミングはもっと生徒の考えを引き出し、生徒に黒板で説明させるなどしてからの方がよかったのではと思う。

・学習課題は生徒の「なぜ」を刺激したよい題材だった。関心を高めたと思う。

・生徒が自由に発想、発言できる場面がもっと必要であった。

・生徒に問いかけたとき、説明しようとしている生徒がいたら、もっとはっきりとみんなに聞こえるように説明させた方がよい。

・もっと早くグループにして、教師の全体に対する説明を少なくしてもよいのでは。

・黒板は、基本通り左上から書いてまとめる方がよい。

・四面体ＡＢＣＤの頂点Ａから△ＢＣＤに垂線ＡＨを下ろしたとき、△ＡＢＨ≡△ＡＣＨ≡△ＡＤＨより、ＢＨ＝ＣＨ＝ＤＨがいえて、点Ｈが△ＢＣＤの外心と考えていくのが定石。今回は、各面が正三角形であるから外心と重心が一致するが、まずは外心を用いた方法を押さえてから、正四面体に限ってはということで重心等を使う考え方に触れた方がいい。
・「四面体の高さを求める」という内容は外せず、順番をしっかり踏んで授業をしなければならない。
・Ｈの位置、ＡＨの求め方が重要になるので、四面体の体積の求め方が重要になる。
・４つの三角すいに分解することを、中心を示してもう少し生徒に考えさせたい。
・外心（重心）の確認をもう少ししっかりと復習したい。
・体積Ｖを求めるために「どのような順序で」という点を全体でしっかり共有したい。
・黒板の正四面体の図に球の中心や半径がなかったため、生徒は視覚的に何をしているのか分からない状態になってしまった。
・6 人のグループがあったが、話し合いがしにくい。3 人、3 人に分けた方が話しやすい。
・各グループに回ってしていた助言やヒントが、きちんと黒板にまとめられるとさらに生徒の思考が進んだのではないかと思う。

理科　「物理」　学習指導案

日　時　令和元年１１月１日（金）
　　５校時
場　所　物理実験室
対　象　２年２組（普通科理型）
教科書　改訂版「物理」　（数研出版）
授業者　佐々木重宏

１．単元

第１編　力と運動　第４章－４　万有引力

２．単元の目標

① 天動説から地動説へと支持が変わっていく背景と，それに関わる人物や法則などを説明する。
② 惑星の軌道を円運動と近似したとき，これまでに学習した円運動の運動方程式にケプラーの法則を用いることで万有引力の法則が導かれることを理解させる。
③ 地球の重力は万有引力と遠心力の合力であるが，遠心力の大きさは小さく影響しないことを説明する。
④ 人工衛星（惑星）は万有引力の法則やケプラーの法則にしたがっていることを示し，これらの運動について速さや周期などが求められることを理解させる。

３．生徒の実態

男子２２名　女子１６名のクラスである。全員が物理を選択しており理数科目の学習に意欲的である。控えめな生徒も一部いるが，クラス全体としては授業中に互いに相談したり，教えたりしながら学習テーマを理解しようと努めている姿が見られる。

４．単元の指導目標

天動説と地動説の説明。および，ケプラーの法則と万有引力の法則の基本的な使い方について（１時間）
万有引力と重力に関する説明。および，第一宇宙速度と第二宇宙速度の導き方について（１時間）　●本時
エネルギー人工衛星の速さや周期の求め方について（２時間）

５．単元の評価規準

A　関心・意欲・態度	B　思考・判断・表現	C　観察・実験の技能	D　知識・理解
惑星の運動の様子や人工衛星，ロケットの打ち上げや航行などに興味関心がある。	ケプラーの法則を理解し，万有引力の法則を導く過程を説明できる。また，重力と万有引力の違いについて説明できる。 第一，第二宇宙速度について説明ができる。	書籍やインターネットなどで関心のある情報を得ることができる。	第一、および第二宇宙速度を求めることができる。人工衛星の運動において速さや周期を求めることができる。

６．本時の学習

（１）学習目標　　第一宇宙速度と第二宇宙速度を導くことができる。

学習テーマ　『ロケットが宇宙へ行くための条件とは？』

（２）指導計画

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	・前時の復習 起立してケプラーの法則を説明する 『ロケットが宇宙へ行くための条件とは？』	・学習テーマについて質問し何人かにあてる。 ・打ち上げ時の速度を大きくする必要がある，という発言を引き出す。	これからの説明を聞く準備ができている（A）
展開 （前半） ２５分	・スライドの説明を聞く ・プリントの問題を解いて地球の質量を求める 問題１～３	メモを取っている生徒がスライドの進行から遅れないように注意する。 問題１に時間をかけすぎない。 問題３で地球の自転の向きを確認する。	時間内に答えを導けるよう計算に取り組んでいる（A）
（後半） ２０分	・スライドの説明を聞く ・例題１９を解く	説明をしっかりと聞くよう作業が終わっていることを確認する。 第二宇宙速度の意味と，考え方を簡潔に説明する。	式の根拠を理解しようとしている（D） イメージや考え方を説明しようとしている（A・B）
まとめ ５分	・プリント裏面の図（ロケット）について触れる	時間がなければ問題４の解説は次回へ持ちこす。	

理科研究協議会の記録

【研究授業】

日　時　令和１年 11 月１日（金）13:30～14:25

対　象　22HR

授業者　佐々木　重宏

分　野　「第１編　力と運動　第４章－４　万有引力」

【研究協議会】

日　時　令和１年 11 月１日（金）14:35～15:00

参加者　鎌田孝司、岡本由佳子、小野寺庸、釜田博一、後藤直地、佐々木重宏（授業者）
高橋里実、加藤華世、渡辺千春、松原啓（仙台三校）

【授業者から】

・万有引力の分野はスケールが大きく、宇宙やロケットなどに興味をもつ生徒が多いが、円運動やエネルギー保存との関連がしっくりこなくて躓く生徒が少なくない。
・今日はいつもの授業と同じ形態で研究授業をした。
・反応のよいクラスだが、序盤に狙い通りの反応が返ってきたので本題の時間を確保できた。
・計算自体はそれほど難しくないが、なぜその式が成り立つのかを自分の言葉で説明させることで、疑問点や曖昧な点に気づきイメージを構築していく時間を多くとりたかった。

【質疑応答・感想など】

・前任校のときから、このような授業をしているのを何度か見てきたが本校の生徒に合わせた形で再構築されていると感じた。テンポがよい中でも重要事項が最初にしっかりと確認されていた
・最初に起立して話し合いをするのはいつも取り入れているのか？
→スクリーンやプリントの準備をして待たせてしまう時間があるので、その時間を利用してよく取り入れている。テレビ番組でも前回のおさらいが冒頭にあるので、授業に入るための最低限の知識や前時の内容を話すことで思い出せる部分が多い。英語のペアワークを参考したが、最初に声を出すことで授業中も話しやすい雰囲気になるような感じがする。

・グループで他のメンバーに説明し合う場面があった。
・生徒が積極的に話し合っており、普段からこのように授業をしているのだと感じた。
・物理法則を用いて、楽しく現象を考える時間になっていた。

→先にできた生徒が周りに教えるように勧めている。他の班に聞きにいったりする生徒も出てきた。周りと上手く関われない生徒も少なからずいるが、今日は周りの生徒がフォローしてくれたので助けられた。

・スライドと板書を併用していて効果的だった。
・高校の内容からは発展的になるが、保存力とエネルギーの関係は説明しておいても良いと思う。その方が、すっきりと考えられる生徒がいるし、他の単元でも同じ説明ができる。
→ぜひ、今後は取り入れていきたい。

・終わりの挨拶はやらないのか。
→始業のときは、休み時間との切り替えの意味でも挨拶をしているが、最後は問題を解き終わるペースが違うので、終わるタイミングを区切らないようにしている。

・普段気をつけていることはあるか。
→説明しなければならない分野はしっかり説明するが、スライドの時間を簡潔にして考える時間を多くとるようにしている。途中で補足を入れると、話し合いが中断してしまうので、演習の時間はできるだけ待つように意識している。

英語科「コミュニケーション英語Ⅱ」　学習指導案

実施日時：令和元年１０月３０日（水）５校時
場　　所：秋田県立横手高等学校２年１組教室
対　　象：２年１組
授 業 者：大塚 のぞみ、Brent Yelle
教 科 書：LANDMARK Communication English Ⅱ

１．単元名　Lesson 6　Gaudi and His Messenger

２．単元の目標

（１）サグラダ・ファミリアに込められたガウディの自然観を読み取る。

（２）ガウディと外尾に共通する、理想の姿を追求し続ける生き方について読み取りながら、人間と自然との在り方や自分の生き方について考える。

（３）関係副詞の非制限用法、if 節を用いない仮定法について理解し、運用できる。

３．単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

・説明文や物語文を読み進め、主題や主張を意識しながら概要を理解できる。（２年生後期：読むこと）

・理解した英文の内容について質疑応答ができる。（２年生後期：話すこと・やり取り）

・自分の将来の職業や学びたいことを即興で英語で話すことができる。（２年生後期：話すこと）

４．単元観

スペイン出身の建築家であるアントニオ・ガウディと、ガウディの遺作であり今なお建築が続いているサグラダ・ファミリア（聖家族教会）の主任彫刻家である外尾悦郎について書かれた文章を読み、ガウディの作品に込められた自然観や、その自然観は日本人の自然観とも相通じるものがあることを生徒に気付かせ、人間と自然との在り方について考えさせたい。また、妥協を許さず自分の理想を追求していくガウディと外尾の生き方から、生徒自身のこれからの生き方についても考えさせたい。

５．生徒観

男子２５名、女１０名、合計３５名の理数科クラスである。進路志望は医学、理学、工学など様々ではあるが、どの生徒も誠実にそして一生懸命学習に励んでいる。授業中はやや大人しい印象ではあるが、休み時間等には活発に学習内容について議論する姿も多く見られるようになってきた。

６．単元計画

１時間目：単元の内容に関しての調べ学習
２時間目：調べたことについての発表　**[本時 2/8]**
３時間目：Part 1
４時間目：Part 2
５時間目：Part 3
６時間目：Part 4
７時間目：Comprehension, Vocabulary &Expressions, grammar
８時間目：Communication Activity

７．単元の評価規準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
・ガウディのデザインした様々な建築物について情報を集め、その特徴などについてお互いに伝え合うことができる。	・ガウディのデザインした建築物のそれぞれの特徴を理解し、ガウディがそれらの建築物に込めた思いなどについて自分の考えを述べることができる。	・ガウディとサグラダ・ファミリアの歴史を理解する。 ・外尾が専任彫刻家になるまでの経緯を理解する。	・関係副詞の非制限用法、if 節を用いない仮定法について理解し、運用できる。 ・ガウディのデザインした建築物の文化的背景について理解を深める。

８．本時の学習

（１）目標

ガウディのデザインした様々な建築物について集めてきた情報をお互いに伝え合い、それらの特徴や文化的背景について理解を深めることができる。

（２）指導計画

過 程	学習活動	JTE	ALT	評価
導入 (5)	・教科書 P88 の写真について答える。	・教科書 P88 の写真について尋ねる。 ・本時の活動内容について説明する。	・発表の評価規準について改めて説明し、より良い発表となるようアドバイスをする。	
展開 (45)	・本時の目標を確認する。	・本時の目標を提示する。		
	本時の学習課題：Which building do you want to visit most?　Why?			
	・グループ毎に、英語で発表する準備をする。 ・ガウディの建築物について、それぞれグループで発表する。 ・机を通常の位置に戻す。 ・紹介された中で最も訪れてみたい建築物を決め、その理由を答える。	・グループに分かれて発表の準備をするよう指示する。 ・グループ発表の進行を行う。 ・発表をよく聞き、良かった点や気づいたことなどについて適宜メモを取るよう指示する。 ・机を通常の位置に戻すよう指示する。 ・紹介された中で、どの建築物を最も訪れてみたいかとその理由について生徒に尋ねる。	・それぞれのグループの発表について評価する。 ＜発表の評価規準＞ ①調査内容の深さ ②英文の正確さ ③聞こえやすさ・分かりやすさ ④面白く効果的な発表であるか	A D
まとめ (5)	・次時の課題を確認する。	・本時のポイントを振り返り、次時の課題を確認する。	・発表全体の感想と今後の課題について述べる。	
	次時の学習課題：What did Gaudi think was important when he designed his buildings?			

令和元年度　公開研究授業（英語科）

英語科　大塚　のぞみ

Ⅰ　日程

【研究授業】

日　　時：令和元年１０月３０日（水）５校時

実施クラス：２年１組（理数科　男子２５名、女子１０名　合計３５名）

場　　所：２年１組教室

単　元　名：Lesson 6　Gaudi and His Messenger

授　業　者：大塚のぞみ、ブレント・イェール

【授業研修会】

日時場所：令和元年１０月３０日（水）６校時　会議室

Ⅱ　授業研修会参加者

青山博輝指導主事、武田誠健、嶋田仁、山信田修、藤原誠、渡辺伸吾、沓澤信宏、
奥劦屋景子、大塚のぞみ（授業者）、ブレント・イェール（授業者）

Ⅲ　授業者より

＜大塚＞

・今回の授業は、新しいレッスンに入る前の導入の部分で、教科書の中で取り上げられているサグラダ・ファミリア以外のガウディのデザインした建造物について調べ、プレゼンテーションを行うという授業であった。２年１組は SSH の事業等でプレゼンテーションをする機会が多いので、より伝わるプレゼンテーションを行う練習にもなるよう、事前に評価の観点を生徒に提示し、その観点を踏まえた発表となるよう強く意識させ活動に臨ませた。

授業の感想としては、発表の内容が建物の説明ということで、発表者の話している内容が難しいものが多く、原稿を覚えて話すだけといった発表で終わってしまったグループも多かった。もっと発表を聞いて埋めていくワークシートなどを準備し、聞いている生徒が聞き取るべき内容を絞れるような、または、内容をより聞きやすくなるような工夫が必要であった。

＜ブレント＞

・生徒は全体としてよく頑張ったと思う。より伝わるための発表の仕方について、生徒たちに事前にもっと指示を与えればよかった。

Ⅳ　参観者からの感想など

・ポスターの作り方などの点において、生徒たちはプレゼンテーションを行うことに慣れていると感じた。発表の際も、聞いている人に質問をしたり、ドラマ仕立てにするなど聴衆を引き込もうとする工夫がみられた。

・ポスターセッションのような形での発表にすると、生徒同士が近くなり、もっとやりとりしやすく、かつ、もっと面白くなるのではないか。また、この活動は導入でも良いかもしれな

いが、レッスンの最後に行ってもいい活動だと思った。

・生徒が質問の答えを考えている最中に、「机を元の場所に戻してください」などの指示が混ざり、生徒が混乱している場面があった。生徒の様子をよく見て、適切な指示を出した方がよい。

Ⅴ　指導助言（青山博輝指導主事）

・どのグループも素晴らしいポスターであった。発表も楽しく、内容に引き込まれるものも多かった。生徒との教師の信頼関係が感じられる、良い雰囲気の授業であった。

・生徒がこの時間で何ができたかを実感させるためには、タイムマネジメントも大切な要素であるが、授業後半はそれができていなかった。その時間の着地点をどこに置くのか、そこから逆算してその授業を展開していってほしい。

・活動の評価基準は、教師と生徒とで同じである必要はない。今回は、発表の内容が難しかったため、評価シートはもっと発表の内容に重点を置いたもののほうが良かったのではないか。

・ポスターに印刷されている文字が小さかったので、沓澤先生が指摘したような形で発表したほうが、ポスターセッションは有効である。加えて、活動形式をグループにする必要があったか疑問が残る。

・総じて、生徒のレベルの高さと可能性を感じた授業であった。これからも生徒の力を伸ばしていくために、ますますの授業改善に期待する。

保健体育科（体育）学習指導案

日　　時　　令和元年１１月１日（金）５校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　武道場
対象生徒　　２年４・５組（普通科・男子１5名）
使用教材　　教科書名　最新高等保健体育（大修館書店）
指 導 者　　高久　育宏

1　単元名

武道（剣道）

2　単元の目標

①武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができる。　(興味・関心・態度)

②相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技を用いて、相手の構えを崩し、素早くしかけたり応じたりするなどの攻防を展開できる。　（運動の技能）

③伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古、体力の高め方、課題解決の方法、試合の仕方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できる。（知識・思考・判断）

3　生徒の実態

大人しい生徒が多く、運動能力の低い生徒もいるが、剣道に興味関心を持って意欲的に取り組んでいる。剣道具の着装に時間を要したり、技術面でやや劣る生徒もいるが、互いに助け合ったり、教え合ったりすることができる。

4　単元の指導計画

構え、足さばき、素振り（上下、正面、左右面、跳躍）　（３時間）
剣道具の着装・結束　（２時間）
面打ち、小手打ち、胴打ち　（２時間）　※本時　２／２
引き技　（１時間）
ルール、互角稽古、試合　（２時間）

5　単元の評価規準

項目	ア. 関心・意欲・態度	イ. 思考・判断	ウ. 運動の技能	エ. 知識・理解
内容	・武道の学習に主体的に取り組もうとしている。 ・役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている。	・これまでの学習を踏まえて、自己や仲間の課題を設定している。	・相手の構えを崩し、素早くしかけたり応じたりするなどの攻防を展開するための相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技ができる。	・技の名称や見取り稽古の仕方について、学習した具体例を挙げている。

6　本時の目標

有効打突の条件を満たす、面打ち・小手打ち・胴打ちができる。

7　本時の指導に当たって

一本になる打ちにするためには何が大切かを考え理解させて、グループで面打ち・小手打ち・胴打ちを行わせ、お互いに教え合うことにより課題の解決を図る。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １０分	1　集合、整列、挨拶、 出欠確認、健康確認 2　本時の学習課題の確認 学習課題:「一本」になる打ちとは？ 3　準備運動 4　素振り （１）上下素振り （２）正面素振り	・座礼で元気よく行わせる。 ・健康観察をする。 ・肩の可動を意識させ、大きく行わせる。 ・大きな声で元気よく行わせる。	
展開 ４０分	具体的な発問:「一本」になる打ちにするために大切なことは？ 5　有効打突 ４人グループで「一本」になる打ちについて考える 6　剣道具の着装 7　打突（４人グループ） （１）正面打ち （２）小手打ち （３）胴打ち 8　剣道具の結束	・各グループに考えたことを発表させる。 ・剣道具を正しく着装させる。 ・「一本」になる打ち（有効打突の条件）を意識させて行わせる。 ・グループ内で「一本」になる打ちになっているかをお互いに見合って確認させながら行わせる。	・有効打突の条件を満たした打ちになっているか。（観察）
本時の振り返り ５分	9　本時のまとめ 感想と課題を発表する 10　挨拶	・数名の生徒に発表させ、自己評価させる。 ・座礼で元気よく行わせる。	

保健体育科（科目名　体育）学習指導案

日　　時　　令和元年１１月１日（金）５校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　柔道場
対象生徒　　２年４組・５組（普通科・男子１９名）
使用教材　　教科書名 最新高等保健体育（大修館書店）
指 導 者　　齊藤孝弘

1　単元名　　武道（柔道）

2　単元の学習目標

①　武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができる。　（興味・関心・態度）

②　相手の多様な動きに応じた基本動作から、基本となる技、得意技や連絡技を用いて、素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防を展開することができる。　（運動の技能）

③　伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古、体力の高め方、課題解決の方法、試合の仕方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できる。　（知識・思考・判断）

3　生徒の実態

自己の特性に合わせた動き方の工夫や、身に付けた技能を応用することが苦手な生徒もいるが、全体的に技能の習得に意欲的に取り組む生徒が多いので、連絡技の習得を通じて、柔道の技能を高める運動の仕方を工夫できるようにさせたい。

4　単元の指導計画

基本動作　（１時間）
投げ技（内股、跳腰、送足払）　（3時間）
固め技の連絡　（2時間）
技の連絡と変化（投技、固技、返し技）　（2時間）　※　本時　１／2
ルールと試合方法　（2時間）

5　単元の評価規準

項目	ア. 意欲・関心・態度	イ. 思考・判断	ウ. 運動の技能	エ. 知識・理解
内容	・武道の学習に主体的に取り組もうとしている。 ・役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている。	・これまでの学習を踏まえて、自己や仲間の課題を設定している。	・相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技のいずれかができる。	・武道（柔道）の伝統的な考え方、課題解決の方法などについて、理解したことを書き出している。

6　本時の目標

相手の動きに応じた基本動作から、投げ技の連絡ができるようにする。

7　本時の指導に当たって

投げ技の構成に必要な崩しと体さばきを身につけさせ、合理的な投げ方ができるようにさせるとともに、相手の動きに応じた技を選択して連絡技を掛けるため、防御行動の場面を設定して、効果的な技の選択と練習方法ができるようにさせたい。

8　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １０分	1　整列、挨拶、出欠確認 2　本時の学習課題の確認 **学習課題：得点につながる連絡技の構成は** 3　準備運動 固め技の自由練習（乱取）	健康状態を観察する。	
展開Ⅰ １５分	5　二人組で基本となる技の打込みと投込みを行う。 （１）大内刈 （２）内股 （３）体落	・技に合わせた、崩しの方向と体さばきを意識させる。 左後崩し、右前さばき 右前崩し、右前回りさばき 前方崩し、右前回りさばき	
展開Ⅱ ２５分	6　技の連絡 （１）内股から体落の説明をする。 （２）内股から大内刈の説明をする。 **具体的な発問：連絡する技を選択する要素は** （３）3人組で連絡技の組合せを考える。	・継ぎ足で技を切替させる。 ・受けが頭を打たないように引き手を引かせる。 ・崩しの方向を意識させ、技を選択できるようにさせる。 ・連絡技の組合せをグループ内で共有させる。	・相手の動きに応じた投げ技の連絡ができている。（観察） ・見取り稽古から効果的な技の練習の仕方を理解している。（学習カード）
本時の振り返り ５分	6　学習カードに本時のまとめを記入する。	・学習のポイントをまとめ、授業に対する自己評価をさせる。	

令和元年度横手高校公開研究授業
研究協議会記録（保健体育科）

体育科主任　　高久　育宏

令元年１１月１日（金）に本校において保健体育科の公開研究授業が実施され、同日１６時から１６時５０分に研究協議会が開催された。報告は次の通りである。

Ⅰ　日　程

【研究授業】　　１１月１日（金）

１３：３０～１４：２５（５校時）　　於：武道場

・「武道」　高久　育宏（剣道）　　齊藤　孝弘（柔道）

対象　　２年４・５組（男子）

【研究協議会】　１１月１日（金）

１６：００～１６：５０

Ⅱ　授業者からの報告・反省

【　剣　道　】

剣道経験が授業以外にない生徒は、授業の中で一本（有効打突）になるための条件を理解し、基本打突の習得に取り組むことは容易でないが、剣道を学ぶにあたり一本を目指す事は大切である。少しでも一本について理解し、基本打突の練習ができるようにするためにグループで一本になる打ちについて考え、発表する場面を設定した。発表後に基本打突の練習を行わせ、お互いに見合って教え合いをした。授業の最後に「グループ活動により、自分の理解が深まったので良かった。これからも周りとの意見交換を行いたい」、「発声と打突のタイミングは合ったけれど踏込のタイミングが合わず、強い打ちにならなかった。次の授業では踏込のタイミングを合わせて強い打ちができるようにしたい」との発表もあり、本時の目標達成に向けて主体的に取り組んでいたと思う。

防具を付けるのに時間が掛かりすぎたということもあるが、基本打突の練習の時間を十分にとれなかったので、今後はもう少し時間に余裕を持って授業が展開できる内容にしたい。

【　柔　道　】

基本となる技の習得から、基本的な連絡技を例示することで、生徒自身で連絡技の構成を考えられるようにした。連絡技の構成に必要な要素はいくつかあるが、相手の防御動作や攻撃動作に応じた技の連絡を考えられるようにグループを回り指導した。学習ノートには、「相手の重心の移動を発見して、そこに次の技をかけることができれば投げることができる」という内容の記載が多かった。生徒がそれぞれの技の特性を踏まえて連絡技を完成させていたので、概ね本時のねらいは達成できたと考える。

毎時間、学習内容の要点をまとめられるように学習ノートに記入させているが、振り返りの場面で数人に発表させるなど、生徒間の知識の共有を図る機会を作ることが課題であると感じた。

Ⅲ　参観者からの感想

・前面のホワイトボードを活用し、いつでも授業中に生徒が常に見ながら活動できるように配慮されていた。（剣道・柔道）
・ホワイトボードに学習の見通しや本時のゴールの姿を具体的に生徒に示すことができれば、さらに主体的な学びにつながっていくと思う。（剣道・柔道）
・伝統的な行動の仕方や知識が身についていて、態度の指導、基本動作の指導を丁寧に行っていると感じられた。（剣道・柔道）
・役割や見る観点が明確で、互いにアドバイスや良い所を伝え合っていた。
・他者との対話が手がかりとなり、さらに自己の考えを広げたり深めたりする機会を意図的にもっと設定できるといいのではないか。（剣道・柔道）
・「１本」になる打ちにするために大切なことをグループで話し合っていた。（剣道）
・それぞれの技の特色を踏まえて、連絡技の組み合わせを自分たちで考えるという内容は、本校の生徒に非常に合っていて、考えを刺激する内容であったと思う。（柔道）
・生徒同士が話し合った内容を簡単にでも残して、確認しながら話し合いを進めていくことができる工夫があっても良いのではないか。（剣道・柔道）
・防具の付け方や手の付き方など、一人ひとりに丁寧に指導していて、安全面への配慮が感じられた。（剣道・柔道）

芸術科（美術Ⅰ）学習指導案

日　　時　　令和元年１０月３０日（水）５校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　美術室
対象生徒　　１年１組１４名（普通・理数科　男子９名、女子５名）
教 科 書　　美術１（光村図書）
指 導 者　　杉渕　拓夫

１．単元名　抽象版画挑戦　～「偶然」に対応する力を養う～

２．単元の目標

①「抽象」の意味を正確に捉え、自分の作品制作や様々な作品の鑑賞に活かせる目を養わせる。

②「偶然性」「遊び」「美の発見」をキーワードに木版画の技術・方法・知識の再確認と抽象画制作を実践させる。（偶然性、遊び：作業の中に不確定さを盛り込み、問題に対応・解決する力、美の発見：自分の意図しない作品に美を見出す力）

③木版画の４時間の作業を「起・承・転・結」で構成し、生徒に作業の変化を与え工程のメリハリと集中力を意識させる。また、「仕上げ」の時間を設け、他者に向けてどう提示すればよいかを意識させる。

３．生徒の実態　　学力の高い生徒が多く、興味関心を持って授業に臨み、意欲的に学習課題の習得を目指そうとする姿がよく見られる。だが、発展的、応用的な思考や判断にはいささか強化の必要性が感じられる。モノ作りは楽しみながら作業できる。

４．単元の指導計画

（起）	「抽象」の確認、テーマカラーの決定、イメージの視覚化	（１時間）本時
（承）	版木の制作、試し刷り	（１時間）
（転）	本刷り（２枚）	（１時間）
（結）	くじ引きで相手を決め作品贈与、貰った作品に自分の版を重ね刷り、構図の検討およびハガキ大に切り抜き	（１時間）
（仕上げ）	台紙を選び作品を張り付け、カード記入、観賞と評価	（１時間）

５．本時の目標

①「抽象」の言葉の意味を確認する。

②「偶然性」「遊び」にいかに対応し、自分の経験体験からイメージを膨らませ作品製作に活かせるか考えろ。

③選んだ色から連想されるもののイメージを抽象化し下描きを完成させる。

６．本時の評価基準

項目	ア．美術への関心・意欲・態度	イ．発想や構想の能力	ウ．創造的な技能
内容	美術の創造活動を楽しみながら、主体的に授業に臨み作業に取り組んでいる。	感性や想像力、過去の学習体験を働かせ、版画の下描きが完成できる。	自己の体験経験を活かしイメージを膨らませることができる。

７．本時の展開においてキャリア教育の視点から特に重要なこと

（課題対応能力）　与えられたテーマに対して自己の経験や体験、感性を働かせてアイデアを出し、適した形で作品制作に活かすことができる。

８．本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 １５分	○題材の説明 ○「抽象」の言葉の意味の確認 ○本時の作業の進行説明	・生徒の着眼を期待するためにも、様々な話題や説明を行う。 ・「抽象」の辞典での意味を生徒に発表させ理解できたか確認する。	しっかりした態度で説明を聞き作業の進行を理解することができる（ア：観察）
展開Ⅰ １０分	○テーマカラー選び ○モチーフの選択	・「見えないこと」に楽しさを感じさせる。 ・時間を計ってスピーディーに行うことを意識付ける。	時間内でより多くのモチーフを思いつくことができる（イ、ウ：観察）
展開Ⅱ ２５分	○イメージの視覚化	・感情や性格を表すとき色や形大きさなどで表現できることを思い起こさせる。 ・色と性格の関連づけが戦隊ヒーローに活かされていることを理解させ、題材に親しみを感じさせる。	時間を意識しながらも、色から思いついたモチーフを的確に抽象化し下描きの作成ができる （イ：観察）
本時の振り返り ５分	○まとめ ○次時の説明	次時の作業や自分の課題を把握させる	本時の作業内容を把握し、次時の課題を把握できる（ア：提出物）

令和元年度横手高校公開研究授業
研究協議会記録（芸術科）

記録者　杉渕　拓夫

Ⅰ　日　程

【研究授業】

日　　時：１０月３０日（水）１３：３０～１４：２５（５校時）
場　　所：秋田県立横手高等学校　美術室
対象生徒：１年１組（美術選択１４名）
科 目 名：美術Ⅰ
単 元 名：抽象版画挑戦　～「偶然」に対応する力を養う～
授 業 者：杉渕　拓夫

【研究協議会】

日　　時：１０月３０日（水）１６：００～１６：３０

Ⅱ　研究協議会参加者

高橋直樹、今野栄一、能美政通、古谷祥多、柴田ひろみ、加藤華世、杉渕拓夫（授業者）

Ⅲ　授業者からの報告

・限られた時間の中で思考を深めたり作業を完了させたりするため、生徒にとっては慌ただしい授業になる。生徒に時間を意識させ、また、気分や作業の切り替えをしてもらうためにテンポの良い進行を心がけた。
・毎年少しずつ改良を加えながら実施し始めて６年目になる。今年度はあまり大きな改良はないが、授業の全ての展開を板書しておき、所々を空欄にして生徒に考えさせながら授業を進める工夫をした。ゲーム的な感覚を持つことで生徒に先の見えないことへの楽しみを感じてもらおうとしたが、生徒は積極的に捉えてくれて良かった。

Ⅳ　参加者からの感想

○学習課題の提示・確認

・しっかり提示され、先々まで見通したものだったので、生徒もこれからの授業展開や自分たちの取り組みが明確になっていた。
・単元全体の展開まで提示され、生徒もこれからの活動の見通しを持って毎時間の授業に臨むことができる。

○思考判断

・抽象について深く考えさせられる問いがなされていたが、答えをすぐに言うのではなく、生徒に考えさせてみる授業展開もありだと思う。

・抽象といってもなかなかイメージしづらいところもありそうだが、「言葉で書く」や「色から」など、多くのヒントをもとに膨らませるというのが面白いと思った。

〇言語活動

・色のイメージをことばで表現させる活動がおもしろかった。

・ペアワークをはじめ、さまざま工夫がされていました。

〇板書の工夫

・必要なことのみ板書で分かりやすかった。

・授業開始前に板書を終えており、タイムロスがなかった。

・色にも工夫があり、わかりやすく書かれていた。

〇その他

・美術の授業が、技術指導が主にならず、イメージ力の喚起を主になっており、素晴らしいと思った。

・作業させながらのプリキュアとゴレンジャーはもったいない。作業させないで話に集中させたら抽象の理解が深まるのではないか。

・本時の授業から５回つづきで行われる“抽象版画”というものが先生のオリジナルということで、そのような提案性のある授業をしたいと触発された。

・コーヒーの例がおもしろかったので、実際に淹れてもおもしろそうだと思った。ぶどうの例をあそこまで説明するのであれば。作例的なものを見せてもよいような気がするが、そこは見せないようにしているのか。

・色をイメージさせるために提示した身近な事例が、先生の話術もあって、とてもおもしろかった。難しい学習課題だと思ったが、生徒が悩みながらも、楽しそうに取り組んでいた。

ＭＤＳ基礎　学習指導案

日　　時：令和元年10月31日(木)　１校時
実施場所：秋田県立横手高等学校　コンピュータ室
対象生徒：１年１組（34名）(男子18＋女子16)
指 導 者：今野栄一、鈴木　亘

１．単元名　　データの収集・分析

２．単元の目標　　自ら関心のあるテーマを選び、テーマに沿ったアンケート作成から統計的な分析を行い、科学的な思考力や判断力の基礎を養う。

３．生徒の実態　　素直で真面目に授業に取り組んでいる。また、グループワークにおいては協力して学ぶ姿勢が身に付いている。

４．単元の指導計画

班決め・テーマ決め（3h）
アンケート用紙の作成（5h）本時2/5
アンケートの依頼・集計作業準備（2h）
アンケートの集計・分析（3h）

５．本時の目標　　テーマに沿ったアンケートの質問項目を考え、仲間の意見を参考にしながら自分の考えを論理的に整理して相手に伝えることで、より良いアンケート用紙の完成を目指す。

６．本時の評価基準

項目	ア関心・意欲・態度	イ思考・判断・表現	ウ技能	エ知識・理解
内容	アンケート作成に深くかかわり、話し合いに積極的に参加している	テーマに従った仮説をたて、仮説を検証できるアンケートの作成ができる	情報機器を使って効率よくアンケート用紙を作成できる	仮説を実証できるアンケート項目を設定できる

７．本時の展開においてキャリア教育の視点から特に重要なこと

アンケート用紙の作成過程や質問項目の設定意図を話し合うことで自己表現力を育成し、他の人の意見を聞くことで新たな視点や考え方を学ぶ。

８．本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 5分	ＦＴＤＣの流れを確認し、現在行っている活動を確認する 本時の活動内容の確認	全体の流れを把握させながら計画的に作業させる	ＦＴＤＣの流れを把握している 【ア関心・意欲・態度】
展開 45分	アンケート項目の吟味	各項目が仮説のどの部分に関連しているのか考えさせる	適切なアンケート項目を設定できる 【イ思考・判断・表現】
	学習課題：なぜこのアンケート項目を設定するのか?		
	アンケート項目の修正	他人の意見を認めつつ前向きな意見が出せる雰囲気をつくる	積極的に自分の考えを発言している 【ア関心・意欲・態度】 建設的な発言ができた 【エ知識・理解】 【ウ技能】
本時の 振り返り 5分	改善点の確認 本時の振り返りと次時の内容を確認する	仮説を検証できるアンケート項目になったか確認させる	アンケート用紙の改善に取り組んだ 【ア関心・意欲・態度】

年次研修

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

地歴公民科　　打矢　泰之

Ⅰ　校内研修

多岐にわたった校内研修であるが、授業改善に最も力を注いだ。地歴公民科主任からは、指導案の作成や授業研修に関し、年間を通してきめ細かいご指導をいただいた。特に、授業研修については、考えを深めさせる活動や、知的好奇心を刺激する発問をどのように工夫するかについて、実践例をもとに具体的なアドバイスをいただいた。授業アンケートで評価の低かった学習内容の振り返りについてはまだ徹底できていないため、来年度の課題としたい。

Ⅱ　校外研修

・１　共通研修【令和元年６月２５日（火)】【令和２年１月９日（木)】

中堅教諭として、担当ＨＲだけでなく、学年や学校、また若手教員への助言など、担わなければならない役割を改めて考えさせられた。自身の力量をさらに高める必要を感じた。

・２　教科指導等研修【令和元年８月２日（金)】【令和元年９月３日（火)】

秋田県立新屋高等学校において研究授業（９月３日）を行った。指導案は別ページに記載。

・３　生徒指導等研修【令和元年９月６日（金)】【令和元年１０月２１日（月)】

教育相談については、生徒の内面を引き出す声のかけ方、共感する姿勢など、面談にすぐ活用できるものが多かった。また、これまで曖昧な理解をしていたキャリア教育については、教科指導やＨＲ活動、部活動などを通して十分キャリア教育を実践できることが分かった。

Ⅲ　選択研修

詳細は別ページに記載。

Ⅳ　特定課題研究

詳細は別ページに記載。

Ⅴ　研修を終えて

１年間の研修を通して感じたことは、同期採用の先生方と自分の差が大きく広がっていたことである。センター研修におけるペアワークやグループ活動において、自分の視野の狭さや経験値の少なさに危機感を抱いた。学級経営や教科指導だけでなく、部活動の指導においても、従来の指導の在り方を継承しつつ、自分のビジョンをしっかり持ち、中堅教員として資質の向上に努めていきたい。

最後に、お忙しい中にもかかわらず、中堅教諭等資質向上研修にご尽力いただいた、すべての先生方に感謝申し上げたい。

地理歴史・公民科（日本史Ｂ）学習指導案

日　　時　　令和２年２月１７日（月）２校時
実施場所　　秋田県立横手高等学校　２年６組教室
対象生徒　　２年６組（普通科・男子１３＋女子１６＝計２９名）
使用教材　　詳説日本史Ｂ　（山川出版社）
指 導 者　　打矢　泰之

1　単元名

第６章　幕藩体制の確立

2　単元の目標

①織豊政権、幕藩体制の特質に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。
②信長、秀吉、家康の主要な政策の意図やその歴史的な意義を追究、考察している。
③織豊政権、幕藩体制の特質を追究するために必要な資料を収集・選択して活用できる。
④織豊政権、幕藩体制の特質についての基本的な事柄を理解し、その知識を身につけている。

3　生徒の実態

日本史に対する学習意欲が高く、ペアワークやグループワークなどの意見を交換する活動に対して積極的な態度で臨む傾向にある。全体的に教科書や図説を活用して歴史事象を考察することには慣れているが、史料の読解や史料を活用した歴史の考察を苦手とする生徒が多い。入試問題への挑戦を通して、与えられた課題に対して級友と協力して取り組む姿勢や、文字史料の背景にある歴史の本質を考察する力を生徒に育みたい。

4　単元の指導計画

織豊政権　　（５時間）　※　本時　５／５
桃山文化　　（１時間）
幕藩体制の確立　（８時間）
幕藩社会の構造　（５時間）

5　単元の評価規準

項目	ア．関心・意欲・態度	イ．思考・判断・表現	ウ．資料活用の技能	エ．知識・理解
内容	近世国家と社会や文化の特色に対する関心と課題意識を高めている。	近世国家の形成過程とその特色や社会の仕組みから課題を見いだし、ヨーロッパ世界との接触やアジア各国と関係づけて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を表現することができる。	近世国家と社会や文化の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択している。	近世国家の形成過程とその特色や社会の仕組みについての基本的な事柄を、ヨーロッパ世界との接触やアジアとの関係と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。

6　本時の目標

①　大学の入試問題を通して豊臣秀吉が目指した支配体制を考察することができる。
②　バテレン追放令の史料読解を通じて歴史の本質について考察することができる。

７　本時の指導に当たって

豊臣秀吉の検地や刀狩りなどの諸政策によって兵農分離が実現したため、のちの徳川氏による幕藩体制の土台は秀吉が形成したものといえる。このような歴史の本質を、東京大学の入試問題を通して生徒に捉えさせることが本時の試みである。歴史は暗記というイメージを覆し、良質な入試問題を解くことで歴史の本質を考える楽しさを生徒に伝えたい。

８　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 ５分	豊臣秀吉の行った政策について復習する。 **学習課題：豊臣秀吉はどのような支配体制を目指していたのか？** 本時の学習内容を確認する。	内政・外交でどのような政策を行ったのか確認させる。	
展開Ⅰ １５分	東京大学の問題文を読み、出題者の意図を理解する。 **具体的な発問①：史料から読み取れる一向一揆の特徴は何だろうか？** グループに分かれ、バテレン追放令の第6条から一向一揆の特徴を読み取り、ワークシートに記述する。 ３グループの解答を黒板に掲示して他のグループの解答と比較させ、理解を深める。	史料の読解に関する質問は各グループで1回だけ認める。他のグループへの質問は無制限に認める。	一向一揆が大名の支配に従わなかったことを読み取ることができている。 （観察・ワークシート）
展開Ⅱ １５分	**具体的な発問②：キリスト教の宣教師はどのような方針で布教を行ったのか？** グループに分かれ、バテレン追放令の第８条から宣教師の布教方針を読み取り、ワークシートに記述する。 ４グループの解答を黒板に掲示して他のグループの解答と比較させ、理解を深める。	史料の読解に関する質問は各グループで1回だけ認める。他のグループへの質問は無制限に認める。 大友宗麟の事例を紹介する。	宣教師が大名の支配力を利用して民衆への布教をはかったことを読み取ることができている。 （観察・ワークシート）
展開Ⅲ １５分	**具体的な発問③：秀吉が一向一揆やキリスト教徒を「天下の障り」と考えた理由は何か？** これまでの活動を踏まえ、豊臣秀吉が目指した支配体制について考察する。 グループの代表者の答えを黒板に掲示する。	５分間だけグループ内で話し合うことを認める。	一向宗やキリスト教徒が秀吉が目指した支配体制の障害となった理由について考察し、論述することができる。 （観察・ワークシート）
まとめ ５分	秀吉の目指した支配体制にとって、一向一揆やキリスト教が障害であったことを確認する。		

令和元年度中堅教諭等資質向上研修

選　択　研　修　計　画　書

研修教員名	打矢　泰之	所属校	秋田県立横手高等学校	連絡先	TEL: 0182-32-3020
		校長名	木村　利夫		FAX: 0182-32-3070

【社会体験研修先等について】

学びたいこと	地歴科の教員として地域の文化財にふれ、秋田県南における人間の営みの積み重ねについて見識を深める。また、作業等を通じ得た経験を授業や諸指導に活かせるよう、実質的な研修とすることをねらいとするものである。		
研　修　先	秋田県埋蔵文化財センター	所　在　地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331　FAX 0187-69-3330
依頼状(礼状)送付先	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20 秋田県埋蔵文化財センター 所長　谷地　薫		
研修担当者名	清水　達也	部・課名	副所長

研修の期日・内容

月日（曜）	研修時間	主　な　研　修　内　容
＜第１日＞ ７月２日 （火）	8:30～12:00 13:00～17:15	・埋蔵文化財センターの概要 ・現場実習　※払田柵 ・整理作業
＜第２日＞ ７月３日 （水）	8:30～12:00 13:00～17:15	・現場実習　※払田柵 ・整理作業
＜第３日＞ ７月４日 （木）	8:30～12:00 13:00～17:15	・現場実習　※払田柵 ・整理作業 ・埋蔵文化財センターでの研修を終えて

令和元年度中堅教諭等資質向上研修

選　択　研　修　報　告　書

所　属　校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教諭　　打矢　泰之
研　修　先	秋田県埋蔵文化財センター		
研 修 期 間	令和　元年　７月　２日（火）　～　令和　元年　７月　４日（木）		

１　研修の概要

７月２日（火）　８：３０～　９：３０　埋蔵文化財センターの活動説明（清水達也副所長）
　　９：３０～１０：００　払田柵跡調査概要の説明（吉川耕太郎副主幹）
　　１０：３０～１２：００　調査補助　基本土層の断面図作成（安田創文化財主事）
　　土師器の出土層の確認
　　１３：００～１７：１５　調査補助　基本土層の断面図作成（安田創文化財主事）
７月３日（水）　９：００～１２：００　調査補助　基本土層の断面図作成（安田創文化財主事）
　　整地層の下層の遺構確認
　　１３：００～１７：１５　調査補助　トレンチの掘り下げ　（吉川耕太郎副主幹）
　　柱穴プランの確認
７月４日（木）　９：００～１２：００　整理作業　出土土器の拓本づくり（吉川耕太郎副主幹）
　　１３：００～１５：００　整理作業　出土土器の拓本づくり（吉川耕太郎副主幹）
　　１５：００～１６：００　払田柵跡全体についての説明（吉川耕太郎副主幹）
　　１６：００～１７：１５　研修のまとめ（谷地薫所長）

２　研修の成果（今後への生かし方も含むこと）

研修先である秋田県埋蔵文化財センターは、自分の専門である日本史に深く関わる職場であるということ、そして自分が採用前に臨時職員として働いていた事務所でもあり、個人的に強い思い入れがあることから、埋蔵文化財センターを研修先として選択した。

初日の清水副所長による講義では、埋蔵文化財センターの活動全般について２点説明を受けた。１点目は、ベテラン職員が次々に定年を迎え、職員の年齢構成も若手が多くなりつつあること。経験豊かな職員が退職することで、専門的な知識や経験を次世代に継承できるかどうかが課題になっている。２点目は、学校への出前授業や、土器作りなどの体験活動に力を入れていることである。活用事業の参加者は増えつつあるが、高校との連携はまだ出来ていないという課題もある。

１点目について考えると、高校の教育現場では新採用の人数が極端に減ってきており、いずれ埋文センターと同じ問題に直面することが予想される。中堅教員として、若手教員に適切な助言や支援をするだけでなく、ベテラン教員からの経験を学び、知識やノウハウを継承していく必要性を感じた。

２点目については、日本史の授業における実物教材の積極的活用が挙げられる。授業と関連のある出土品を借りることで、生徒に興味・関心を持たせるきっかけができると考えている。

谷地所長・吉川副主幹からは埋文センターや払田柵跡の活動全般について説明を受けた。そのなかで最も心に残ったことは、「答えの分からない問題を考えさせることで、生徒の価値観を揺さぶる」、「歴史を学ぶことで論理的思考力を養う」という２点である。１点目については、日々の授業で分かりやすさを追求し、生徒に深く考えさせる場を与えていない自分の姿勢について再考を迫られた。そもそも考古学では分からないことが多いが、根拠を積み重ねてさまざまな可能性を探ることに学問の面白さがある。学問の原点を忘れ、答えに至る最短距離や分かりやすい説明にこだわっている自分の思考を反省する良い機会となった。２点目については、歴史の場合は人物の生き方やロマンに目を奪われがちな部分があるが、あくまでも地道な研究成果の積み重ねによって歴史は語られるものであることを再確認できた。知識量を増やすことが目的ではなく、歴史という材料を使って論理的思考力を養う、この点も授業作りに活用していきたい。

今回の研修は、いつの間にか教科指導という狭い領域で物事を考えていた自分の視野を広げる良い機会となった。生徒の価値観を揺さぶる問いを投げかけ、論理的思考力を養成できるような授業改善に取り組むとともに、中堅教員として研鑽を積んでいきたい。

令和元年度中堅教諭等資質向上研修

特　定　課　題　研　究　レ　ポ　ー　ト

所　属　校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教　諭　　打　矢　泰　之
研 究 内 容	Ａ：本県の教育課題に関する研究 Ｃ：生徒指導に関する研究 Ｅ：道徳教育に関する研究 Ｇ：総合的な学習の時間に関する研究 Ｉ：その他		Ｂ：マネジメントに関する研究 Ｄ：教科指導に関する研究 Ｆ：特別活動に関する研究 Ｈ：特別支援教育に関する研究
研究テーマ	アクティブラーニングを取り入れた授業改善		

１　研究の概要

（１）研究の動機

本年度、本校地歴公民科では、①「社会的事象を比較させ、因果関係を探り、相互作用を考察することにより、学びへの挑戦の意味を体得させる」②「社会変化に対応できる能力を育成し、良識ある公民としての資質を養う」をテーマに、「授業の充実、テスト作成の工夫」「評価方法・観察方法を試行錯誤する」「個人の成績の推移や、授業アンケート結果を科として分析する」という取り組みを通して、目標を達成しようと授業実践を行った。

ここでは、今後の自分自身の授業を実践する力の向上と、方向性を明確にしていくという目的で、年に２回の生徒に対する授業アンケートの結果をもとにして行った本年度の日本史Ａ（２年生文型）の授業での取り組みと成果、課題について研究した。

（２）研究方法

年に２回（７月、１１月）行うアンケートのそれぞれの項目について、Ａそう思う（４点）、Ｂだいたいそう思う（３点）、Ｃあまり思わない（２点）、Ｄそう思わない（１点）、で評価し、目標の達成に向けた授業方法の改善を行う。

２　第１回授業アンケート（７月実施）の結果の検証と今後の取り組み方について

質問項目	評価（平均値）
授業の目標や学習課題が明確に示されている。	3.8
生徒の思考を促し、深い学びにつながるような取り組み（グループ活動の導入や発問の工夫）が行われている。	3.8
一方的な授業ではなく、生徒の考えや発言を引き出し、受け止めてくれる。	3.9
授業内容に興味・関心がわき、主体的に参加できる授業である。	3.8
生徒の理解度を確認しながら、わかりやすく授業が進められている。	3.9
学習課題等を用いて、学習内容の振り返りが行われている。	3.7
授業内容が身に付き、学力が向上していると実感できる。	3.7

（１）検証結果

・振り返りはほとんど取り組んでいなかったため、数値そのものは3.7となっているが、低い評価をつける生徒がみられ、授業の最後に振り返りの時間を設定して欲しいという意見も多かった。進度をとりとめもなく進めるのではなく、今日の進むべき範囲を明確に決め、時間配分を意識して最後の振り返りの時間をとることで知識の定着につなげることが必要である。この時間のあるなしが、授業内容が身につき学力が向上していると実感できるという項目の評価にもつながってくると考える。

・生徒の思考を促し、深い学びにつながるような取り組み（グループ活動の導入や発問の工夫）についても、もっとグループ活動の機会を増やして欲しいという意見が多かった。ペアワークを何度か取り入れてみたが、授業のねらいに結びつかない活動になりがちであった。活動ありきではなく、ねらいの達成に結びつけることを意識し、アクティブラーニング等のグループ活動を取り入れるときとのメリハリをつけ、授業を実践することが必要だと感じた。
・教員の意欲を評価していると思われる項目があるので、そこは励みにしたい。
・（自由記述において）視覚教材の使用について評価する声が多かった。（写真の掲示・動画の視聴等）
（２）改善のための具体的取組
・「振り返りの時間」を意識して授業計画を構想し、実践する。
・進度と深度の両立を図り、定期的にアクティブラーニング等の授業を取り入れていく。

３　第２回授業アンケート（１１月実施）の結果の検証

質問項目	評価（平均値）
授業の目標や学習課題が明確に示されている。	3.7
生徒の思考を促し、深い学びにつながるような取り組み（グループ活動の導入や発問の工夫）が行われている。	3.8
一方的な授業ではなく、生徒の考えや発言を引き出し、受け止めてくれる。	3.9
授業内容に興味・関心がわき、主体的に参加できる授業である。	3.8
生徒の理解度を確認しながら、わかりやすく授業が進められている。	3.8
学習課題等を用いて、学習内容の振り返りが行われている。	3.6
授業内容が身に付き、学力が向上していると実感できる。	3.7

（１）検証結果
・学習内容の振り返りについての評価は若干下がった(－0.1)。授業の最後に振り返りの時間を設けられず、次回に振り返りを先送りしてしまう授業が多かったことが原因だと考えられる。振り返りについては、出来事の理由や因果関係をペアで相互に説明させる方式で行った。
・教師が基本事項を説明する部分ではスピードを上げ、生徒に考えさせる時間を多めに確保した結果、数値に変化はないものの、「考えが深まった」「戦争の実態について理解を深めることができた」など、好意的な記述が多くみられた。グループ活動の継続を求める意見も多かった。
・グループ活動を通して生徒の考えや感想などをまとめさせているが、他のグループの生徒の意見を知りたいという意見も多かった。
・授業内容が身につき、学力が向上していると実感できる、が変化がなかったということは、成績の推移と関係していると思われる。４月当初からの振り返り、知識の定着の必要性を感じた。

４　研究を終えて
　アンケートの結果より、今年度の授業での取り組みの反省を行うことができ、来年度以降の授業の改善点を明確にすることができた。生徒との人間関係がある程度うまく構築できていたので、全般的には高い評価を付けてもらっているが、生徒からの教員に対する配慮という部分はあると思っている。高い評価よりもむしろ低い評価を分析することで、授業改善につながると考える。
　今年度の課題は、「振り返りの時間の徹底」と「アクティブラーニングの導入」の２点が浮かび上がった。前者については、授業の導入で復習することで、授業に臨む生徒の意識付けや、生徒同士で定着度合いを確認させることを意識した。授業アンケートのコメントからは、受験科目ではない授業にも関わらず、２学期には多くの生徒が当事者意識を持って授業に参加していることが感じられた。
　後者のアクティブラーニングについては、必要とする生徒がいる一方で、グループ活動をリードする生徒に依存してしまう生徒もみられた。また、生徒それぞれの考えや感想を共有する場面がないと、その場の盛り上がりで終わってしまうことも多かった。進度と深度を両立しつつ、積極的に生徒に議論させたり、考えさせたりする授業を実践し、深い学びにつなげることが大切だと考える。

教職５年目研修講座受講報告

教諭　古谷　祥多

１．教職５年目研修講座の概要

これまで教職５年経験者研修として行われていたいわゆる「５年研」であるが、今年度は教職５年目研修講座として、研修対象が１年前倒しという形に変更となった。なお、本来教職５年経験者をとの合同で実施された。

研修はⅠ期とⅡ期の２回に分かれて実施された。主だった内容としては、Ⅰ期は「生徒の実態を踏まえた授業改善①」ということで、教科ごとに指定されたテーマに基づいて授業実践を行い、レポートを持ち寄り協議するというものであった。Ⅱ期では「生徒の実態を踏まえた授業改善②」として、Ⅰ期をふまえて授業改善を行い、それをプレゼンテーション形式で紹介するというものであった。

２．研修を通しての省察

年次研修を受けると、教員としての経験年数の近い教諭の実践に触れることができ、それは様々なアイデアを受け取ることのみならず、同年代の教員の実践に刺激を受けて、自分の授業改善に努めるモチベーションにも繋がるものである。今回は紙幅の関係で他校の先生方の取り組みは省いたが、今回の研修が自分に与えてくれたものは大きかった。

また、普段の授業を行う中で、生徒にとって関心が高まるものや、必要な能力を身につけさせられるものは常に考えていたとしても、それを立ち止まって振り返ったり考察したりする機会は、なかなか持つことができない。このような機会に、自分の授業実践をしっかりと見つめ直すことは、今後授業改善を行う上で、意義の大きいものであると、改めて感じた。

３．参考資料（Ⅰ期レポート、Ⅱ期学習指導案・プレゼンテーションスライド）

（１）Ⅰ期レポート

学校名	秋田県立横手高等学校	氏名	古谷　祥多	教科	国語

①　自校の生徒の実態

勤務校は進学を主とする学校であり、学習全般に対する興味関心は高いが、国語を好きな教科として挙げる生徒は、感覚としては年々減少傾向にある。実態を把握するため、執筆者は昨年度当初、国語総合現代文の授業を担当している１年生３クラス１１８名の生徒を対象（有効回答数１１６名、有効回答率９８．３％）として、国語についての関心・意欲・態度に関するアンケートを実施した。結果を見ると、国語が好きであると回答した生徒の割合は、およそ３割に止まった。一方で、国語を大事であると回答した生徒の割合は８割を超える。国語を大事だと思いつつも、好きだとは思えない、というのが勤務校の傾向であるといえよう。

ところで、同調査の項目として、小・中学校時の国語の授業についてはどうであったかというものを設けた。回答として小学校においては５割強の生徒が国語を好きであり、中学校においてもやや減少するが 45%程度の生徒は国語を好きだったと回答している。すなわち、発達段階や学習段階が上がるにつれて国語を好きだと思わない割合が増加しているということになる。自由記述項目においても、一定数の生徒が小学校や中学校で学習した具体的な教材名を挙げて、印象に残っている国語の授業について述べていた。

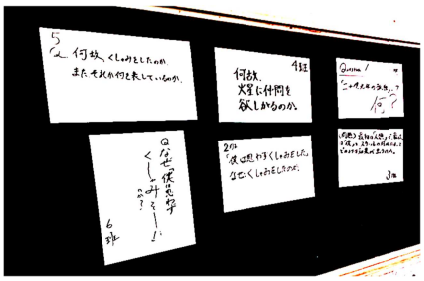
②　課題別テーマ　ウ

「問題解決のプロセスを重視した授業展開についての工夫と実践上の課題」

（１）学習課題を生徒自ら発見し、対話的活動によって読み深める手立ての工夫

問題解決のためにはまず問題発見を要すると考える。そこで、問題発見のための手立てと対話的活動を通したその深め方についての工夫について、以下に述べる。

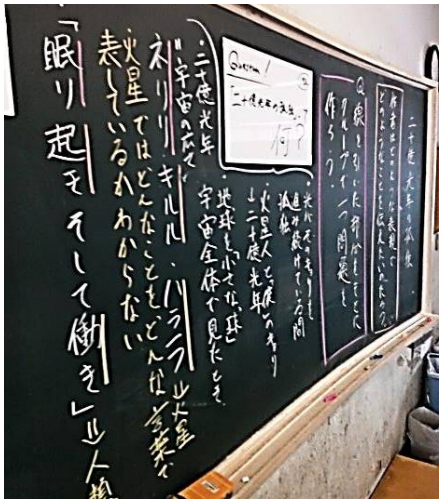
右に示した画像１は、詩「二十億光年の孤独（谷川俊太郎）」を扱った際に、班から出てきた疑問点である。このように、それぞれが疑問を持ち、それを課題として、解決に向けて対話的活動を行っていくという形で、様々な単元の授業を実践してきた。



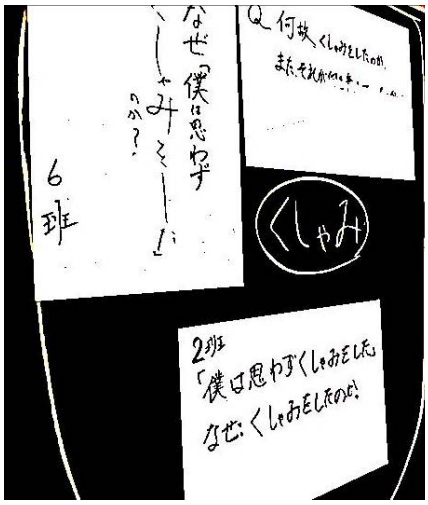
画像 １　班ごとのホワイトボード

手順として、画像１のホワイトボードは、先述の通り各班からの疑問点である。班で集約する前に、まずはそれぞれ個のレベルで疑問を持つことが肝要であるため、まずそれぞれが個人で、本文の疑問のある表現や、気になった表現に線を引き、その箇所が気になった理由等を、ワークシートに記述する。その後、それぞれの疑問点をグループで共有して、吟味する。最も考えが深まりそうなものを課題として決定し、班でホワイトボードに記入する。ホワイトボードを用いて各班から発表し黒板に掲示し、検討を交えながら疑問点についての読みや考えを深めていく（画像２）。

ホワイトボードを用いるのは、これを活用することによって、グループでまとめる作業が活発化することを狙ってのものである。ホワイトボードに書くという作業があると、生徒は話し合いに必然性を感じることができる。加えて、それを黒板に掲示することによって全体での考えの共有も行いやすくなり、同一内容を整理・分類したり、対立構造を示しやすくなったりするなどの効果もある（画像３）。



画像 2　全体での共有



画像 3　同一内容の整理

この手立ては、より適する単元や教材はあるものの、基本的にはどのような単元・教材であっても行うことができる工夫であり、生徒から出てきた疑問を基にした課題であるため、生徒に学習意欲が喚起されやすいという利点があるととらえている。

公開授業などに参加すると、小学校では話し合い活動が中学校、高校よりも活発に行われているという傾向を感じる。もし発達段階が上がるにつれて「国語離れ」が起きる原因の一端がそこにあるとすれば、グループや全体での対話的活動を増やすこの取り組みは生徒の関心・意欲・態度を高めることに繋がるのではないだろうか。

（2）実践上の課題

先述の通り、教員から提示される課題のみならず、自分たちで問題を発見することを重視し、発見した問題の解決に向け、本文を根拠に読み深めていくという過程を意識してこの形の実践を行っているが、これにおいて、以下の２点について課題を感じている。

１点目は、個々人が問題を発見する能力を伸ばし切れていない点である。

グループでの活動を通して、まず複数ある疑問点の中から自分たちが取り組む問題を選択するため、生徒は自分たちの問題を解決しようとする形にはなっているが、実際にはグループの中の誰かに依存する形でも授業は成り立ってしまい、個々人の疑問を持つ能力や感性を伸ばすものではないというのが、課題の１点目である。

２点目として、問題発見から解決のプロセスの中で、意欲を高める工夫としては効果があるとしても、能力を高める工夫という点から考えると不十分だということがある。問題を発見するその活動自体は工夫している点であるが、発見して解決に向かう中で、その流れを行ったからこそもう一段階深い読みにつなげることができたかという観点で考えると、不足していると考える。

しかしながら、この学習活動において深めるべき問いは、どちらかというと収束していく閉じた問いではなく、様々な答えが考えられる開いた問いであると考えている。その点から考えると、指導者が目指すべき水準を用意してそこまで引っ張り上げるという形が適切なものかどうかという点も、目下課題として考えているところである。

（3）現状の取り組み

課題の１点目を踏まえ、現状取り組んでいるのが、教科書教材のテクストと何らかの形で関連する別テクストを読ませることによって、その相違点を見つけ、そこから自分の疑問点につなげていくという手立てである。一つのテクストだけでは気付きにくいことも、比較する対象があるとその相違点が見えてくる。そこから、なぜこのような違いが生じるのか、という点について考えを深めることにより、個々人の問題発見の態度や能力は高まるのではないかと考えて実践している。

（２）Ⅱ期学習指導案

第２学年２組　国語科学習指導案

授業月日　７月１９日（金）２校時

テ　ー　マ;「生徒の思考を深める授業展開についての工夫と実践上の課題」
課　　題:「深い学び」、「積み重ね」を意識した読みの授業実践

１　単元名（題材名、主題名など）
「山月記」
２　本時の計画
（1）ねらい　「山月記」の内容理解をもとに「人虎伝」を読み、作者の翻案の意図をとらえることができる。
（2）展　開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	１．学習課題を把握する。	・本時の学習に関心を持つことができるよう、「人虎伝」が「山月記」の翻案小説であ	
	「山月記」と「人虎伝」はなぜ違うのか？		
展開	２．「人虎伝」を読む。	・相違点に気付くことができるよう、黙読しながら線を引くように助言する。	
	３．「山月記」との相違点について班で出し合う。	・班員の意見で気付かなかったところを確認できるよう「山月記」を参照するように助言する。	
	４．最も読みの深まりそうな相違点を班で選ぶ。	・散漫になるのを防ぎ、深く考えられるように多く出された違いの中でも、最も考えたいものを一つ選ぶよう指示する。	
	５．作者が改めた理由について、個人で考える。	・まずは個別の考えを醸成できるよう、個人での時間を確保する。	
まとめ	６．グループで共有し、まとめる。	・まとめの作業がスムーズに進行できるよう、各班にホワイトボードを配付する。	自分の考えを積極的に交流しようとしている。【関心・意欲・態度、行動観察】
	７．全体に発表して共有する。	・書かれたことを読むだけでなく、説明できるように、ホワイトボードには項目だけを書くように指示する。	
	８．作者が翻案によって描き出そうとしたものは何かについて、個でまとめる。	・最終的な学びが自分のものにできるよう、個人でまとめる時間を確保する。	文章の展開や構成を確かめ、書き手の意図をとらえることができる。【C読むこと（1）エ、ワークシート】
	９．自分のまとめを発表する。	・他の考えも聞くことができるよう、数人に発言してもらう。	

（３）Ⅱ期プレゼンテーションスライド

Ⅰ期から

・Ⅰ期……課題発見型の授業実践を提示

学習活動　自らの疑問を学習課題として詩の読解を行う

・Ⅰ期の検討で出された課題点

⇒課題を発見することが深い学びに繋がるのか？積み重ねの中に新たな深い問いが生まれるのでは？

「積み重ね」の重要性と難しさ

- 学習は積み重ねが重要
- 国語においても当然
- しかし国語（こと現代文）はそれを実感しにくい科目

⇒前の読みが次の読みに繋がるという実感を持たせたい……

「積み重ね」の手立ての例

- 古典・現代文【古典世界と現代の関連や差異】
- 評論・小説【具体の抽象化】【抽象の具体化】
- 評論・評論【文章構造の帰納的理解】【同テーマに対する別観点への気づき】【対比的理解】
- 小説・小説【「主題」の捉え】【作品の特徴の理解】

等

4

授業実践について

- 人虎伝との対比による山月記の再考（比較読み）

※人虎伝は「漢文名作選」の口語訳を使用

単元の流れ

１次　「山月記」の読解（５時間）

２次　「人虎伝」との比較（１時間）

5

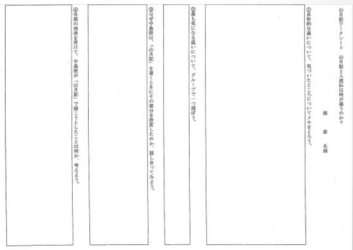
活動１：内容把握

- テクストを読む。
- その際、「山月記」との差異を感じる部分を見つけたら線を引くよう指示しておく。
- 特に気になった差異についてはワークシートにメモをとっておく。

6

ワークシート

①違いをメモ
②気になる違い（グループ）
③なぜ中島敦はその部分を改変した？
④中島敦が「山月記」で描こうとしたのは？

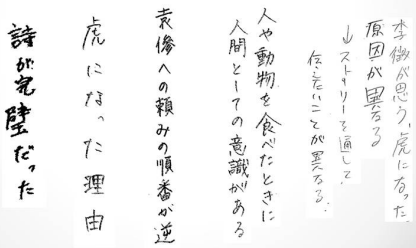


7

活動２：グループでの対話①

- 最も気になる（考えが深まりそうな）違いを、班で一つ選ぶ（問いの精選）

ＥＸ）



8

活動３：グループでの対話②

- 中島敦はなぜその箇所を改めたのかについて、それぞれの考える時間を取った上で意見を出す。

9

人虎伝のような虎になった理由が「殺人」とはっきり分かってしまえば、読者にとっては自分から遠い話、関係のない話と受け取られてしまう可能性がある。だが、虎になった理由を「怒らない」「あやまらない」「自尊心や羞恥心」とすれば、読者も、自分もその可能性がある、深く考えようという気持ちが起きる。

殺人でなく「自尊心と羞恥心」とすることで、物語を自分と結びつけて読むことができる。

・悪いことをすると天罰が下るということを伝えるストーリーではなく自分の自尊心や羞恥心などを他の人との交わりを絶つことは自分の才能を無駄にしてしまうものということを伝えようとしたから。

単なる因果応報で天罰が下るというストーリーではない。

・山月記 詩人とその誇り

・人虎伝

山月記が、より「詩人の物語」であることが掴めたのでは。

活動４：全体での共有

- ホワイトボードに深めたポイントだけ書いて、他班に説明する。

頼みごとの順番が妻子が先で詩が後になっている点。

うさぎではなく、人や大きい動物も食べていて、その時も人間としての意識がある。

・人虎伝は山月記よりも詩の評価が高い。

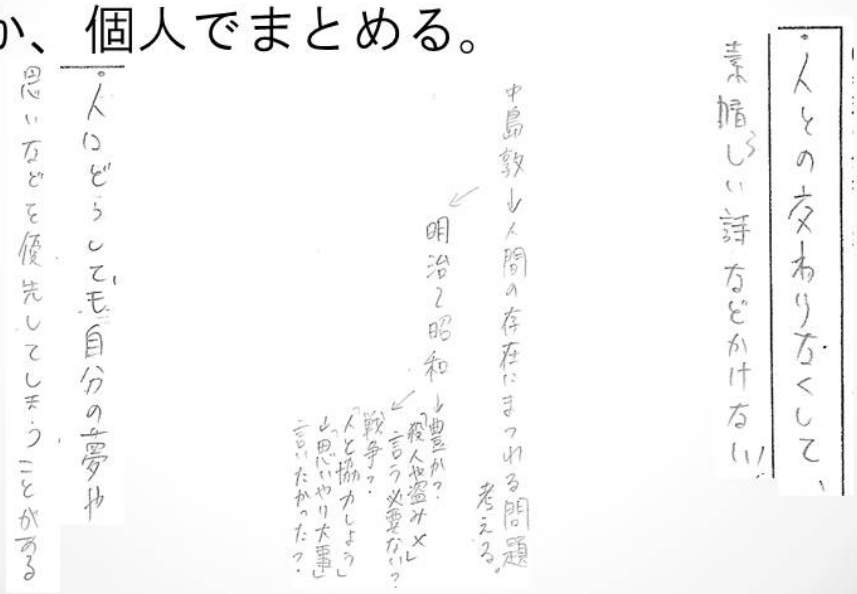
⑤ 殺人をしていた放火していた ← 虎になってしまった

詩が完璧

ストーリーを通して伝えたいことが違う。
山→人との交わりとがimportant
人→悪いことをすると天罰でるよ!

活動５：個でのまとめ

- 発表を受け、作者の描こうとしたものは何か、個人でまとめる。



●12

成果

- 「山月記」での読みが前提となって、次のテクストを読み込むという学習活動「積み重ね」を設定できた。
- 既習テクストを「活用」することについて、知的好奇心を刺激できているのではないか。
- 対比実験は行っていないが、「山月記」のみ読むよりも、「人虎伝」と併せて読むことで、その特徴が掴めているのではないか。
- 「作者の意図」は、作品をメタ的な視点で捉える必要がある。これを“点”で捉えるのは難しいが、元テクストの翻案の意図と考えると、“線”となり、その軌跡について考えは深まりやすいのではないか。

●13

反省

- 「積み重ね」を実感できるような工夫を加えたい。
- 根本的な問題に立ち返ると、何を以て「読みが深まった」「深い学びとなった」といえるかが難しい。評価をどうするか。
- 発展として別のテクストを扱い、その関連で読みを深めるということの中で、「自由な読み」と「恣意的な読み」の区別は難しい。どうしたらよいか。

●14

実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）を受講して

国語科　　成田　陽香

１　はじめに

「実践的指導力習得研修講座」は、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身につけることを目的として､高等学校の採用２年目の教諭を対象に実施された。なお、今年度より年次研修の対象が変更されたことにより、採用３年目の教諭と合同で行われた。

２　Ⅰ期（令和元年６月７日（金））

（１）日程

開会行事・オリエンテーション	１０：００～１０：１０
講義・演習（｢保護者対応と連携｣）	１０：１０～１１：４０
講義・演習（｢学校組織の一員としてー学校教育目標とホームルーム経営｣）	１２：４０～１４：１０
講義・演習（｢単元及び単位時間の授業構想と実践①｣）	１４：２０～１６：１５

（２）内容等

「保護者対応と連携」では、日頃から保護者と良い関係を築き、情報をこまめに交換することの大切さを改めて感じた。保護者からは、中学校に比べて担任との関わりが薄くなるという声があるという。また、成績について話すことを重視するあまり、生徒の生活面がよく分からないという不安もあるそうだ。さらに、生徒に伝えたことが確実に保護者に伝わるとは限らないため、重要なことは電話を使ったり、通知票に同封したりするべきであることも留意する必要があると思った。採用３年目の先生からは、１年間担任をした感想を教えていただいた。進路指導における文理選択、科目選択の難しさや、保護者との関わりが上手くいかなかった例などを聞き、担任となることの緊張感をもつことができた。

「学校組織の一員として」では､「ＳＷＯＴ分析」を用いて強みを活かしたホームルーム作りについて協議した。「ＳＷＯＴ分析」とは、Ｓ（強み)、Ｗ（弱み)、Ｏ（機会)、Ｔ（脅威）を分析し、それらを組み合わせて特色作りや問題解決のためのアイディアを出すという手法である。グループ内でも学校によって色々な視点があったが、情報機器を活用した情報提供や、地域も含めた学校行事づくりなどが提案された。

「単元及び単位時間の授業構想と実践①」では、新学習指導要領を確認しながら、これからの授業で大切なことを学んだ。新学習指導要領で「言葉による見方・考え方」「言葉の特徴」という語句が何度も出てくるように、言葉にこだわった授業作りが求められる。講義後、横手城南高校の先生とともに次の研修で行う模擬授業に向けて教材決めと指導案作りを行った。普段の授業では、目標や評価の見通しを持たず授業を始めたり、指導書に頼りすぎたりしてしまう部分がある。指導案を作りながら、初めに身につけさせたい力を明確にし、そのための過程と評価方法を考えるという基本的な流れを再確認できた。

３　Ⅱ期（令和元年９月３日（火））

（１）日程

オリエンテーション	１０：００～１０：２５
演習・協議（「単元及び単位時間の授業構想と実践②」）	１０：２５～１２：３０
演習・協議（「単元及び単位時間の授業構想と実践③」）	１３：３０～１６：００
研修の振り返り	１６：００～１６：１５

（２）内容等

他教科の先生を生徒役として、同一教科の先生とともに模擬授業を行い、協議をするという内容だった。

今回私たちは、古文「伊勢物語」の「芥川」を扱った。学習課題を「心情を表すための筆者の言葉の工夫を考える」とし、登場人物の心情が係り結びや和歌、情景描写にも表れていることを読み解く授業内容とした。協議と講評では図を用いて話を提示した点や、言語活動の場面を多く設けた点を評価してもらった。一方、図があることでイメージが固定されてしまう問題や、課題の示し方、評価の仕方、話し合いの手法が改善点としてあがった。今回ジグソー法を用いたが、指導主事からの「学ぶことを分担してはいけない」という指摘が大変印象的だった。話し合いの手法について、それを用いる理由を明確にしたうえで取り入れなくてはならないと感じた。また、他教科の先生から古典を学ぶ意義について質問があった。このことは普段生徒も同じ事を思っているはずだ。「受験科目だから」で終わらせないような、また、現代語を読むだけでは味わえない面白さを感じさせられるような授業作りをする必要を感じた。

他教科の先生の授業では大変刺激を受けた。ＩＣＴ機器を大いに活用して視覚的に印象づけたり、ワークシートやカードを用いて考える視点を明示したりしていた。学習内容にあわせて適切な教具を用いる大切さを感じた。授業での工夫はもちろん、理数科目で生徒役になったときに感じた「授業内容が難しくて理解できない」という悔しさや焦りも忘れてはいけないと思った。

４　おわりに

改めて今年度の研修資料や、昨年度の初任者研修の資料を読み返し、担任として１年間を終えたことで、実感を伴って理解できる部分が多くあることに気付いた。初めての経験ばかりで余裕がなく、反省や後悔する部分が多々あるため、今後の糧としたい。

授業に関しても、高校３年間の基礎を作る１年生の授業を持つ責任を感じることが多かった。覚えて欲しいことは多いが、何よりも文章を読み味わうことや、他者と考えを認め合うことの楽しさを味わって欲しいという気持ちで授業をしたいと思っていた。振り返ると、生徒の意見を取り入れながらうまくできたと感じる授業もあれば、知識の詰め込みに偏ってしまった授業もある。また、今年度は大館桂桜高校や秋田中央高校の授業を参観する機会があった。学校により、授業環境や生徒の様子が大きく変わることを改めて感じた。

昨年度に比べ、外部で研修を受けたり同期採用の先生と情報を交換したりする機会は減ってしまったが、校内・校外を問わず積極的に研修に参加し、優れた教員となるよう努めたい。

センターＢ講座

情報教育推進研修講座　報告

参加者　武塙章太

１．日　時　令和元年９月１８日(水)１０：００～１６：１５

２．場　所　秋田県総合教育センター

３．概　要

① ICTを活用した「授業づくり」と「情報モラル指導」の在り方（講義・演習）

総合教育センター指導主事　小林真人　氏

★ICTを活用した「授業づくり」

・なぜ授業でＩＣＴを活用するのか　→　活用しなければならない

今の生徒は、生まれたときから電化製品が身の回りにあるのが当たり前。

ＩＣＴを活用した授業後に行った客観テストの点数の方が、ＩＣＴを活用していない授業より高いことが実証されている。（H18年度）

・学習指導要領　高等部　「総則」

「情報科で共通必履修科目『情報Ｉ』を新設。全ての生徒がプログラミング、ネットワーク（情報セキュリティを含む）やデータベースの基礎等について学習」

・秋田県学校教育の指針

「情報教育重点事項」

２　学びの質を高めるためのＩＣＴ活用の推進

→ ２　わかる授業づくりや学力向上のためのＩＣＴ活用

・普段の授業を想像してみましょう

（例）板書について

① 教師が黒板に書いている間、生徒は何をしているだろう？

② 全員がしっかりノートに書き写しているだろうか？

③ 教師が黒板に書いてから生徒がノートに書き写すまで、何分かかるだろう？

↓

○プリントを配布

○電子黒板やプロジェクタで見せるのが効果的

→これがＩＣＴの活用

※効果

○生徒全員の顔を見て作業を確認できる。

○時間短縮　→　できた時間で他の活動！

言語活動の充実、アクティブ・ラーニング型の授業展開が可能

しかし、毎回では学力が下がる。

教師が板書して手本を見せることも必要。生徒に主体的に書き写させることも必要。

・教科の目標を達成するひとつの手段として、効果的にＩＣＴを活用してください。

★「情報モラル指導」の在り方

・スマートフォンの利用率（平成30年度）

小学生34.8%　　中学生62.6%　　高校生93.4%

・2016年、世界におけるインターネット利用者が、約３５億人。

・ネットトラブルの予防と対策

予防　トラブルを防ぐには、まずルール作り。

→　罰則もつくる。破ったらペナルティを与える。

・著作権について

著作権が自由に使える場合（文化庁Webより）

「教育を担任する者やその授業を受ける者は、授業の過程で使用するために著作物を複製することができる。」

（ただし、ドリル、ワークブックの複製や（～略～）など、著作権者に不当に経済的不利益を与えるおそれがある場合にはこの例外規定は適用されない。）

※つまり、学校などにおいて複製がＯＫな場合

① 教育を担当する者が

② 授業の過程で使用するために

③ 必要とされる限度において

④ 公表された著作物を

⑤　著作権者の利益を不当に侵さない

例　・市販の問題集をコピー、切り貼りして問題プリントを作る。→ダメ

※ただし、その問題集を生徒みんなが購入していればＯＫ。

（次は極端な例ですが）

・俳句を作る授業で、生徒が作った俳句をその生徒の許可なく紹介する。

→ダメ

※ただし、みんなの前で紹介することをその生徒から了解を取ればＯＫ

② 小・中・高等学校を通した「プログラミング的思考」の育成（講義・演習）

総合教育センター指導主事　矢吹敦　氏

「Scratch」を使って簡単なプログラムを作りました。フローチャートを作るような思考が必要であり、プログラミング的思考を身につけることができる教材だと感じました。

③ 公開講演

「学習の基盤となる資質・能力『情報活用能力』を育むための授業デザイン」

東北学院大学文学部教育学科　教授　稲垣忠　氏

カードを使って、実際に「情報活用型プロジェクト学習」のおおまかな授業計画を立ててみるということを体験しました。これは、生徒が主体的に情報を収集して課題に取り組むような授業を想定していて、これからの授業の参考になりました。

令和元年１１月１４日

仙台三高との交流事業における学校訪問及び授業実践

芳　賀　　崇

（１）授業実践の概要

１　期　　日　２０１９年１１月１３日（水）１校時８：４５～９：３５
２　会　　場　宮城県立仙台第三高等学校
３　ク ラ ス　１年８組４０名（男子２２名、女子１８名）
４　内　　容　数学Ⅰ（三角比）別紙参照
５　担　　当　柏　三恵　先生

（２）感想

授業の進度は本校とあまり変わりはなく、１年生は現在数学Ⅱの「式と証明」第１節の分数式とその計算あたりを学習中でした。１１月２１日から後期中間考査で、試験範囲は三角比がメインになるので授業では生徒たちにじっくり考えさせるような問題を、ということでした。担当の柏先生は三高に来てからグループ学習（６～７人）で授業を進められるようになったということでした。

以上のような情報から別紙の指導過程のように授業を組み立てました。

・導入は基本的な正弦定理の確認でした。

・展開の２°～４°は２°のみを扱い、数学Ⅱの加法定理を導いて簡単に紹介しました。

・展開の「ヘロンの公式の拡張」は高教研の発表と同じスタイルで進めました。

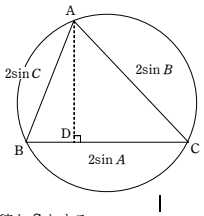
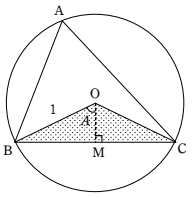
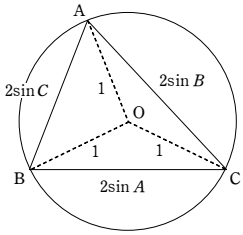
・エキスパートＡＢＣＤのそれぞれで集まって、資料を読み込んだり、類題を解いたりする活動は非常に活発に行われました。それぞれの内容は理解できたようでした。

・エキスパートＡＢＣＤの４人で集まって、それぞれの内容をつなげることで問題解決を行う段階になりました。エキスパートＡＢはうまくつながって、問題の半分くらいまでは解けていましたが、エキスパートＡＢとＣＤがうまくつながらず、各班には「ここでＣの出番だよ」とか「あとはＤの出番だよ」とかコミュニケーションが進むように仕掛けて回りましたが、残り５分のところで完答した班が出てきませんでした。エキスパートＣとＤのつながり部分まで板書して、模範解答を示し、どのような拡張だったかを振り返って終わりました。

・授業が終わると生徒が黒板前にどんどん集まってきてスマホで板書を撮影していきました。また５人ほど黒板の前で「ここまではわかっていたのに」「これに気付かなかった」など感想を述べ合っていました。少しは関心を持ってもらえたのかなと思えた瞬間でした。参観された先生方からは三高生には難しかったということでした。

・全クラスの天井にプロジェクタが設置されており、iPad も職員用に４０台あって、６年前より明らかにＩＣＴを利用している先生方が多かったです。今後この連携が生徒同士の交流につながればよいと感じました。

指導過程　<①関心・意欲・態度　②数学的な見方や考え方　③数学的な技能　④知識・理解>

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	本時の目標の確認 本時の目標：公式の数々を教科書にない方法で眺める	単位円に内接する三角形の辺の長さの求め方を１つ確認する。	三角比に興味・関心を持たせられるようにする。	
展開 ３５分	2°　右図を利用して、辺BCを２通りに表すことによって、等式を導いてみなさい。 ヒント　Oを念頭に置いて  3°　右図を利用して、網目部の面積を２通りに表すことによって、等式を導いてみなさい。 ヒント　Oを念頭に置いて  4°　下図で三角形ABCの面積を S とする。 このとき、S を表すいろいろな表現方法を考えなさい。  １つの長さや面積を異なる２つの方法で表してから比べてみることで等式を作る。 円（単位円とは限らない）に内接する四角形ABCDの４つの辺の長さを、$AB=a$, $BC=b$, $CA=c$, $DA=d$ とし、 $s=\frac{1}{2}(a+b+c+d)$ とおくとき、 $S=\sqrt{(s-a)(s-b)(s-c)(s-d)}$ を示せ。	自分でどの程度できるか考える。 エキスパート資料を配付し、資料の内容を理解する。 エキスパートＡＢＣＤでグループを構成し、問題に取り組む。 板書で解法を確認する。	できた班から板書させる。 加法定理や２倍角の公式、様々な等式を紹介する。 一般の角での証明にはなっていないことに触れる。 問題に行き詰まった班にはどの資料を使えばいいか助言する。 できた班に板書させる。	問題について、グループの中で自分の考えを説明できる。①
整理 １０分	振り返り	円に内接する四角形の面積、sin75°の値を求めて公式の有用性を確認する		過程を振り返って考察を深めたり、評価しようとしている。②

（4）本時の評価

評価項目	評価の観点［判断基準］		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる［A］	概ね満足できる［B］	
関心・意欲・態度	問題について、グループの中で自分の考えを説明でき、多様な考えに触れ問題に取り組むことができる。	問題について、グループの中で自分の考えを説明できる。	エキスパート資料を再度見せるなどして話し合いに参加できるようにする。
数学的な見方や考え方	過程を振り返って、公式への考察を深め、その有用性に気が付くことができる。	問題に公式を当てはめて問題を解くことができる。	他者の考え方に触れさせ、自分で考えるきっかけを作る。

令和元年度仙台三高との相互交流事業における授業実践報告

奥劦屋　景子

１．はじめに

１１月１２日（火）と１３日（水）仙台三高を訪問し、２年生に対し２回授業をさせていただいた。単発の授業実践ではなく、仙台三高の授業の一貫という位置づけであったため、事前に仙台三高の御担当の先生と連絡を取り合い、内容について決めた。

２．活動のねらい

教科書：Cambridge UNLOCK Reading &Writing Skills 3
単元　：Readin2 “Should we teach history ? “
普段の流れ：１時間目…単語確認、内容確認等／２時間目…内容確認、ディスカッション
２／２時間目を担当した。**”Should students be allowed to choose which subjects they study at school? “**というテーマで自分の考えを英語で伝え合い、他の生徒の考えを聞いて考えを広げ、深めた後、英語で自らの考えを書くという活動を考えた。私としては生徒の考えを広げ、深めさせるための工夫としてさまざまな意見を集約した後、新たな発問をし、生徒の考えにゆさぶりをかけることがねらいであった。

３．授業をやってみて

１回目は２年２組理数科で授業を行った。率直に言ってうまくいかなかった。授業をしていて苦しかった。理数科特有の雰囲気もあるようであるが、私自身緊張し、展開で１つ手順を飛ばしてしまったことが後々まで尾を引き、スムーズに授業が流れず時間切れになってしまった。この他、時間ばかり気にして生徒の意外なつまずきに気づいてその場でうまく対応できなかったこと、生徒の発信から話をひろげられなかったことなど、力量の無さを痛感した。１回目の授業の後、英語科の北村先生から情熱的に御助言をいただいた。生徒の思考にゆさぶりをかけるのがこの授業のポイントだよね、今回は惜しかったね。こうやったらうまくいくかも、こんなやり方もあるよと具体的なアドバイスをいただいた。また御担当の武田先生からは最後の Writing にじっくり取り組ませるため、割愛できるステップのアドバイスをいただいた。このほか生徒の考えをクラス全体で効率的に共有するための方法も御教示いただいた。これらの御助言をもとに、翌日授業を行った結果、授業は格段にスムーズに流れた。１回目よりも生徒とのやりとりも発生し、課題だった Writing にも十分に時間を取ることができた。

５．おわりに

授業実践を２回行うことで課題と成果を明確に感じることができた。２回目に１回目の課題を修正して臨み、こんなにも授業の流れがスムーズになるのかと御助言の的確さに感心した。自らをさらし、大いに恥をかいたがその分得たものは大きいと感じる。導入での生徒の発言の扱い方や、個々の生徒の意見を手軽に全体で共有する手法は今後の授業にも取り入れていきたい。

横手高校の生徒たちが良くも悪くもいかに真面目か、そしておとなしいか、率直な反応を見せる仙台三高で授業をしてみて感じた。本校の生徒の真面目さや優しさに甘えることなく、今回学んだことを普段の授業で生かし、横手高校生の長所を生かしつつも、生徒の主体性を育むべく少しでも自らの授業に磨きをかけていきたい。

授業案

１．目標

与えられたテーマについてメモを見ながら英語で考えを伝え合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

２．展開

過程	学習活動	指導上の留意点
導入	**Warm-up (7)** ・プリントを用いてペアで質問しあう。何人かの生徒に発表してもらう。 （好きな科目、重要な科目と理由）	・明るい雰囲気を作る。
展開	**Reading (10)** ・本文を読み、タスクを解く。(7) ・ペアや全体で答えを確認する。(3)	・各科目を学ぶ意義に気づかせる。
	Q. Should students be allowed to choose which subject they study at school?	
	Brainstorming(5) ・思いつく賛成、反対両方のアイデアを書き出し整理する。(Key words) ・暫定での自分の立場を決める。	・アイデア出しに苦慮している場合はペアワーク、補助教材等で援助する。
	Prepare for speech (2) ・キーワードでスピーチメモを作る。	
	Sharing with groups (20) ・４人グループで自分の考えを伝え合い、聞き手はメモを取る。(10) ・グループで意見をまとめ、理由のキーワード２つを紙に書き、黒板に貼る。(5) （何人かの生徒は自分の考えを全体に発表する。※時間があれば）	・貼られたアイデアを整理し、生徒の思考にゆさぶりをかける。
	Writing (5) ・最終的な自分の考えを、根拠を２つ以上あげて書く。	・意見が変わっても構わないと伝える。 評価：プリントを回収し評価する。
まとめ	・振り返りシートを記入する。(1)	・提出するように言う。

令和元年度仙台三高との相互交流事業
授業づくり研究センターの取り組みについて

奥劔屋　景子

１．プロジェクト立ち上げの経緯

・全県一区、男女共学化により、多様な生徒への対応が求められる。
　→　学校存続のため　→　授業改善（ワークショップの実施）へ

２．めざす授業の姿

生徒の力を引き出す授業の実践→潜在能力の掘り起こし

●知的好奇心へのゆさぶり
●問題を解決しようとする心の育成
●思考力、推理力の育成
●コミュニケ―ション力の育成
●発表力、表現力の育成
●仲間（協働）意識の高揚
●応用力の育成

３．授業における「三観点」ができるまで

ワークショップ『授業において見られる「三高生の長所・短所」を探ろう！』
ワークショップ『三高生の長所を生かす授業とは？』

●　この２回のワークショップにおいて、
　授業における三観点＝**「知的好奇心」「考える」「生徒主体」**と定まる

４．SSHー授業づくりプロジェクト（JD）研究センター

●平成２７年度設置・全職員が所属
　目的：授業づくりプロジェクトの運営・SSH との連携強化
　　※JD 研究センターは①SSH 事業部と②授業づくり事業部に分かれ相互に連携している。職員はそのどちらかに属することになる。

●毎年１２月頃、SSHー授業づくりプロジェクトフォーラムを開催。
　内容は、招聘講師による公開授業、英語による課題研究のポスター発表（理数科）、探究学習のポスター発表（普通科）、基調講演、１・２年生の全授業公開など
　今年は１２月１８日（水）に行われる。

５．これから

●「手法」「大がかりな探究活動」の間を埋める「日常の授業における AL」
　・対話や発問を軸にした双方型学習
　・ペア・グループなどの能動的アウトプット学習
　・デイベートやプレゼンなどの参加型学習
　・ジグソーなどの協働問題解決型学習
　→独自の理論化・体系化へ。AL は定義が曖昧で捉えられ方多様。
　　ならば学校の実情にあったものを AL と定義

仙台三高との交流事業における授業実践

佐々木重宏（横手高校）

日　時　令和元年１１月１３日（水）

場　所　宮城県仙台第三高校

対　象　２年生（理数科・２年１組）　教科書　改訂版「物理」（数研出版）

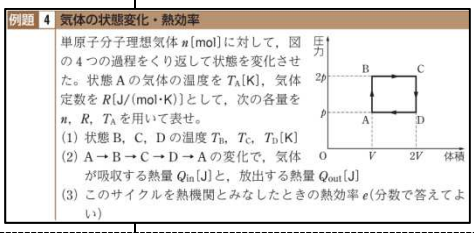
単　元　第２編　熱と気体　第１章－３　気体の状態変化

本時の学習

（１）学習目標　　p-V をもとに熱効率を求めることができる。

　　学習テーマ　『p-V の情報を読み取れる』

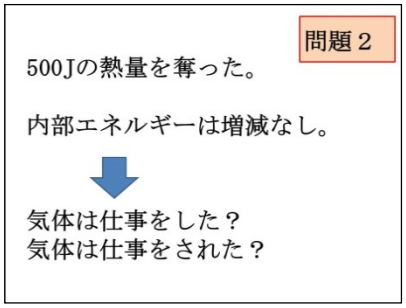
（２）指導計画

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 （3 分）	・自己紹介 本時の学習テーマ 『p-V の情報を読み取れる』	前任校では女子バレー部と昨年の夏休みに対戦しました。	
展開① （10 分）	スライドによる確認 ・等温線の書き方 ・熱力学第一法則 ・熱効率	復習する内容は重要であることを確認。 仕事とエネルギーの増減、およびその表現について確認。 説明を聞く姿勢ができていることを確認。	１０秒クイズを考えて答えようとしている（A）
展開② （10 分）	例題 4 の解説を聞く  例題 4　気体の状態変化・熱効率 単原子分子理想気体 n[mol] に対して，図の 4 つの過程をくり返して状態を変化させた。状態 A の気体の温度を T_A[K]，気体定数を R[J/(mol·K)] として，次の各量を n，R，T_A を用いて表せ。 (1) 状態 B，C，D の温度 T_B，T_C，T_D[K] (2) A → B → C → D → A の変化で，気体が吸収する熱量 Q_{in}[J] と，放出する熱量 Q_{out}[J] (3) このサイクルを熱機関とみなしたときの熱効率 e（分数で答えてよい） 	ボイル・シャルルの式の確認をする。 値の増減をチェックする。 （全体で共有）	値の増減を理解している （D）
展開③ （17 分）	類題 4 を自分たちで解く	グループ学習 （時間のイメージは 7+5+5） 表を書くことを強調する。	表をまとめ必要な値を求めることができる（D） イメージや考え方を共有しようとしている（A・B）
まとめ （10 分）	確認テスト（8 分＋2 分） 『p-V を制するものは気体を制する』	交換して相互採点	

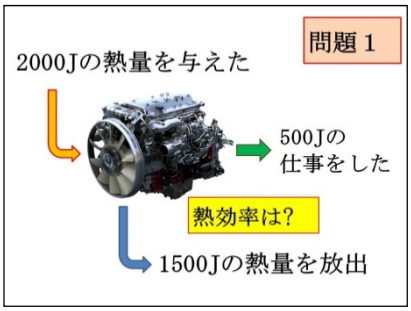
授業について

授業で使用するパワーポイントのファイルを事前に ipad にダウンロードしてもらい、それを借りて授業を行った（※１）。既習事項の確認のため、簡単な問題をクイズ形式で出題。スライドは本校の一年生の授業で使用したものと同じ。

前半）
熱力学第一
法則　編
３問



後半）
熱効率　編
３問



予想以上に反応が乏しい。後ろのグループでは考え方や、答えを確認して話し合っている様子が見られる。問題に答えてくれる生徒もそれなりにいるが、決して大きな声ではない。（※２）

クイズ問題に予想より時間を費やし、予定より１０分ほど遅れて例題４の解説に入る。類題４を各自で解かせてから、グループで考え方を確認させる予定であったが時間不足になってしまった。３割くらいの生徒は時間内に類題４まで解ききっていた。

授業後の反省会は時間が取れず、参観された物理の先生が感想を書いたメモをもってきてくれた。導入部分で生徒の興味を引きつけていたという評は以外であったが、講評や改善点などアドバイスをいただいた。

感想

水分補給は授業中も自由であり、休み時間は携帯の使用もさほど制限がないと思われる。初めて会う生徒たちなので、導入部分で簡単な問題でキャッチボールをしながら本題へ進む予定であったが、思うように勧めなかった。１コマの中で主となる問題が２つのイメージで授業プランを立てたが、楽にこなすだろうと想定していた導入の確認部分に時間がかかってしまったので、主となる問題が３つになってしまった。最後の解説では「そんな事もそういえばやったなぁ」という声が聞こえてきたので、授業の前段階でもう少し打ち合わせをしておくべきであったと反省している。

本校の生徒の素直さ、反応の良さに日頃かなり助けられているということを感じた。

（※１）教室の天井にプロジェクターが設置されており、職員がもっている（配られている）ipad と Wi-Fi で接続できる環境になっている（昨年度に宮城県内で最初に整備された）。Windows マシンで作成した資料を USB で Mac マシンに移行。それをクラウドで iPad に移行する。手間が多いため、自分の PC を教室に持って行く先生が多いのが現状。

（※２）普段授業を担当している先生の話では、「本校の中では活発なクラス。一部、授業中に寝てしまう生徒もいるが、教師の発言、発問に対して反応がよく、扱う内容にいい意味で疑問を抱いてくれる傾向がある。普段から机をくっつけて４～６人のグループになるようにしている。」とのこと。

仙台三高の SSH の取り組みについて（報告）

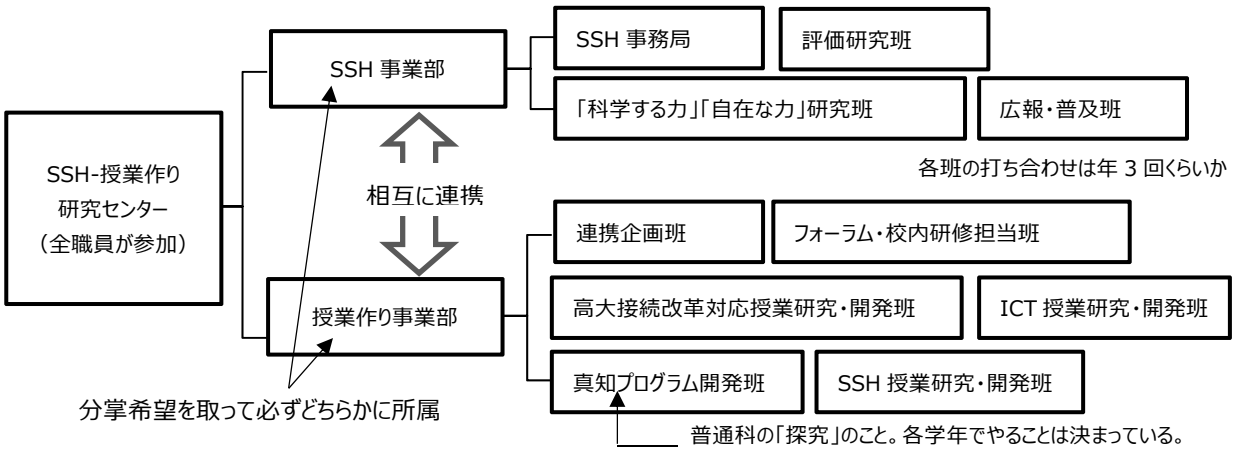
佐々木重宏

・期間

1 期 H22～H26　⇔　2 期 H29～

この 2 年間で目指す方向や取り組み方を模索した

・組織図（一部）



・教育課程表　（〇は単位数）

	１年	２年	３年
理数科	SS 課題研究基礎②	SS 課題研究Ⅰ① SS ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝｽｷﾙ①	SS 課題研究Ⅱ①
	※普通科文系と英語の単位数が同じ（理系より①多い）		
普通科	SS 探究基礎①	文系－SS 探究Ⅰ① 理系－SS 探究Ⅰ①	文系－SS 探究Ⅱ① 理系－SS 探究Ⅱ①
	※３年生の①コマは前半に厚く後半は実施しない		

１年…やっている内容は本校と大きな違いはなさそう。

２年…グループで活動する。テーマ設定と仮説に時間がかかるが、9 月には模造紙 1 枚のポスターを完成。　※１

指摘を受けた部分の手直し等を経て 11 月初めに校内 G（ｸﾞﾛｰｶﾙｻｲｴﾝｽ） S フェスタでポスター発表。（1 年生は GS フェスタを見学して先輩の研究を見る）

授業作りプロジェクトフォーラム（12 月）で学校を訪れる人たちにポスター発表 ※２

ポスター内容に対して口頭試問等を行い個々に成績をつける。

３年…『三高探究の日』（5 月下旬）で発表（これが一番大きなイベント）。　※注３

その後は個人でＡ４で１枚程度の論文にまとめる（同じ研究班でも視点が異なるので論文内容は多様）。夏休み前に論文を提出して終了。

※１　普通科は修学旅行で研究内容に関して企業や大学に訪問することも課せられており、夏休みはアポ取りを行う。2 年生があまりにも多忙だったため、1 年のうちにグループとテーマ設定を終えるように検討している。（文理選択が 1 年の夏休み前にほぼ確定するという宮城県の事情がある）。

※２　理数科はポスターの英語版も作成し修学旅行で台湾へ行く。他にも国内学会等で発表。

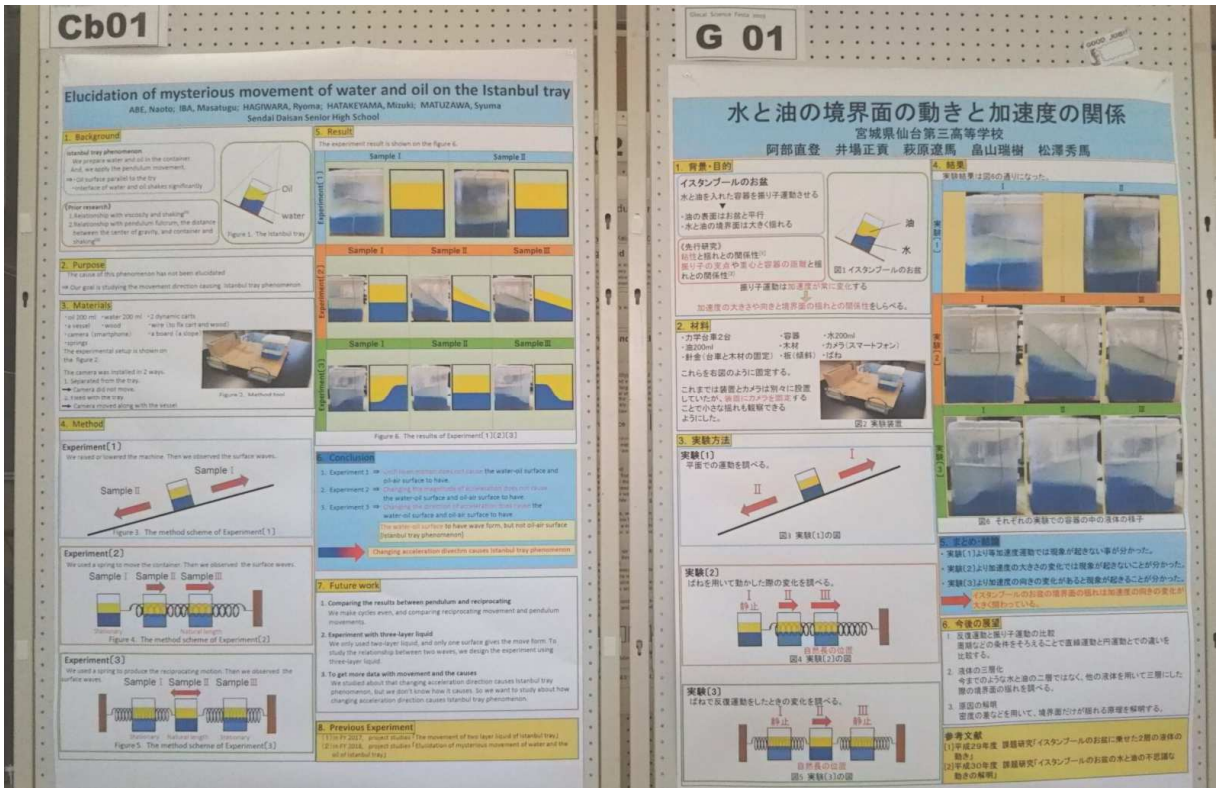
※３　ポスター発表をより完成させるのか、パワーポイントのスライドがいいのかは検討中。

・感想

東北大学の留学生による英語プレゼンのチェック、宮城大との『持続可能な開発目標（SDGs）』を取り入れた連携など環境に恵まれている部分は多い。活用は不十分とはいえ ICT 環境は整備されている。Zoom を使った Web 会議の可能性にも注目しているとのことで、これは本校でも活用できるかもしれない。

資料）　理数科の課題研究で作成していたポスター

日本語版と英語版では若干資料が異なるが、基本的には『背景と目的・材料・実験方法・結果・考察・今後の展望や課題・参考資料』の流れ



英語のプレゼンでは、ポスターに書かれている内容を英語で読み上げているものが多かった印象。とはいえ、英語での表現や専門用語などはかなり調べてまとめている。英語での質疑応答はさらに高いレベルが求められる。

令和元年度　宮城県仙台第三高等学校
SSH中間報告会・授業づくりプロジェクトフォーラム 報告

堀川貴絵

１．日　時　令和元年１２月１８日(水)１０：００～１６：３０

２．場　所　宮城県仙台第三高等学校

３．概　要

【研究授業Ⅰ・研究協議】

＜1年5組　数学Ⅱ　穀田浩美先生　主な特徴と視点：ICT＆観点別評価＞

内容：2次方程式・高次方程式の章末問題を用いたパフォーマンステスト

章末問題(今回は複数の解法が考えられる問題4題)の別解を見つけながら解く前時の活動を経て、その解法を発表し合い、ルーブリックを用いて相互評価，自己評価する授業だった。４人グループで、発表する人、ipadで撮影する人、評価する人と役割分担がされ、全員の解説の様子が撮影される。その中で評価の高い発表が全員の前で紹介され、その発表のどこが良い点なのかを考え話し合い、先生がその声をうまく拾って全体のものにしていた。

[穀田先生の他の取り組み紹介]

〇反転授業　　EDuPAの動画を視聴してくることが予習

〇ジグソー法を用いた授業

＜1年8組　数学Ⅱ　柏　三恵先生　主な特徴と視点：高大接続＞

内容：大学入試共通テストを意識した高次方程式と整数問題の融合問題に取り組む

定期テストが終わるときれいさっぱりと忘れてしまう生徒たちを見ていて、分野横断的な問題を扱った授業を考えたとのことだった。また、作問も紹介したいという意図があったようだ。

[柏先生の他の取り組み紹介]

〇作問について　　「太郎さん花子さん問題(会話形式)」必ず出題

＜2年1組　SS理数数学Ⅱ　安住　琢先生　主な特徴と視点：ICT＞

内容：数学Ⅲの式と曲線「コンピュータの利用」

スマホを活用して、今後の自学に役立つツールの活用法を学ぶ

使用するサイト：Wolfram Alpha (Wolfram Researchが提供する計算科学エンジン)

ツールの紹介と使い方を習得することが目的であった。ゲーム感覚で次々とプリントで与えられた関数のグラフをスマホ上で確認していた。

【研究授業Ⅱ】

＜1年2組　数学Ⅱ　福井県立藤島高等学校　山内義幸先生　（福井県授業名人）＞

数学Ⅱ「図形と方程式」の線形計画法の典型的な問題であるが、教科書ではまとめとして扱う問題を単元の初期段階で扱いジグソー法を用いた授業だった。

条件がいくつかあり単純ではない問題なので、始めから全体を提示するのではなく生徒と問答しながら１つずつ条件を加えていた。かなり丁寧に行われており、生徒たちはじっくり問題を理解できたと思う。より現実的な場面に近づけていろいろな条件を処理する状況を作るために条件を３つ(教科書は２つ)にしていた。そのことで、与えられた条件を改良することが可能な開かれた問題になっており、儲けるためにどうすればよいかと積極的に問題に取り組んでいた。与えられた課題を解決して満足するのではなく、さらに発展させて考える活動に誘導しており、生徒の思考力が鍛えられると感じた。

【 基調講演 】

ﾄﾗﾝｼﾞｼｮﾝと資質・能力／ｳｪﾙﾋﾞｰｲﾝｸﾞを見据えたｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞ・探究的な学習の発展

学校法人桐蔭学園理事長　桐蔭横浜大学特任教授　溝上慎一先生

○全国400校の高校2年生から大学4年生について「他者理解力」、「計画実行力」、「コミュニケーション･リーダーシップ力」、「社会文化探究心」について調査した結果、高校２年生からほぼ変化していないことがわかった。高校でこれらの力を鍛えられなかった生徒が大学に入っても伸びることはほとんどない。だから、高校段階でいろいろな活動を通して成長させて欲しい。

○進学校の生徒であるほど、親や先生の期待すること(枠)に適応する力はあるが、自分の考えを持つことができない。基礎の理解・定着をふまえて、深い学びを促すことが必要である。

○社会に合わせていく力が落ちているからこそ、協働が大切になってくる。

○アクティブラーニングについて　（ある学校の取り組みにより生徒の変化を紹介）

グループ活動にしたときに話をきいていない生徒や見ていない生徒など、小さいことからつぶしていく必要がある。途中からは改善が難しく、スタートが肝心である。

発表の場面では発表の意義を説いて、生徒がアウトプットしてきたものに声かけをすることが大切である。発表は気持ちよくできなければ次に繋がらないので、生徒とのいい関係を作って欲しい。

４．感　想

生徒に身につけさせたい力を明確にし、その上で教科書の問題を少し工夫することでさらに発展させられることがわかった。失敗を恐れずいろいろなことに挑戦し、失敗しても改善しながら次に活かして授業に臨んでいる様子に頭が下がる思いであった。私自身も情報収集を怠らず、他教科の取り組みも参考にしながらいろいろな授業パターンに挑戦していきたい。今回参観させていただいた４つの授業は、本校用にアレンジして挑戦したい。

宮城県仙台第三高等学校
ＳＳＨ中間報告会・授業づくりプロジェクトフォーラム

参加者　藤原　誠

１．日　時　　令和元年１２月１８日（水）

２．場　所　　宮城県仙台第三高等学校

３．概　要

１０：００～１０：３０　開会行事

１０：４５～１１：３５　研究授業Ⅰ

①英語表現Ⅱ（授業者：角田善繁）

・ペアワークや Writing 活動を通じて自分の考えや計画を伝える活動を行っていた。

・授業中、生徒がスマホを自由に使用して使える表現や背景知識を調べていたことが新鮮であった。

②英語コミュニケーションⅠ（授業者：前田宏美）

・Zoom というチャットミーティングアプリを用いて、仙台市内の留学生とリアルタイムで英語による対話を実施していた。

・グループごとに留学生が一人ずつ対応しており、仙台三高を取りまく環境が恵まれていることを認識させられた。

１１：４５～１２：３５　研究授業Ⅱ

①コミュニケーション英語Ⅰ（授業者：細喜朗）

・「ユニバーサルデザインについて」というテーマで、自分の身近なものの利便性についてお互いに英語で伝え合う活動がメインであった。

・パワーポイントを見ながら生徒たちがスマホを使って授業を進めていた。

②ＳＳ英語表現Ⅱ（授業者：笠間貴之）

・ＳＳ課題研究で研究した課題に関して、英語版ポスターを用いて各グループごとにプレゼンテーションを行い、生徒たちはルーブリック評価表に基づいてお互いに評価するというスタイルであった。本校の課題研究発表の参考になった。

１３：２０～１４：５０　基調講演

「ドランジションと資質・能力／ウェルビーイングを見据えたアクティブラーニング・探究的な学習の発展」

講師：学校法人桐蔭学園理事長、桐蔭横浜大学特任教授、溝上慎一

１５：００～１６：１０　研究協議

・フォーラム参加者が小グループに分かれて研究協議を行った。

・「４技能の活用とパフォーマンステストの課題」について協議したのだが、どの学校も試行錯誤しながら実施しているという現状であった。

・本校においても、英語教員がお互いに情報交換をしながら共通認識を持って指導に取り組む姿勢を持つことが望ましいと感じた。

令和２年１月１５日

令和元年度仙台三高と横手高との相互交流事業について

１　日　程

１月２７日（月）　５校時（１３：３０～１４：２５）　授業見学、授業準備

６校時（１４：３５～１５：３０）

１５組　数学Ⅰ（１回目）　草先生

１７組　コ英Ⅰ（１回目）　武田先生

放課後（１６：００～１６：５０）　情報交換、質疑応答

１月２８日（火）　１校時（８：４０～９：３５）

１２組　コ英Ⅰ（２回目）　武田先生

２校時（９：４５～１０：４０）

１５組　数学Ⅰ（２回目）　草先生

１７組　生物基礎　　中野先生

３校時（１０：５０～１１：４５）　研究協議、授業見学

４校時（１１：５５～１２：５０）　研究協議、授業見学

２　訪問者　　教諭　武　田　　誠　先生（英語科　２年担任）
教諭　草　　陽　介　先生（数学科　１年担任）
教諭　中　野　　剛　先生（理科・生物　２年担任）

３　研修内容　　（１）各教科（科目）の授業実戦
（２）本校の特色ある取り組みについての情報収集
（３）学校運営上の課題に関する情報交換

仙台三高との交流事業における理科研究協議会の記録

佐々木重宏

【研究授業】

日　時　令和２年１月 28 日（火）9:45～10:40

対　象　17HR

授業者　中野　剛先生（宮城県仙台第三高等学校）

分　野　生物基礎「生物の多様性と生態系」

【研究協議会】

日　時　令和２年１月 28 日（火）11:00～11:40

参加者

鎌田孝司、岡本由佳子、小野寺庸、釜田博一、後藤直地、佐々木重宏、高橋里実

加藤華世、渡辺千春、中野剛（仙台三校）

【授業者から】

・今日は、普段、仙台三高で行っている授業と同じ形態で研究授業をしてみた。

・17HR の生徒がよく活動できていて助かった。

・仙台三高では、３名いる生物教員全員がこのスタイルで授業を実施していて、お互いにプリントを共有している。

【質疑応答】

・中野先生が、「明日は、不親切な授業をする。」と昨日おっしゃっていたが、授業のほとんどの時間は、生徒の活動の時間で、先生が説明したりする時間がほぼない、珍しい授業スタイルだな、と思った。

・プリントに沿って、生徒と同じように考えていくと、最後は納得できた。

→中野先生　今日の授業は、少ししゃべり過ぎた方で、実際はもっと説明せずに教師側がしゃべらないようにしている。

・プリントが素晴らしくて、使用している図は、実は工夫されているのではないかと思った。この図は資料集などの図を使用しているのか？

・普段の自分の授業では、一方的にしゃべっているので、先生がほとんどしゃべらない授業スタイルというのは衝撃を受けた。

→中野先生　大学入試の問題から引用したりしている。今回のプリントの図は、東京大学の問題だったかもしれない。

・私も、普段の授業ではすごく説明が多くなっているので、先生のように、あえてしゃべらない授業スタイルにしてみようかな、という気持ちになった。
・普段もプロジェクターを使用して授業をしているのか？

→中野先生　時間短縮のために、自分で買ったプロジェクターを持ち歩いている。

・授業中に、解答の確認をしていなかったが、理解したかどうかの評価はどのようにおこなっているのか？
・学び合いで理解できない下位層のケアはどのようにしているか？

→中野先生　解答の確認はしない。評価は、テストで計っているが、評価の方法は、この後もっと検討しなければならないと思っている。
下位層には、小テストを実施したりしてケアしている。

・先生が話さない分、話した内容にインパクトがあることが分かり、感心した。
・工夫されたプリントだな、と思った。
・生徒たちに退屈させない良い授業だったと思う。
・時間を区切ったスムーズな授業展開だった。
・生徒が主体的に学ぶ意味では、良い授業スタイルではあるが、苦情はなかったか？
・自分も全てを教えない授業を心がけてきたが、中野先生はそれを超越していて驚いた。

→　中野先生　始めた１年目は、苦情があったが、２年目からはなくなったし、成績は今の方が良くなった。